

---

# デュエリスト アシュマ 第九話 黒き卵を巡る旅

高岡 佳司

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

デュエリスト アシユマ 第九話 黒き卵を巡る旅

### 【Nコード】

N5741F

### 【作者名】

高岡 佳司

### 【あらすじ】

殻兵器が謎の集団達に奪われた。それを阻止しようと騎士エディアードも奮戦したが敵わなかった。アシユマたち一行はオロにその事を告げられ、奪われた殻兵器を取り戻す旅に出る。そして対決する新興オロ・エバス財団と七賢人の息のかかったイーチャイルド財団。七賢人の正体は暴かれるのか？SF剣戟冒険アドベンチャー第九弾！デュエリストアシユマ『第九話黒き卵を巡る旅』ただ今参上！

## 主な登場人物

アシユマ・アトー

この物語の主人公。

本名をアシユマ・アトー・ショアク・アシユオン・ヒョウエ・シバと言う。

イレギュラーナンバーと呼ばれる人造人間で、七賢人によって造られた。

年の頃は二十三丁四。

ザンバラにきられた、少し濃い目の栗色の髪の毛。

しなやかで猫科の動物を連想させる鍛えられた肉体。

彫の深い端正な顔立ちに、髪の毛と同じ色で、深い影と虚無感を湛えた瞳。

どこか暗い影を刷いている、美形の青年。

謎の多い刀、『万人殺しの妖刀・鬼虎』を遣う。

先のイルドリア武道大会で非公式ながら優勝し、先日ドラステイヌ共和国主催の武芸大会の優勝者と対戦し勝ちをあげ、これも非公式だが、武器を扱う武芸者としては世界一となった。

世界屈指の剣士である。

アップルトン王家のアーチエルとは将来を誓い合った仲。

恋人同士でもある。

アーチエル・アップルトン

栗色の長く伸びた髪の毛に、栗色の潤んだ大きな瞳と、濡れたような桜色の唇を持ち、黙っていれば人形かと思まごうばかりの美形の少女。

レキシタニア王国の王女である。

ただ、人形のようにと言われれば冷たい印象を与えがちだが、見てみれば温かみがあり優しい感じのする少女で、事実、その通りの物を持つ少女である。

破壊の権化『バヴェル』のキー。

それが故に様々な勢力からその身を狙われる。

弱点といえば、戦いにおいて敵味方構わず、極端なほど血を見るのと死人が出るのを嫌う事。

最近は自分も戦闘に出る機会が多くなった為か、多少皆の行動も、分からないではなくなったが。

また、アシユマと恋仲であり、将来を誓い合った仲でもある。

オルバニアン・マグマイヤー

本名をルーラン・ノリトレアと言う。

ノリトレアの正式な王位継承者なのだが故あって今は黒龍号で寝起きをしている。

刀と銃、両方にいいセンスを発揮し、また、魔導機兵に乗らせれば右に出るものがないほどの腕を見せる。

また、好むと好まざるとに関わらず、喜怒哀楽のはっきりした性格である。

ヨディ・ヨフル

サイコ・フライヤー『黒龍号』の艇長。

年の頃は二十六。

紺碧のストレートのロングヘア、細面でどこか人懐こい顔立ちをしている。

この若者普段は馬鹿なことばかり言うが、時々剃刀を思わす鋭い事を言つては皆を驚かす。

その正体は、盗賊『ダスト・モンキー』。

しかしのみならず本当の顔はアルステイン・ノリトレア。

ノリトレア王国の王子であり、オルバニアンの義兄に当たる。

しかし正体を知っているのは、アシュマとオルバニアン、そしてアベニ爺のみである。

アルミナ・ラ・シア

言いたい事は、はっきり言う。

口の悪いのが玉に瑕。

戦利眼なる特殊な能力を持つ、身の丈程の大剣使いの少女である。顔かたちは目鼻立ちがはっきりとしていて、きりつとした美少女である。

眼帯を取って両目が開けば赤い眼と黄金に光る眼が見れるはずである。

女賞金稼ぎで、別命『隻眼のアルミナ』

リイナとは喧嘩友達でもある。

エファール・ソーフア

年齢は二十三。

アシュマを好いていた事もあるが、今はヨデイの事が好きで好きでたまらない様。

恋人同士でもある。

剣の實力は折り紙付き。

最近密かに鞭使いだった事が判明。

ただし実力の程は分からない。

玉に瑕なのが怒りに任せると周りが見渡せなくなると言う事。  
借金癖があること。

そして酒癖が悪い事。

これさえなければ優しく美しい女性であると言えよう。

『閃光のワルキューレ』とは彼女の事である。

キュポア・アップルトン

レキシタニア王国の第二王女。

アーチェルの実妹。

姉のアーチェルより二つほど年下。

姉に似ているところは少ない。

ただし目鼻立ちにははっきりしている、これもまた美形。

特に特徴的なのが大きい栗色の瞳。

髪の毛はいわゆるプリンセスカットと呼ばれるボブヘアで色は

姉より濃く、黒に近い、栗色。

常にお転婆だが、時に弱い部分も見せる。

物事をずばずば言うが、心根は優しい少女である。

多少我侷な所もある。

リイナと歳が近い事もあり、彼女とは非常に仲が良い。

リイナ・アナン

アーチェルの級友。

体に似合わず大振りで鉈の様なククリを使う。

正体はアシユマと同じイレギュラーナンバーでコードネームは『  
蜘蛛』。

それ以外はまだ幼さの残る美少女で、とてもそんな事が出来るとは銀龍スタッフのなかでも、思っていないだろう。

この少女、二重人格であり、優しい可憐な少女の時もあれば、寡黙でそのくせ口を開けば口が悪く性悪に見えることもあるが、性根はとても優しい。

アルミナとは喧嘩友達でもある。

アルヌー国のレンヌ王子とは中々良い仲であるが、そのことからかわれると泣く。

アン・デボン

アーチエルより三つ年上。

いわばアーチエルの姉的存在。

元々はアップルトン家のメイドとして働くが、数奇な運命からかアーチエルと共に戦場にも付いて回る不遇な人。

ただし本人はアーチエルのお側にいられるだけで幸せらしい。

アベニ・ロー。

以前はどこぞの国で草スパイをしていた。

歳は老いているが、腕は確か。

今は、故あって黒龍号にいて、ヨデイ付きの間者になっている。皆に言わせれば影が薄いのだが、それが忍びの者にとっては眼目であるといって喜んでいいる。

色々と重宝しているようだ。

最近アシユマ直伝の秘剣・朧霞と秘剣・空蝉を使い多大なる戦果を上げている。

アリシアナ・コクレト

黒龍号の整備士

メカニックのスペシャリストである。

程よく鍛えられ、引き締まった肉体を持っている。

鼻筋の通った中々の美人でもある。

軍曹。

リン・シャオリン

オロ・エバス、クーロン支店の総責任者。

エドス・アップルトン

レキシタニア王国の国王。

アーチエルの父。

エースティー・アップルトン

レキシタニア王国の第一王子で第一位王位継承者。

アーチエルの実兄。

オロ・エバス

汎用型電腦装置などの基本OSを作って財を成し、今では、鉄鋼

や貴金属、造船や飛行機、果ては魔導機兵の様な兵器なども取り扱っている豪商。

今や世界の五パーセントは彼の財力とまで言われ、唯一七賢人と対等に渡り合っていける数少ない人間。

アリア・エバス

濃い黒で少し巻き毛で光沢を放つ髪の毛を持ち、瞳は黒く二重の瞼には長いまつげを湛え、唇は濡れたような光沢を放ち、エキゾチックな感じのする美少女。

オロ・エバスの実妹。

テロリストに拉致され陵辱されるといふ悲しい過去を持つがアシユマの治療を以って記憶を消された。

オロはいたく彼女を可愛がる。

ルーラン・ノリトレア

ノリトレア王国前国王。

実際はガルマインに仕立て上げられた偽りの王。

顔かたちがオルバニアンに似ているものの線の細い少年である。

が、その実は、オルバニアンとは双子の妹、本名は『サーナリア・ノリトレア』。

女性であり中々の美形。

モ二八・ノリトレア

齡十歳のノリトレアの女王。  
ガルマインの道具となり果てている。

フェリア・ファソーイ。

ノリトレアの名家ファソーイ家の姫君。  
レキソタニアのファソーイ家といえば、王家に忠実な事で知られているが、いざと言う時には命を懸けて王に諫言する家訓で知られている。

ミス・ケリー・サトウ

学園都市スコラの校長。  
敏腕だが規則に厳しい。

ミカ・タキオ

アーチエルの級友で親友。  
心根の優しい少女。

サクラコ・セタ

アーチエルの級友。  
イーハンの家老の娘。

エミル・フォルテ

アーチェルの級友。

エディアード・ウルフィ

キャサフローレン付きのナイト。  
大剣を遣う。

イレギュラーナンバー 零巻参考

エント・ソーフア

エファールの父親。  
ドラスティス共和国の地方領主  
ソーフアの流儀の剣術師範。

ネリア・クーシ・カハデクサン

イーン・イーチャイルドの車椅子押し。

イーン・イーチャイルド

主に兵器産業を筆頭に、医療、電気機器、航空機、素材産業、メディア産業など、世界中に散らばっている企業を取りまとめている  
コングロマリット、イーチャイルド財閥のその総帥。

ジョージ・W・サバナ

アヘイビア連邦共和国の大統領。

イヒラシバ十六世

タイン教の総本山レジルデ市国の現法皇。

ゲール

七賢人のマシンナリービーイング（サイボーグ）の頭領。

ラナリア

七賢人のマシンナリービーイング。  
テレパシスト。

ホーム

七賢人のマシンナリービーイング。  
腕がドリルになっている。

フィサ

七賢人のマシンナリービーイング。  
対アシユマ・アトー用BB兵器を持っている。

タロス

七賢人のマシンナリービーイング。  
強力と素早さを兼ねるマシンナリービーイング。

エゲレ

七賢人のマシンナリービーイング。  
超音波を発する。

オドロ

七賢人のマシンナリービーイング。  
トカゲのなりをしている。

ルル

七賢人のマシンナリービーイング。  
超高速の攻撃を仕掛けてくる。

アビス

イレギュラーナンバーズ統括者。

アーヌ

鬼虎でも斬り裂けぬ硬い鎧を身に纏い、アシュマを付けねらう七賢人配下の剣の達人。

その腕はアシュマと拮抗する。

七賢人四人衆の内の一。

アシュマ最大のライバル。

## 序節 異変

人の戦い。

神人の戦い。

血脈を同じくする者の争い、大地を血で染める事になるだろう。  
これは嘆かわしい事である。

招かれざる者に蹂躪される事、これは辱められる事に等い事である。

人の血を天秤で量り売る。

これは人の所業にあらず。

この間、偉大な龍はその眼を潰される。

祝福されぬ命の者、地上に災いの黒い太陽を以って大地を抉る。

大変多くの者を亡者にさせる。

なんと恐ろしい事か。

おお、神よ、私はそれも見た。

嘆かわしい事である。

この世にあつてはならぬ光である。

これで終わりではない。

これが始まりである。

円形の大陸に住まうもの、既に幸福では無い。

その都に住まうもの、半分はもう福音を聞けない。

人々は炎によって半分を失う。

また、その人、巨大な亀に乗って神の都を潰そうとするだろう。

これ、はなはだ不忠な事である。

一時、地上に黒き光を見る。

私はそれを見た。

これはちいさいこそすれ人々を覚めぬ悪夢に導くものである。

その光こそこの世に有ってはならぬものである。

太陽の影で

我らが故郷、戦場になるであろう。

我らが故郷をそれはまさに土足で踏みじめる行為である。

一頻り蹂躪された後、悲しきかな、兄弟と相見えなければならぬ。

その間、祝福されぬ命の者、敵の軍勢の半分を押さえる。

祝福されぬ命の者、既に鬼を携えており、対になる者、鬼を携えて来る。

この時、祝福されぬ命の者と対になる祝福されぬ命の者相見えるだろう。

この一対、空に予兆を残す。

私はそれを見た。

はなはだ不吉である。

このとき知恵の半球が出現するのを見た。

これにより我らが兄弟の諍い一旦は治まるだろう。

されど将来にわたり禍根を残すものである。

美しい処女の獵人と、愛と美の女神と、軍神と、大神と、農耕の

神。

それらが一つに重なる時、それは秘密が明かされる時。  
対の鬼の秘密が語られる時。

しかしその秘密を語る時はあまりに短い。

その前後、龍は相反する痛みに身を囚われ、聖廟、鷲、鎌等は、  
祝福されぬ命の者による辱めを受けるだろう。

この日、又、天空に大地があつて、地上の人々、大層恐れ戦き混  
乱する。

あの黒き太陽がこの世を救うとはこれ皮肉である。

嗚呼、私はそれを見た。

幾夜に渡りあの黒き光の正体を掴まんと、黒き卵を欲するものが  
いる。

幾つかその黒き卵奪われる。

私はそれを見た。

祝福されぬ命の者、黒き卵を潰す為、世界中を捜しまわる。

その間、聖なる学び舎、鷲に襲われる。

学び舎の者、祝福されぬ命の者に助けられ大事には至らない。

この間一人の黒き野心家一人大地に立つ。

私はこの人を見る。

甚だ傲岸不遜な人である。

鷲、これを認めず爪と嘴でこれを喰らわんと欲するだろう。

此処に祝福されぬ命の者、壁になり、盾となり、矢となる。

その後、もう一人の黒き野心家、鷲の為に敵を打ち倒す剣になる。

私はこの人も見る。神の人に近い間柄である。

聖廟もこれに立つが、頭を射抜かれ大事に至る。

嗚呼、なんと私はそれを見た。

聖廟の信徒激しく怒り、世界を震撼させる。

二人の黒き野心家相容れず、ぶつかるだろう。

この時も祝福されぬ命の者、一方の野心家の盾となり、矢となら  
ん。

病に伏せるもその役目は果たすだろう。

その働き悪魔の如し。

私はそれを見た。

その後一人の野心家もう片方を追いかけてこれを撃ち滅ぼす。

黒き野心家鷲の巢の中からひとり立つ。

ついに月へと至る道を人は見つけるであろう。

祝福されぬ命の者、われの僕の末裔どもを襲う。

祝福されぬ命の者の勝ちとなるだろう。

その後、黒き卵世界に散らばる事になるだろう。

嗚呼、これは有ってはならぬ事である。

祝福されぬ命の者、その光に飲み込まれこの世より消えさせる。

驚くかな、もう一人の祝福されぬ命の者現れし時、祝福されぬ命  
の者この世に出現す。

私はそれを見た。

世界に散らばりし黒き卵の所為により、世界より戦船集いて争う。

これ世界の行く末占う戦である。

しかしこれの勝者なし。

この間に龍は頭がすげ替わる。

またこの間に日もまた頭がすげ替わる。

この前後に天変地異あり。

祝福されぬ命の者と、祝福されぬ命の者との戦いがある。

私はそれを見た。

破壊の権化と祝福されぬ命の者との戦いがある。

その間、神人、天高く月におられる。

私はそれを見た。

神人、祝福されぬ命の者と月にて相見える。

祝福されぬ命の者、さながら悪鬼の如し。

私はそれを見た。

巨大な閃光が見えた。

是にて新生人類は滅亡する。

私はそれを見た。

我が予言もこれを以って成就する。

神は全てを見通せたり。

かくあるべし。

ターシャーン。

ここはアヘイビア連邦共和国。

大統領府。

大統領府裏庭の記者会見場。

ジョージ・W・サバナ、アヘイビア大統領が定例記者会見を行っていた。

「大統領、先の謎のフライングロツクがクーロン人民共和国襲った件について一言お願いします」

「クーロン人民共和国だけでなく先のフライングロツクで被害にあわれた方にお悔やみを申し上げます。特に我が国を我が国民を命を掛けて護ってくれた、アヘイビア艦隊に敬意を表したい」

「クーロン人民共和国は二つ目の首都を落とされて、国内的には国

政の空白化、ゲリラによる政情不安定化。国外的には、株の暴落、経済活動の停滞、これらについて一言お願いします」

「先ず経済活動に関して、これは何の心配もありません。この件、特に株にかかわる事で損害を出した人には国が必ず補填します。クーン政府に受け入れる余裕があるのなら、我々が治安回復をお手伝いしても良い。アヘイビアは、国民の為の政治をするし、世界の治安のために全力を尽くします。幸いにして我がアヘイビアにはアブシュブシを旗艦とする、新アヘイビア艦隊があります。世界最強の艦隊です。これさえあれば、何があっても大丈夫です」

「大統領」

そう言つて側近の者が側によつて耳打ちして、当の大統領が、  
「諸君。ここまです。それでは、次回にまた」

そう言いながらスタスタと歩いていつてしまつた。

大統領が向かつた先にはサイコフライヤーが待つていた。

そして側近の者と何かを談笑しながらサイコ・フライヤーの方へ寄つて行く。

「クーンの新政府と言つても、役所に毛が生えた程度だというじゃないか。これで援助と言つのも笑つてしまふじゃないか。彼等には煮え湯を飲まされた。ザアマミ口と、言つてやりたい。それに対して、我が艦隊は、ダークファイアーは惜しかったが、そのほかは老朽艦だ。フライングロツクにやられて、艦隊の入れ替えがスムーズに行つて、寧ろ丁度良かったんじゃないのかね？」

そこへ慌てて別の側近が走りよつてきた。

「大統領！ まだ、マイクが生きています！」

幸いにして大統領の失言はCM中に話された為公衆の耳に届く事は無かつた。

のち、大統領府はこの音声を、マスター、コピー共に圧力を掛けて握り潰した。

リスパダハル共和国が遅まきながら三日後に、先の殻兵器問題で大量破壊兵器査察を受けることになった。

その夜……。

つまり核査察を受ける二日前の夜……。

『死んだ』殻兵器が眠る王宮の地下へと近寄る群れが一つあった。

彼らは、闇に紛れ一陣の黒い風となつてリスパダハルの旧王宮の地下室へと向かつていた。

彼らは『影の物』だった。

中身はおそらく、黒尽くめの男だろう。

中にはナンバースも含まれていたに違いない。

彼等は果たしてノリトレアの手の者なのか、それとも何処かの手の者なのか？

あるいはノリトレアで訓練されて、第三国へ貸し与えられたものなのか？

現時点ではなんとも言えない所であった。

どちらにしろ胡乱うろんな者達が旧王宮の地下室へ向かいつつあった。

その前に立ちほだかる者が一人。

鎧甲冑に身を固め、大剣を背に、碧眼金髪の青年が立ちほだかった。

その青年が口を利いた。

「お前らどこへ行く？ この先にある殻兵器保管庫だったら道は塞がっている。他の道を通つて帰れ」

青年はイレギュラーナンバー零巻参番、エディアード・ウルフィその人であった。

膨らむ殺気、それを察知する、エディアード。

エディアードの右手がその剣に掛かる。

エディアードを中心に『影』どもが二重の円陣を組む。

そして徐々に間隔を狭めて来る。

『影』どもは、相打ち覚悟、玉砕覚悟で爪を伸ばし、一気に包囲の輪を縮めた。

エディアードはその大剣を引き抜き一気にぶん回した。最初は力任せに、最後のほうは遠心力で『影』をぐるり一周切り裂いていた。二重の内側の輪は崩れ去った。外側の輪は攻めあぐねていた。

「そちらが来ないのなら、こちらから行かさせてもらうぞ」

明らかに『影』は動揺していた。

エディアードは躊躇ちゆうちゆうなどしない。

戦機と見れば躊躇ためらわず剣を振るう。

今がその時だった。

エディアードは一陣の血風の如く敵を正に斬り裂いて行った。

敵の数も残り僅かとなった時に、向うの殻兵器保管庫から爆音が聞こえてきた。

「!!! 伏兵がいたのか!？」

それも十や二十などと可愛い物ではない。百や二百は居るであろう。

皆、殻兵器を奪いに来たようだ。

「くそっ！ これだけの数を相手にしろってのか！ ……アイツならやっつてのけるんだろうな」

今斬った数はせいぜい二十。

「くそ！ やつてやる!」

エディアードは悪態をつきながら、剣をひきつけた。

向うを良く見ると『影』同士でも小競り合いをやっている。

いや、影同士ではない。

別の勢力が混じっている。

これらが殻兵器を奪い合って殺しあっているのである。

まるで多くの勢力がこの一晩に一同に会し殻兵器を奪い合っているようにも見える。

(これならば……)

だがエディアードは、次の瞬間敵しい立場に立たされる。

サイコ・フライヤーの空挺部隊が空から降りてきたからだ。

その数およそ二百。

(くそ！ こうなったら、腕がねじ切れるまでやってやる！！)

エディアードは闘志を新たにした。

エディアードは正面にいる敵から粉碎し始めた。

そして殻兵器を持っている部隊に対して攻撃を掛けるべく突撃を開始した。

朝、明け方まで大勢の人間が旧王宮で戦っていたようだ。リスパダハルの警察当局に通報があった。

リスパダハル警察当局はすぐさま殺人科、鑑識科なども引き連れて旧王宮へ乗り込んでみたものの、人などもぬけの殻。

ただ、異様に大量な血痕と(中身は死んでいるが)大量の殻兵器が盗まれている事が判明。

そして旧王宮の壁の一部分が崩され賊はそこより侵入しそこから脱出を図ったものと推定。

近くの民家の聞き込みに入った。

ただ、いくら使われなくなったからと言って王宮は王宮。

近くに民家などは無い。

朝方、当局に電話を入れてきた青年らしき人物の正体も掴みきれず居なかった。

当局はこの青年を参考人として追いかけることにした。

## 第一節 日常の風景

いま、アシユマ達はレキシタニアにいる。

静けさの残る朝もやの中、優しい朝の光を浴びながら、アシユマ達はテーブルに着いていた。

今、その、静けさが終わろうとしていた。

その最初の一言は、リイナの言葉だった。

朝の食事の後であった。

「アーチエルや、キュポア、アンなどは王家所縁のものだから良いだろうが我々は『客』と言う立場に甘えてはいないか？ もう少しこの国の事を慮ってみてはどうか」

アーチエル、キュポア、アンの三人はぼかんとしていた。

「つまり、は、だ。食材持参、ない食品は自分で現金にて買い求めてくる。小麦粉などはいくらあるからと言って、甘えて買わなかったりしたら駄目だぞ？」

「リイナ……と、言ったかの？ 娘御よ」

「はい。陛下」

「そなた達は客人であるゆえ気にすることではない。よいのじゃ」

「いけませんぞ！ 王よ。ここに来て自前の機体の整備するろくにしたらん奴が折る。ヨデイにアルミナに、オルバニアンとは言わんが？ ヨデイにアルミナに、オルバニアンとは」

「僕は、元々整備なんかやったことはありません。全て報告書で済ましてもらってまゝです」

ヨデイが言う。

「それがイカンと言っているのだ！ ヨデイ。その分の賃金を村の人に払えといっているんだ！ 彼等も仕事を持っているのだぞ。決して暇なわけではない」

「払ってますよ。ちゃんと。しかも、オロ・エバス財団のほうから」

「へ？」

リイナが頓狂な声を出した。

「僕の場合はオロ・エバス財団からこちらに骨を埋めてもいい、と言う技術者が来ていますね。その方々に黒龍号の整備をお願いしています。それに近々この王宮の隣に新しい王宮が出来る予定ですね。その庭の一角にサイコフライヤーの格納庫が出来まして、その技術者集団に、今後黒龍の整備を任せようと思っている。勿論その人たちはここに骨を埋めるといつても、社会的には『出向』扱いだから、僕には支払い義務は、一切ないのです」

「うそ？ そうなの？」

リイナは信じられない様子だ。

「一応そういうことになっておる」

エドス王はそういった。

「じゃあ、食費だ！」

「ん~~~~むむむ」

ヨディは答えに窮シヤクした。

「アルミナはどうだ？ くくく」

「うぐぐ……」

アルミナも答えに窮した。

払おうと思えば払えるのだがリイナに指摘されて行つのが、余程悔しいらしい。

「おれ、払っても良いぜ。自分で食うものぐらい金は払うぜ。それが義理つてもんだ」

そう言ったのはオルバニアンだ。

「そうそうそれぞれ！ アタシもそれがいいかった」

アルミナもそう言った。

「ふむ。今月金欠病なんですがね。しょうがない払いましょ」

ヨディが言った。

「そういや、コクレト軍曹さんはどうなのさ」

アルミナは訊いていた。

どうしても、アリシアナ・コクレトの事が気になるらしい。

正確に言えばオルバニアンとアリシアナの事が気になるのである。  
何も無いのに。

「あっ、じ、自分は財団本部より給付を受けているので」

「くくく、エフアールはどうだ？」

「私は払えないわ。つけといて」

エフアールはそう言った。

「なんだ？ それは!？」

リイナが叫んだ。

「借金があるのよ。その返済が中々厳しくて……」

「いずれ払ってもらうからな！ アベニ爺は？」

「ん？ ワシか？ わ、ワシは払っても良いぞ」

アベニが言う。

「いいよなあ、アーチエルは支払うモノが無くてよう」

アルミナが言った。

アーチエルはうるたえて、

「な、何を言っているんですか！ 皆の食費の事は支払わなくてよ

いと……お父様もその様に……」

そう言った。

「姉様を虐めるなこの眼帯女！」

「なんだとう？ このちびっ子！」

「ちびっ子、いうなあ！ 無礼であろう!!!」

キュポアが言う。

「まあ、まあ、キュポア様、心安らかにお静め下さい」

侍女のアンがキュポアを諫める。

「……アン、そうは言うがなあ……」

「それにいいよなあ、ノリトレアの偉い方々は。支払いも何も全て

フリーパス。アップルトン王家におんぶに抱っこだ」

アルミナは言い放った。

「なんだと!？ 聞き捨てならん、そこになおれ！ 成敗してくれ  
ん！」

こつ息巻いた、王族風の好男子はノリトレアのルーラン前国王もとい。

サーナリア・ノリトレア。  
女性である。

そして、彼（彼女）にはパートナーがいた。  
名をフェリア・ファソーイ。

ノリトレアの名家ファソーイ家の姫君であった。

いまや朝食の場は大混乱と化して大騒ぎになっていた。

アーチエルの隣に座っていた青年が席を立ち、王の側に行き

「親父殿、暫しお耳を閉じていただきたい。エースティー王子も

そう言つと、大きく息を吸い込み、

「朝食の場で何をしておるのか！！ この大ばか者ども！！」  
だいおんじょう  
大音声に言つた。

その大声は皆を黙らせるのに十分であった。

その大音声の主はアシュマ・アトーだった。

「払うべきものは払う。払わないものの立場、払えないものの立場の事を良く考えるように！ 彼等だつて好きで払わずにいるのではない」

「ちなみにアシュマはどつちななの？」

アルミナが言つた。

「俺は当然払うほうだ」

アシュマは淀みなく言つた。

「アシュマさま。アシュマさまはもう身内同然なのですから、支払わなくとも構わないのでは？」

アーチエルが言つた。

「と、言うより婿殿に限らず、皆支払わなくても良いものを」

エドス王が続いた。

「いえ、ここは払える方には、払って頂きましょう。父上。ここに  
いるお客人にも、当家も決して内情が豊かでない様に見えるのでし  
よう。事実そうなのですから。そのような所から無銭で食事であり

つく事に、引け目に感じておられるのではないでしょうか？ ですが、もしその様にして頂くのであれば、きっとお客様も引け目を感じなくて良いのかもしれない。」

「あの……私は払えませんよ？」

エファールは念を押すように言った。

「そういう方は致し方御座いません。払う事が出来ない人として扱うのでご安心下さい」

「微妙な表現だわー。怒って良いのか、肅々と受け止めれば良いのか」

エファールは困惑した。

「ならば、エファールさんの分は我が、オロ・エバス財団で持ちましょうか？」

「おお、それは有り難い。失礼だが貴女のお名前は……」

「これは申し送れました。アリア・エバスと申します」

そこにはアリア・エバス嬢、つまり、オロ・エバスの妹がそこにいた。

その後アシュマに恋をして叶わなかった。

そのアリアに眼が釘付けになった者がいた。

アリアに名を聞いたその本人、エースティー・アップルトンである。

「そうですね……では早速手続きを。役所のほうまで」

「おいおいおい！ エースティー王子！ 聞きたいんだけど、それは、エファール姉さんだけ甘やかす事にならないか？」

アルミナが言った。

「私も私のことを私抜きで決められるのはちょっと癪ちやくだわ」

エファール自身も言った。

「あ、あら御免なさい。てっきりそれで良いものだと勝手に……」  
アリアが自分の早合点を詫びた。

「いえ……いいのよ。宜しくお願いします アリア様あ」

皆はエファールの豹変振りに呆れた。

「姉御！ 姉御にやあ矜持ってえもんがねえんですかい！？」  
アルミナが言う。

「矜持の事は置いておいて、今月本当にお金がないのよ」

「はあ、情けない。一体何をどうすれば、二千五百万超のお給金を、すっからかんに出来るのやら」

「では、手続きがありますのでこちらに来ていただけますか？」

「ええ、分かりました」

エースティーがアリアを誘っていた。

それをちらりと見たエフアールは

(これは中々いい雰囲気だわ)

そう思った。

「エフアール様、貴女も一緒に」

アリアから声が掛かった。

「アリア様、申し訳ありませんが、急な用を思い出しましたもので、アリア様に全てお任せしとう御座います。勝手な言い草で恐縮ですが宜しくお願いいたします」

「そうですか。分かりました。ではその様に致します」

何かを気にする風でもなく、ごく自然にアリアは言っていた。

エフアールは静かに二人を見守った。

午前中は皆、自分の好きなことをした。

オルバニアンとコクレト、アルミナの三人は魔導機兵『ラヴァー』の整備をしていた。

ルーランは、フェリア、キュポア、リイナと共に談笑していた。

アリアはエースティーと庭のバラ園へと、言っても小さい物だったがで散策を楽しんでいた。

中々いい雰囲気である。

アンは黒龍号の椅子の上でこっくりこっくりと舟をこいでいた。

アーチエルは遅れ気味のスコラの授業を取り戻すべく勉強に勤し

んでいた。

だが、どうしても分からない事が出て来る。  
そうすると、アシユマのところへ訊きに行く。

(今頃だとアシユマさまは……)

思いながらアーチエルはとてとてアシユマを捜す。

アシユマはいつものテラスにいた。

ただ居ただけなら良いが、なんとアシユマは昼間からサケを呑んでいた。

よく見てみると、アシユマだけでなく自分の父親、即ちエドス王と一緒に飲んでいた。

「まあ！ お二人して、昼間からお酒などを飲んで。あまり關心しませんよ」

少しおどけてアーチエルは言った。

「まあ、そういうな、アーチエル。王の苦労と言つものも少しは分かってやれ」

アシユマが言った。

「すまんろう、すまんろう。婿殿」

そう言つてエドス王は泣いていた

泣き上戸らしい。

「しかしこの一角だけお酒臭う御座いますな」

アーチエルは顔をしかめ、そう言った。

「そんなに顔をしかめるな。美人が台無しだぞ？」

アシユマが揶揄した。

「さあ、新しいサケもってきましたよ」

ヨデイとエフアールがやって来た。

「ヨデイ様？ エフアールさんまで？」

そう言つてアーチエルは椅子に座った。

「そういわないで、アーチエル。そうだあなたも飲みなさいな。お父様もいるから大丈夫でしょ？」

「それは大丈夫ですけど……お父様の許可がないと……」

アーチエルは呑む事に消極的だった。

「よい。差し許す」

「んもう、お父様だったら！ こう言う時は普通、許さないものですよ？ 若い娘が昼間っから……わたくしはアシユマさまにお勉強を教わりに来たのに……」

アーチエルはどうやらあまり呑みたくなかったらしい。

しかし、サケを注がれた杯を空けてしまった。

「どれ、勉強？」

アシユマはアーチエルの側によると、

(呑みたくないなら、杯を空けなければいいじゃないか)

アシユマはひそひそとアーチエルに話した。

(それはそれで御座いましょうケド……)

「ん……？ 何々？ この魔法の言語魔方陣の構造から導かれる

魔法を答えよ……か。えらく高等な問題だな？ 答え見たのか？」

「いえ、見るの癪だったもので…… 答え見る前にアシユマさまに教えていただくかと思ひまして……」

アーチエルはまたお猪口のサケを、きゅっとしてしまった。

(あ、いけない！)

そう思いつつも、アーチエルの杯にはサケが注がれてしまった。

「聞いているか？ アーチエル？」

「あっ、はっ、はい！」

「さてこれはとんでもない問題だぞ…… まず特徴的な三重構造の円陣と内側にかかれた三角形、これは何を意味する？」

「えゝ三に三だから六行詩の魔法と同じ効果を発します…… よね？」

「なんて酷い問題だ。六行詩を問題にするわけだからな。この形の六行詩は聖か、暗黒かで二つに分かれるがどっちかな？」

「三角形の頂点が上に来るので…… 聖属性だと思います」

「正解」

ここで、アーチエルはキュッとまた一杯やってしまった。

「おや？、アーチエル姫イケますな」

ヨデイが言った。

そしてお猪口にまた酒を注いだ

「あ、あの、ヨデイ様？これ以上はわたくし酔ってしまつので……」  
「まま、良いじゃない」

その時、ルーラン達が廊下を伝つてテラスへやつて来た。

「なんじゃ、楽しくやつておるではないか。お、エドス王もおられるとは、余もこの輪に入れては下さらぬか？」

「おお、ルーラン殿。ささつ、入られよ！」  
エドス王が招きいれた。

「と、言つても場所が御座らん。うーむ。どうしたものか……」

「それなら、テーブルくっつけて椅子並べりゃ良いんじゃない？」

ヨデイが言った。

「おぬしはよくもまあまあそうぽんぽんと、考え付くのう」  
ルーランが感心した。

「殿下、大切なのは柔軟性です。政治も何も」

「流石はヨデイ殿。ここに、エースティーがおれば今の話、役に立つたろうに。あ奴に足りないのはその柔軟性じゃ。それさえ備えればワシはいつ隠居しても構わぬのじゃ」

王エドスが嘆息した。

「父上。その不肖の息子はここにおりますぞ」

見るとエースティーがアリア嬢と共にテラスへとやつて来た。

「おおつ！ エースティー。丁度良かった、話がある。ちよつと来なさい」

エドス王がこつちへ招いた

「ち、父上。アリア様もおられるのですよ？ あまり恥かしい所な見せないで下さい」

「う、むう」

エドス王が唸った。

「……分かりました！ この呪文はザ・ライフですね？」

と、アーチエル。

「正解。ちよつとこのテキスト貸して」  
アシユマはアーチエルの頭を撫でた後、テキストを借り上げ、ざつと目を通した後、携帯でスコラにコールをした。  
この頃になると、アーチエルは手酌でサケを飲み始める。  
それは、アシユマも気付かないことだった。  
基本的にこの家系は、酒好きらしい。  
数コールの後、誰か職員が出たらしい。  
アシユマはその職員に自分の姓名を伝えて校長に出る様にと伝えた。

暫らくして、

『はい、ケリー・サトウです。どなたですか』

ケリー・サトウが出た。

「校長、ご無沙汰してます。アシユマ・アトーです」

『あらまあ、鉄砲玉みたいに、あれつきり連絡も無しで』

「済みません。早速ですが校長、魔導法術2のテキストの二十三ページ、五十六ページ、七十六ページに不適切な設問があります。ご確認の上削除を」

『……七十六ページと。……本当に貴方せつかちねえ。私帰るところだったんですけれども』

「これは失礼」

『少しは最近何しているのかとか、元気にしているのかとか、その様な話題から入っていく物でしょうか？ まあ、貴方らしいといえば貴方らしいですけれども』

「済みません、そういった類の話題には苦手なもので」

『本当に貴方らしいわ。ところでそこはどこなのか？ 随分騒がしいけれど……』

「……ここはレキシタニアの王宮です……」

『まあ、騒々しいから居酒屋か何かかと思いましたよ』

「まあ、皆で酒盛りしてますから」

『お仲間で？ ヨディ先生はお元気？ あの人は貴方と同じくらい』

手が掛かりましたからね』

そこへきて、アーチエルがやって来て、

「アシユマさま、どなたとお話してるんですかあ？ まさか浮気相手とお話してるとかって事ないですよねえ？」

（アーチエル！ コイツも酔っ払っているのか！？）

見ると二合徳利が転がっている。

アーチエルは完全に出来上がっていた。

「うふふふ……冗談ですよ、アシユマさまあ。お電話変わっていただけますう？」

そう言つて、アーチエルはひょいとアシユマの携帯端末を取り上げてしまった。

「貴女がわたしのだんな様を横取りしようとする女の人ですか？」

『アーチエル・アップルトン……あ、貴女酔っているのですか！？』

そこに親御さんはいるのですか！？』

「あ、校長先生え、お早う御座います。うふふふ」

『こちらはもう夜だと言うのに……あ、時差ですか』

「もう、お昼の十一時半ですう。うふふふ……」

『まあ、アーチエル・アップルトン！ 貴女と言う娘は！ 少し、

悪ふざけが過ぎましてよ』

アシユマが横から出てきて、ひょいと自分の携帯を取り戻してしまつた。

「あつ、あつ、アシユマさまあ……」

「校長聞こえますか？ こちらはこんな感じなのでまた、改めてご挨拶を……」

『宜しいでしょう。これぐれもアーチエル様にはお酒を飲ませすぎないよう』

「はい、では、失礼します」

周りを見ると、既にそこはもう、混沌となっていた。

「アーチエル、少し休もう……」

「いやあ、もつとお、お酒え」

「アーチエル、これだと今度校長に会いにくくなるぞ?」

「それは、いやあ……………今度行くの?」

「いずれ復学するんだろ?」

「いま、センセに掛けるう。もう一度掛けて謝るう」

「ここら駄々をこねない。今日は少し休んで夕食ごろまたおいで? ね?」

そう言つてアシユマはアーチエルを抱きあげる。

「いいなあ、姉様は」

キュポアが、アシユマの側に来ていて、ぽそりと呟いた。

「キュポア」

アシユマがキュポアを認めた。

「どこへ行くのじゃ? 姉様の部屋か? えっちい事はするのか?」

「アーチエルの部屋へは行く。えっちい事はしない」

「ふーん……………どうだか」

キュポアは、あさつてのほうを向いていた。

「アシユマさま、『ぎゅ』……………して……………」

アーチエルが周りの事も気にしないで言う。

「わかった」

そんなアシユマも、アーチエルの抱く力を強めた。

アーチエルは、一瞬苦しげな表情を見せるが、それも最初の内で次第に安堵感に似た安らかな顔へと変わっていく。

アーチエルはこれが大好きだった。

「ほ……………ら、やつぱりじゃ。お主必ずそれをやるのう。昼間っから、こつちはやつてられんぞ」

キュポアは自分の席へ帰っていく。

キュポアのあのキス以来、未だに自分の事が好きで、アーチエルなんかには構っていると嫉妬を起こし、こちらに構って欲しくて来るのかもしれない……………と、アシユマは自惚れた事を考えてみる。

アーチエルは、もう、すうすうと安らかな寝息と共に眠っている。アシユマはアーチエルの頬にそっとキスしてみる。

アーチエルが、ふっ、と目を覚ましアシユマに微笑んでみせる。  
アーチエルは腕を伸ばし愛しい人の首に抱きつき愛しい人の口に  
そっとキスをする。

「すき……」

アーチエルが呟く。

アシユマは思わず強くアーチエルを抱きしめる。

アーチエルは幸せそうだった。

アシユマはアーチエルの部屋まで来た。

アーチエルが抱えあげられながら自分でドアを開ける。

二人は部屋の中に入って、アーチエルがまた部屋の扉を閉めた。

アシユマはアーチエルをベッドの上に寝かせた。

アーチエルは目を瞑りアシユマの次の行動を待った。

アシユマはアーチエルの唇に己が唇を重ねようとして……

「ちっ！ 無粋な」

と、舌打ちをした。

「え？ わたし何かいけない事でもしましたんでしょうか？」

アーチエルが泣きそうな顔をした。

「アシユマさまのお顔……怖い」

アシユマの顔はいま冷酷で残忍な顔をしていたに違いない。

それを……、

「御免よアーチエル。お前に言った言葉じゃないんだ」

アシユマは、『完璧』な笑顔で優しく言ってみせた。

アーチエルはそれがまた怖かった。

アシユマの顔が能面のように思えたからである。

「アーチエル、少し行って来る」

アシユマが言った。

その時の顔は既に鬼か修羅のようであった。アシユマは王宮の裏  
手にある竹林に入って行った。

そこは少し丘になっていた。

竹林はまばらで、細く、柔らかく、これなら鬼虎での戦闘に支障はない。アシユマはそう思った。

その時

「ようこそ我が『城』へ。それにしてもよく我等がいる事が分かったな」

人数が何人かいたが、リーダーらしき男が一際大きな石の上で言った。

「ゲーレと、言ったな？ 『そこ』はお前の城でも『なんでもない』。それに何が『よく我等がいる事が分かったな』だ。あれだけ殺気を放たれば、分かん者でもすぐ分かる」

「君を誘き出すには丁度いいと思ってね」

ゲーレが言った。

「誘い出さざるを得ない様にしたのはそちらだろう？ 俺の愛する者を標的に殺気を放つとは。！ さあ！ 誰から俺に斬られたい！？」

アシユマにしては激昂していた。

が、頭は冷めていた。

アシユマは鬼虎の鯉口を切つていつでも攻撃できる態勢を作った。「そうがなるな、先ずお前から始末してやるから」

ゲーレは言った。

ゲーレが何かごちゃごちゃ言っている間に、アシユマは一通り敵の布陣を見回した。

前回倒した者以外は、皆、同じだ。

……いや、気になる奴が一人いる。

フィサとか言った、ビームとやらで攻撃してくる奴。

奴の頭にリング状のモノが付いているが、あれはもしかして……？

「何をボーっとしている、アシユマ・アトー！」

「タロス……！」

ゲレが命令を飛ばした。

タロスはそこら辺にある岩と言う岩を、アシュマに投げつけてきた。岩石はアシュマの念導境界面で光となり、電光となって鬼虎の鯉口に吸い込まれて行った。

その念導境界面があらわになつた時、ゲレが

「フィサ！ 奴は念導境界面を張っている事が分かつた！ 今だ！」と、命令した。

フィサはリングを発光させた。

途端に起こる頭の激痛。

「うぐつ、あがあつ！ がつ！ ……………！！！」

これは、あの時……イーチャイルド邸を急襲したときに、敵の戦艦が行つてきた攻撃と同じでモノであつた。

アシュマの頭はいま途方もない激痛が襲っていた。

「エゲレ！」

ゲレにエゲレと呼ばれたマシンナリービーイングは口を大きく開けて超音波を発してきた。

「あがつ！ ……ぐあつ！」

今度は耳に来た。

とてつもない激痛だ。

念導境界面が弱くなつていく

「オドロ、行けッ！」

例のトカゲのマシンナリービーイングだ。

こいつの真の能力が、今、発揮される。

オドロは高温の火を吐きながら背中 of 魔導石製の鱗を飛ばしてきた。

今のアシュマにはきつい攻撃である。念導境界面に余計な負荷が掛かるからである。

(くっ！ せ、せめて超音波だけでも…………)

アシュマは念導境界面の二重化を図つた。

するとどうだろう、頭痛の元となっている電磁波までもがシャッ

トアウトされているではないか。

対アシユマ・アトー用BB兵器の原理は、特殊な高周波をその念導境界面で同一化するときに発生する特殊な電磁波が、アシユマの脳細胞を破壊する恐ろしい兵器だった。

だが、アシユマが念導境界面を二重化したときその特殊な電磁波が更に同一化され別の物へと変換され鬼虎に吸収されて行った。

「共振発光が収まった……者共行け……」

ゲールが言い掛けた時、アシユマは横っ跳びに跳んで、フィサを拝みうちに頭蓋を割っていた。

次に近くにいたのがオドロで、コイツは堅そうな奴だった。

何せ、魔導石製の鱗を持っていたからである。

が、精神を統一して拝みうちに一刀両断した。

次はヘームだった。

オドロがやられたところを、隙を突いて攻撃してきたつもりだろうが、前腕についている巨大な魔導石製のドリルをそれぞれ両断するとこれまた拝み打ちに頭頂部からへそ辺りまでを斬り割った。

これを瞬間に行った。

ゲールらマシンナリービーイングは、完全に出鼻を挫かれ、それ以上動けなかった。

動いた物から斬られるという恐怖が彼等を支配したからである。

マシンナリービーイングといえども、全部が全部機械と言う訳では無いのだから。

「次は誰がやられたい？ 遠慮しなくて良いぞ？ 懇切丁寧に斬り刻んでやる」

「……………」

「誰もいないのかッ！！ この臆病者めらっ！！ そんな根性でよく来たものよ！！ 二度とここへ来るな、去れっ！！」

その言葉が呼び水となって皆後退りをし、

「次は無いと思え、イレギュラーナンバー！」

ゲールが捨て台詞を残すとそのまま立ち去った。

鬼虎の表面を見てみる

例の古代文字が浮かび上がっている。

「こりゃ、また、アーチエルに叱られるなあ」

ぼやきながらアシユマはアーチエルの待つ王宮へ帰って行った。

アシユマはアーチエルの待っている部屋の前に来た。

「アーチエルー？ 入るよー？」

猫なで声でアシユマは言った。

「アシユマさま？ どうぞ。どうぞお入りになって下さい」

（おっ？ 機嫌が良いな？）

「やあ」

アシユマはアーチエルに顔を見せた。

「まあ、アシユマさ……ま！」

アーチエルはアシユマの異変に気が付いた

「アシユマさま。鬼虎を」

「えっ？」

「鬼虎を！」

「なっ？ 何故？」

「お顔に書いてあります。『本システムに不具合発見』って……！」

「うっ！ 嘘だ。カマだ！」

「カマなんかじゃありません！ おにとらを！」

「う………わかった」

そして、アシユマは鬼虎をアーチエルに渡した。

「そうそう。人間素直が一番」

「なあ、アーチエル。ホントに書いてあるのか？ 俺の顔に？」

「はい！ 鬼虎も点滅してますし」

「嘘だろ？ 鏡見ても書いてないし……」

「ホントです。嘘なんかいいません！ さあ、早く鬼虎を。でない  
と、ホントに頭、おばかになっちゃいますよ！？」

「わかった」

鬼虎をアーチエルが引き抜くとそこには古代文字が浮かび上がっていた。

アーチエルはそれを読んだ。

「システム本体に重大な損傷が見られます。修復しますか？ …… はい、いいえ…………… はいっ！」

青白い光がアシュマを包みアシュマは修復されていった。

「…………… すまない、アーチエル」

「ほんとですよ？ 全くもっ」

「すまない……………」

アシュマは猛烈な眠気に襲われた。

本格的な修復に入るためだ。

アシュマはベッドに倒れこむと、そのまま眠ってしまった。

「んもっ！ あしゅまさまに色々可愛がってもらおうかと思っただのに」

倒れたアシュマの頬にキスをして、アーチエルはアシュマの横に寝転び、

「どうせこの人の事だから危ない橋を渡ってきたんでしょうけれど… …… まったく困っただんな様になるわね。きつと」

そう言った。

「姉様」

ぎいっ…………… と、戸の開く音がして、アーチエルはぎくっとした。

今のようなはしたない所をお父様にでも見られたら……………

ところが、入ってきたのはキュポアだった。

アーチエルは半ば安心した。

…………… が、それは大きな間違いだった。

「姉様、今晩は何が食べたいか？ だ、そうじゃ…………… って、なに怪獣とえっちい事してるのじゃ！！」

「え、えっちい事などしておりませぬ！ キュポアの勘違いですっ！」

「それでは、着衣に乱れがあるのは何ゆえですかッ!？」  
「これは普通の乱れですっ！ えっちな事をしているわけでは御座  
いません」

アシユマは我関せずそのまま寝続けた。

次の日、黒龍号のスタッフはブリッジ内のメインモニター前に集  
合していた。通信席横にある一際大きいモニターがそうだ。

そこで、オロとの緊急会議が行われた。

「先日、リスパダハルで殻兵器が大量に盗まれた……らしい」

オロが歯切れも悪く話を始めた。

「『らしい』ってのはなんだよ？ 殻兵器が盗まれたってのはなん  
だよ!？ まさか密かに殻兵器を作っていたって訳じゃないだろう  
な？」

オルバニアンは息巻いた。

「殻兵器を作っていたという事はないだろう。『らしい』というの  
はリスパダハルの殻兵器保管庫には、死んでいるとはいえ、膨大な  
数に上る殻兵器があった。で、どれが盗まれた物で、どれが廃棄処  
分になった物かが分からのだよ」

「ふー……」

「それに付近には大量の血痕と、殻兵器庫への入り口の爆破、ただ  
し死体は皆無。一体誰と誰が争ったのか、それすらも不明と言うわ  
けだ。それも通報により分かったらしいんだが。そして査察が入っ  
たんだが……このこと自体がリスパダハルの狂言ではないかとの憶  
測が出ているぐらいだ」

「で、オロはどう考えているんだい？」

ヨデイが訊く。

「私か？ 私は死んでいるとはいえ、殻兵器を奪われた事は由々し  
き事態だと思っている。そうでなくとも各国が、鬼虎の秘密を奪い  
損ねた今、圧倒的な破壊力を手に入れるためには殻兵器しかないだ

ろう。だから各国ともそれを手に入れようとするだろう。それを阻止して欲しい』

「盗まれているかどうか分からない殻兵器をかつ!? はっ! 冗談!」

オルバニアンは両手を挙げてジェスチャーを作って見せた。

『オルバニアン殿の言う事も、尤もである。が、殻拡散を防ぐ意味でも非常に重要な仕事である。是非やつてもらいたい』

「……仕方ないですね。休暇はこれまでですね。これより我等は独自に行動し、殻兵器の行方を追います。これでいいですか? オロ?」

『結構だ。資料は渡す。諸君の健闘に期待する』

そう言っただけで通信は切れた。

「みなさん、お聞きの通りです」

早速、アシユマラクルーたちは発進の準備に追われていた。

その中でちよこちよここと動き回る小さな人影があった。

それは余りにも堂々としているので最初の内は分からなかった。

「あら、キュポア。お手伝いしてるの? えらいわねえ」

まずアーチエルに褒められた。

持っただけなのは重火器類。

次に、

「お? やつとるな姫君。感心、感心」

アルミナに褒められた。

そして、エファールに

「あら、王女様。偉いわね」

と、褒められた。

キュポアは大いに鼻高々だったが最後にオルバニアンに

「お、キュスレフ対魔導機兵ライフルじゃねーか。それに十四、五ミリ念封弾じゃねえか? どうすんだ? そんなもん?」

ざわつと艇内がざわめく。

「オルバニアン様のお手伝いじゃないの？ 違うの？」

アーチエルが訊く。

「そ、それは……」

キュポアが答えに詰まる。

「だめよ！ キュポア！ 付いてこようなんて！」

「うう……うううう」

「アシュマさまと一緒にいたいだけで付いてきちゃ駄目よ？」

「！！ そ、そんなわけ、あるかあっ！！ 怪獣となんて……」

キュポアは言いかけてアシュマと眼が合った。

「怪獣となんか…… バカあッ！！」

キュポアは走り出し黒龍号を飛び出して行った。

「キュポア……」

アーチエルは心配し呟いた。

「この対魔導機兵ライフルは扱いが難しいのか？」

アシュマがオルバニアンに訊いた

「ああ、素人じゃあ、ちよつとな」

オルバニアンが言った。

「このライフルはお前が使っている物とは違うな」

「ああ、こいつあ、キユスレフ対魔導機兵用ライフル。それに十四、

五ミリ口径の奴で玄人好みのする銃だな」

「そうか。オルバニアン、お前、銃の用意をしておけ」

「え？ 何の真似だよ、アシュマ？」

「キュポアを連れ戻してくる」

「え！？」

「お前は銃を出して置けよ？」

「何をさせるつもりなんだ？ アシュマ？」

と、オルバニアン

「さあ？」

と、アーチエル。

畑の真ん中が開けた所で『それ』は行われようとしていた。アシユマは探し出してきたキュポアの耳元で何かを囁いた。泣き腫らした後のような眼で、キュポアは狙撃の為のベストポジションをとった。

「オルバニアン、キュポアと勝負だ。用意しろ」  
アシユマは言った。

「用意しろって……もうキュポア、ベストポジションとつちまってるじゃねーか！」

オルバニアンは不平を行った。

「それくらいはハンデだ。とにかく用意だ」  
アシユマは宣言した。

オルバニアンもベストポジションを見つけた。  
ギャラリーも出来た。

勿論、国龍号のスタッフだけであるが  
アーチエルだけは複雑な表情を見せた。

アシユマが二百五十メートル先に的を立てた。  
まずはオルバニアンが先に撃った。

オルバニアンは見事真ん中を打ち抜いた。  
次はキュポアだ。

キュポアは緊張していた。

その時、さつき囁いてくれたアシユマとの会話を思い出していた。

「キュポア、緊張したら弾丸に意識を集中するんだ」

「何故じゃ？ 指先に神経を集中するものじゃろっ？ 普通は？」

「それは駄目だ。弾丸に意識を集中するんだ。」

「指先では駄目なのか？」

「駄目だ。弾丸だ。弾丸に意識を集中するんだ。なにー二発当てたなら気が軽くなるさ」

……………

「弾丸に集中……」

キュポアは精神を集中させた

弾丸の行く先は……二百五十メートルも先の標的なのにとても近く見えた。

引き金を引く指がとてもスムーズに動いた。

引き金がとても軽く感じた。

集中していた弾丸はあっという間に発射され、的に命中した。

「ホントだ、怪獣の言うとおりだ……」

オルバニアンと、キュポアの対決は順当に進み

千二百五十メートル時点で先にオルバニアンがミスをして、的から外した。

その時オルバニアンは

「ち！」

舌打ちした。

つぎはキュポアである。これを落せばキュポアの勝ちである。

(弾丸……弾丸……)

キュポアは引き金を軽く指で絞った。

ドン！

重たい音をさせてライフルが唸る。

的を弾が貫通する。

どこを貫通したのか？

アシユマは的を見ている。

弾は的の真ん中を見事射抜いていた。

アシユマは腕で大きなわっかを作る。

「ち！ 負けたよ。キュポア」

オルバニアンは負けを認めた。

ギャラリーが少しざわめく

「わらわは、まだ続けねばならんようじゃ。怪獣が的を設置してる……」

的はまた設置された。

今度は千五百メートルだ。

(弾丸……弾丸……)

意識を集中させて引き金をひいた……。

……結果、キュポアは二千五百メートルにまで距離を伸ばし、オルバニアンの二倍にまで飛距離を伸ばした。

「見ての通りキュポアの完勝だ。黒龍号へ行こう」

アシユマが言った。

皆、黒龍号に戻ってきた。

「皆、さっきの通りキュポアの完勝だ。実力的に言えばキュポアは、非常に欲しい戦力であるがどうか？ 皆の意見を聞きたい」

「わたしは反対です。姉として妹を戦地になど出したくはありません」

「それを言うなら、わらわも一緒じゃ！ 妹として言うならば、姉様を危ない所に出したくはない！」

「家族会議いたします」

アーチエルが言うと、

「おお、家族会議か、望む所じゃ！」

キュポアが受けて立った。

「では、アシユマさま、ヨデイ様？ 少し出てまいりますので暫しのご猶予を」

「ああ、わかった。ゆっくり会議して来い」

アシユマは請け負った。

「『ああ、わかった』ってアシユマ君、君ねえ」

ヨデイが憤慨しかけた。

それをアシユマは、まあまあ、と手で制した。

「キュポア」

アシユマは言った。

キュポアはくるりとこちらを向いた。

「駄目で元々。元より戦地に連れて行くつもりはないが、思いの丈をぶちまけておいで」

「わかった。ぶちまけてくるぞ！」

キュポアは応えた。

「アシユマさま、そう焚きつけて貰っては困ります」

アーチエルは困った風に言う

「そうだな。すまない。だが後悔だけはさせたくないのな。家族で思いつきり話し合ってくると良い」

アシユマはそう言った。

「分かりました。有難う御座います。アシユマさま」

二人は黒龍号を降りて行った。

「キュポア！ その様な事は許さんぞ！」

バン！

と、エドス王はテーブルを叩いた。

「何故ですか？ お父様？ 納得いきませぬ！ なぜ姉様は良くて、わらわは、駄目なのじゃあ！」

「駄目だキュポア。お前には何の力もない。それで狙われる事はないが、逆を言えば皆の足手まといにもなるということだ」

エースティーは理詰めで来た。

「力ならあるわい！ 超長距離狙撃が出来るわい！」

「大体にして何時そんな事覚えたの？」

アーチエルが言った。

「なんじゃ、みんなしてわらわの事を虐める様にして……」

「キュポア、あなた、まさかアシユマさまと離れたくない為に……」

アーチエルは核心を突いてきた。

「何を言い出すのじゃ、姉様！ わ、わらわは行くぞ！ 自分の存在意義を自ら見出すのじゃ！」

「何が存在意義だ！ 領民の規範とならねばならぬ者が、命を大切にせんで何の王族ぞ？ そうだ！ アーチエル、お前も今回はここにいなさい……」

エドス王が矛先を変えて言い出した。

「何を言い出すのです！ お父様！ アシユマさまと離れ離れになればガルマインが必ず襲って参ります。そうなたら、わたしはガルマインの虜になり、バヴェルに埋め込まれてこの世を恐怖で包むでしょう。そうなつては全世界の人々に対して、申し訳が立ちませぬ」

アーチエルが声高にそう言い切った。

「う、むう。そうであったな。そうであるな……」

エドス王が納得した。

「ずるい！ 何で姉様は良くて、わらわはいけないのじゃあ……ひ、  
鼻<sup>ひしき</sup>肩<sup>かた</sup>じゃ……姉様ばかり鼻<sup>ひしき</sup>肩<sup>かた</sup>じゃ……」

キュポアは泣きそうになった。

「何を言い出すのです？ 鼻<sup>ひしき</sup>肩<sup>かた</sup>などではありませぬよ」  
アップルトン家の家族会議は夜遅くまで続いた……。

次の日、早朝、黒龍号。

アーチエルは黒龍号に『出勤』してきた。

「お早う御座います」

誰に言つとでもなく、皆にそう言っていた。

「やあ、お早う。アーチエル様。おや？ やつれてますねえ」

ヨデイが見て取った。

「アシユマさまはどこでしょう？ アシユマさまの余計な一言で、  
家族全体が被害を蒙っております。皆疲労と寝不足に悩まされまし  
た。一言言わねば気が治まりませぬ」

少し悪戯っぽく言ってみた。

「じゃあ、アシユマ君も王の不興をかつたと？」

「いえ、それはありません。昨日はアシユマさまのアの字も出ませ  
ませんでした。キュポアでさえアシユマさまの事を引き合いに出しませ  
なんだ。その点は偉いと認めましょう」

「まあ、もう直ぐアシユマ君も黒龍に来る頃でしょうし、そうなら何か一言言っておやんなさいな」

「ええ。それはもう」

その時、渦中の人アシユマ・アトーが

「お早う」

の一言と共に、やって来た。

「アシユマさ……」

早速アーチエルは息巻いて一言言ってやろうとしたが、アシユマに、

「お早うアーチエル」

抱きしめられて耳たぶにキスをされてしまった。

「おや？ やつれているね」

アシユマが言うと、アーチエルは

「アシユマさまのせい……」

言いかけたが、矢張りアシユマの

「ああ、俺の一言が原因なんだね？ 済まぬことをした。発進のエンジン起動は俺がやっておく。少し眠るといい」

この一言に機先を制せられアーチエルは何も言えなくなった。

そしてと止めはアシユマのキスだった。

もうこれで、アーチエルは怒る気も失せた。

いや、正確に言えば怒りはあつた。

しかしそれはもう変質してしまっていた。

それは、アシユマに優しくされたことで、アシユマに怒れない、

自分に対する、怒りである。

「アーチエル。ベッドまで付き合っただけよう」

「はい」

どうやら、アーチエルは機嫌まで直つたらしい。

アーチエルはアシユマにベッドでキスまでされて、リラックスして眠りに落ちた。

その後、皆が続々と集まりだし、クルー全員が集まった。

(尤もアーチエルは眠っているが)

「さて皆さん」

ヨデイが切り出した。

「今回、殺兵器が奪われたという事で、国元連の検査察機構も既に調査に入っていると思いますが、スポンサーのオロ・エバス財団の意向もあり我々は独自に調査を開始したいと思います」

「調査って何をするのか」

アルミナが聞いた。

「まさか、世界中を闇雲に回って殺兵器を捜して回るって訳じゃないよね？」

「まさか……あれだけの事をやってのける国は少ないです。そこを風潰しに捜していくだけです。ま、オロの資料にも寄りますが」

ヨデイは言い切った。

「それを闇雲って言うんじゃないかあ!!」

アルミナが言った。

黒龍号はレキシタニアを遙かに離れてノーツ連邦を目指していた。

「アシユマ君、そろそろアーチエル様を起こしてきてくれないかい？」

そうヨデイは言った。

「わかった」

アシユマは頷いた。

エナジアのバーを手前に倒しアシユマは席を離れた。

女子のベッド部屋に入る。

アーチエルのベッドブースに行く。

なんと、アーチエルはベッドブースを全開で寝ていた。  
「無用心だな。まあ、面倒がなくていいが」

「コトリ。」

何かの物音がした。

いま、このベッドルームを使っているのはアーチエルだけだ。

アシユマは気配を殺して、音の元へと近付いていくと、頭からタオルケットを被り、お尻は丸出しでプルプルと小刻みに震えてる者がいた。

アシユマは大体このお尻の正体が分かった。

アシユマは悪戯半分で鬼虎の鑑（かみ）でお尻を突付いてみた。

「ひっ」

くぐもった悲鳴を上げた。

面白いので、もう一度突付いてみる。

「ひいっ」

更に大げさなりアクションが帰ってきた。

そしてそのうち、

「ひいっ、えぐっ、ぐすっ」

泣き声が聞こえてきた。

流石にアシユマは不憫に思ったのか、声を掛けた。

「……キユポア。キユポアだろ？ 悪戯して悪かったな。さあ、行こう」

「怪獣？ 怪獣か……？」

そう言っつて、頭から被っていたタオルケットを取った。

「怪獣のばかあっ」

キユポアが抱きついて来た。

「すまなかつたな。さて。今度はアーチエルを起こさない」と

「なに、姉様はまだお休み中とな！」

「そうだがお前どうやって密航した？」

「普通に乗船して入ってきた」

「そうか、『岩のピザ』の時のIDまだ生きていたか。まあ、いい。

ヨディのところに行ってる」

アシユマは言った。

「う、うん。でも操縦の邪魔じゃないじゃるか？」

「大丈夫。いざとなればオルバニアンが操縦を代わる」  
「そうか、そうじゃな」

何故かキュポアは気落ちして見えた。

「さあ、行ってなさい」

「う、うん……」

キュポアはベッドルームを出てブリッジに向かった。

「さて、今度はアーチエルか」

アシユマはアーチエルのベッドブースへ行った。

アシユマはアーチエルのベッド脇に付いて、

「アーチエル……アーチエル……」

声を掛けて揺すってみた。  
すると

「うっ……もう朝ですか？」

頓珍漢な答えが返ってきた。

「そつだよ。もう朝だ」

アシユマもそんな答えに付き合っただけ。

「お早う、アーチエル」

「お早う御座います。アシユマさま」

アーチエルも返す。

そして軽くキス。

アーチエルは起きて髪の毛に櫛を入れ始めた。

「アシユマさま。ヨデイ様に、少し時間が掛かると、仰っていた  
けないでしょうか？」

「わかった。奴も、それなりの計算をしているだろうから、大丈夫  
だろう」

アシユマは女子のベッドルームから出てきた。

アシユマがブリッジに上がるとちよつと騒ぎになっていた。

半球板の前に、キュポアが座っているのである。

「アシユマ！ キュポア素質あるかもしれないぞ？」

オルバニアンが興奮気味に言った。

アシユマが、ぼんぼんと軽くキュポアの頭を叩いて、ヨディのところにいき、

「アーチエルはいま、髪に櫛を通してている。暫く掛かるそうだから、そう言った。」

「分かりました。大丈夫ですよ。ゆっくりなさって下さって」  
ヨディが言っているうちに、

「皆さんお早う御座います。遅くなりました」  
そう言っただけでアーチエルは自分の席に、座ろうとして、

「ぶぎゆる！」  
何かを、お尻と背中中で、潰してしまった。

「あ、あら、御免なさい。てっきり私ったら誰もいないものかと思っただけ……！ キュポア！」

「たはは……姉様、こんにちわ」  
キュポアは困ったような、照れたような笑いをした。

「まあ、キュポア。あなた、どうやって!？」  
アーチエルは驚いていた。

「普通に乗って、隠れてた」  
「まあ、呆れた」

「返すのか？ 返すのか？」  
「勿論お帰りになっただけです……！」

そう言う声が出た。  
キュポアが

「ひいっ！」  
丸くなってしまった。

そして、恐る恐る瞼を開いてみると、そこにはアンがいた。  
「なんじゃ、アンではないか」

「アンではないかではありません！ 姫さま！ こんな所にまで入り込んで。お父様に言いつけます。良いですね。そして帰ってもらいます」

「こんな山脈の山中をか！ 最悪のシーズンの中を！ 立った一人で！」

「ヨディ様なら何かいい機械をお持ちでしょう。そうですね？ ヨディ様？」

「いや、さすがにそこまで便利な物はちよつと……」

「じゃあ、オルバニアン様。魔導機兵でちよつとひとつ飛び……」

「いや、アンさん簡単に言うけど、一旦黒龍を離れてまた追いつくつてのは、結構無理があるかも……」

「じゃあ、アシユマさま。キュポア様を抱いて、魔法で……」

「アンよ。魔導機兵以上に無理があるぞ……」

「じゃあ、やつぱりヨディ様。一度引き返してまた戻ってくるというのは？」

「無理ですアンさん。時間的余裕がないです。そんな行つて帰つて、また来るなんて言うのは」

「では、キュポア様は……」

「はい。連れて行くしかありません」

ヨディが断じた

「やった！ さすがヨディ様！」

喜びを隠せないキュポア。

しかし……。

「では、お屋敷に連絡を入れます」

アンが言った。

「！！！」

キュポアに衝撃が走った。

「そんなあ、アン！ それだけはあ、それだけはああああ！」

「なりません。今頃お屋敷では大変な事になっているでしょうから」

「アンンンン~~~~~！！！」

「エファールさんお願いが……」

アンがエファールに言う。

「はい、アップルトン王家ね……これインカム。これ装着して……」

「あ、分かります……じゃあ、行きますね……」  
通信は直ぐにつながった。

こちらの趣旨を伝えるとオペレーターは、慌てて飛び出して行った。

しばらくするとエドス王がやってきて、

『こちら、エドスじゃ。そちらにキュポアが行っているというのは本当かの？』

「こちら、アンです。王様。確かにこちらにおられます」

「あうあうあう……」

キュポアは逃げ場を捜してオロオロしていた。

アシユマがそれをひよいと抱き上げる。

「あつ、怪獣、何……何をするのじゃ！ やめんか、やめ……う……うぐ、ひっく、うえっく……下ろしてよう……」

キュポアはアシユマに抱えあげられ、なきながら通信機の前までやって来た。

『キュポアよ。泣く位ならはじめから密航などしなければよかったのだ』

「お父様……」

『今更帰って来いなどと言う非現実的な事は言わん。ただ一言だけ言う。五体満足で生きて帰って来い。それだけだ。黒龍号の皆さんに迷惑を掛けるではないぞ？ よいな？ わかったな？』

「お父様あ。ひっく。わかりましたあ」

『よし、良い子じゃ。黒龍号の皆さん。また一人厄介モノが増えて申し訳なく思います。ですが、一つ宜しくお願い申し上げます。この通りじゃ』

エドス王が言った。

「エドス様。我々は迷惑だなんて思っていないません。その点にご安心下さい。確かに娘さんはお預かりしました。預かった以上、責任を持って五体満足でお返しいたします」

『ヨディ殿。相済まぬ。アーチエル聞いたな』

「はい、お父様」

『キユポアはお前が護るのじゃ』

「はい、お父様」

「義親父殿、アシユマだ。大丈夫。二人は俺が護ってみせる」

『済まぬ。婿殿。それが一番気がかりだったのじゃ。娘二人を護らせる形になって相済まぬと思つておる。婿殿には迷惑を掛けっぱなしじゃ。じゃが、……頼む。娘二人を……』

「大丈夫だ、義親父殿。護つて見せる、必ず。だからそう気張らんで下さい」

『……わかった。皆々様にも宜しくな、キユポア』

「はい」

『では、ヨデイ殿、申し訳ないが娘をよろしく頼みます』

「はい。お任せあれ。どーんと大船に乗ったつもりで……」

ヨデイがいい掛けた所へエフアールが

「泥舟じゃないの？」

そう言った。

幸いエドス王には聞かれなかったみたいだし、文章の切れ目も不自然ではなかったたので王エドスは、

『では、皆さん、失礼致す』

そう言つて通信を切った。

「ところでさつき、素質がどうのとか言っていたな？ オルバニア」

アシユマは訊いた。

「おおよ。それぞれ。キユポアにさつき遊び半分で、魔水晶と測定等級紙で念を計らせてみたんだわ。そしたら驚くなかれ『超特級』だとき。で、試しに半球板に触らせてみたんだよ。そしたら黒龍号が快調に飛ぶ飛ぶ」

オルバニアンは半分得意顔だ。

まるで、おれが発掘したんだぞといわんばかりである。

「本当か？ ヨディ」

まさか、とアシユマが訊いた。

「本当ですよ」

ヨディが答えた。

アシユマは疑問に思った。

なぜならば、キュポアは鬼虎にも、バヴェルにも、不適格者の烙印を、押された者だからである。

しかし魔水晶は嘘を吐かない。

確かにキュポアは、アーチエルと同じく、超特級の念者なのだ。アシユマとアーチエルは、改めて自分たちのほうが特殊であることを思い知らされた。

「アーチエル、試しにキュポアにシールドを教えてくださいらん」

「はい」

「なんじゃ？ 何か教えてくれるのか？」

キュポアは、きらきらとした目で、こちらを見ている。

「今は、シールドと回復呪文だけ教えましょう。そうだ。魔導石…

…」

アーチエルは魔導石をどう調達しようか迷った。

「オルバニアン！」

ヨディはオルバニアンを呼んだ。

「はいよ、ヨディ。なんでい？」

「ちよつと操縦代わって下さいな」

オルバニアンに頼んだ。

「ああ、いいぜヨディ」

ヨディは、倉庫のほうへ、向かって行った。

ヨディが倉庫から戻って来て、キュポアに魔導石を渡していた。

「はい、これが白の魔導石。聖属性ですね」  
などと言いながら渡す。

後はアシユマが半球板に付き、アーチェルが魔法の基礎をキュポアに教えていた。

## 第二節 技研

「さあ、みな。ここからがノーツ連邦領内だ。何かあるか分からないぞ？ 一応警戒して当たれ」

と、ヨデイ。

「ヨデイ、敵だ」

リイナの抑揚のない声が響く。

「なに？ ステルスなのに？ 距離は？」

「一万」

「レーダー波は？」

「なし」

「その他赤外線とか電磁波は？」

「感知せず」

「じゃあ念導波は？」

「感あり。微弱」

「この艇、念導波系にもステルス機能ついてなかったっけ？ ねえ、

アシユマ君？」

アシユマに質問するヨデイ。

「知らん。コクレト軍曹にでも聞くんだな」

アシユマはにべもない。

それをヨデイは真に受けて、格納庫にいるコクレト軍曹を呼び出した。

『はい、コクレトです。なんでしょう？ ヨデイ特務大佐？』

「特務大佐あ？」

『はい、自分はその様に伺っております。ヨデイ特務大佐に、エフ  
アル特務補佐官、オルバニアン特務少尉に、アルミナ特務少尉：

…』

「そつか。またか……」

ヨデイはそれを訊いて嘆息した。

「とりあえず訊きたい事があるので上がってきてください」  
ヨデイがそう言う。

『はい。分かりました』

コクレトがそうそう応じた。

「なんででしょうか？」

コクレトはすぐに上がってきてこつ訊いた。

「黒龍号はステルス。なのに敵に完治されるか？ さあ、解説」  
アシユマが催促する。

「はい。多分、敵はリーダーではなくて、センサーの集合体を使っているのだと、思います。おそらくはそのネットワークに念が使われているでしょう。このオブジェクトが浮遊しているのにも念が使われているでしょう」

「成る程。とにかく俺は、ゴンドラで外に出てみる」

アシユマはインカムをとった。

「私はラヴアーの発進準備を」

アリシアナは格納庫へと走って行った。

「アシユマさまお気をつけて」

「怪獣、頑張れな」

「分かった。行って来る」

「ご武運を」

「らっしや〜い」

アシユマはゴンドラの上に出た左手にサイコフライヤーが見える。  
変わった形をしている。

見るモノが見れば、前世紀で言えばアダムスキー型のUFOと言  
うものにそっくりである事が分かる。

が、それとは若干ながら、形も構成も違うという事が分かる。

しかしアシユマは、そんな事は知らない。

ただのお椀がさかさまになった物と言う認識しかない。

それが近付いてくる。

かなりの巨体だ。

強大な念導境界面を持つている。

「ヨデイ！ かなりでかいぞ。避ける！ よけるんだっ！」

「分かりましたよアシユマ君！ 急速加速！ お願いしますよおっ  
アーチエル様！！」

「はいっ！！」

その時閃光が煌いた。

「うわあっ！」

「きゃあっ」

艦内に広がる悲鳴。

眩い閃光。

これは規模こそ違えど岩のピザの時の攻撃に似ていた。

勿論岩のピザの時のほうが威力は桁違いだったが。

今のビーム攻撃をアシユマは難なく受け止めた。

だがアシユマが気になったのは、ビームの攻撃などではなかった。

アシユマが気になったのは、その黒龍号のまさに数百倍はある飛行物体の持つ、念導境界面の気が似ていたのだ。

あの男に。

そう、アーヌに。

今、二つの機体は、急速に離れようとしている。

仕掛けるならチャンスは今しかない。

アシユマは居合いの構えを取った。

その時にヨデイが、

『アシユマ君引き換えして。急いで奴から離れましょう』

そうやってきた。

「待ってくれ、やり残した事が……やらねばならん事が！」

『今はこの空域を離れる事が先決です』

「しかし……分かった。そうしよう」

そしてアシユマは内部に戻る。

アシユマはゴンドラから降りてきて、

「ふう」

溜息を一つ吐いた。

「アシユマさま大丈夫でしたか？ どこかお怪我は？」

アーチエルは、アシユマの身を案じた。

「いや、良いんだよ。アーチエル」

そう言っつて二人はキス……しようとしたが、

「こら、怪獣！ 姉様にえっちい事するな！」

キュポアに止められてしまった。

「良いだろ？ キスぐらい？」

「駄目に決まっておろうが！ ヨデイ様と腐れエフアールが、そんなにキスをしたこと見た事があるか？ オルバニアンとアルミナが、そんなにキスをしたこと見た事あるか？ ないである？ おぬし達は異常なのじゃ！」

「しかし、挨拶のキスだぞ？」

「駄目な物は駄目じゃ！」

「しかし、岩のピザの時キュポアは……」

「わーっ！！ 何も知らんぞ！ 何もしとらん！ わらわは何も覚えてないからな！！！」

アシユマはまた、ふう、と溜息を一つ吐いてヨデイのところに来た。

「あのでか物はどうした？」

「猛スピードで離れていきますよ。なんだったんでしょつかね？」

あれは？」

「あれにアーヌが乗っていたかもしれん」

「なんですって？」

ヨデイが聞き返していた。

「ヒトの気の色と同じ様に、念導境界面にも個人差があつて色が付く。いや、寧ろ、気と念導境界面は、同じ色と言って良いかもしれん。あの色はアーヌの……奴の持つ漆黒の色に似ていた……いや、同じと言つても良いかもしれん」

「だから何かを試そうとしたんですね？ それは一体何？」

「鬼虎による攻撃。これが通じなければ、ちと厄介だ」

「そうですねえ。アシユマ君の攻撃が通用しないとすると、通常攻撃が通用しなくなる。おまけにあのビーム砲、アシユマ君で無い限り防ぎようがありませんからねえ」

「暗いのう。お主ら。なにやら難しい話なのじゃろうから、わらわが口を挟めぬのかもしれないが、その時はその時。腹をくくるしかあるまい？ それまでに良い妙案を思いつくこともあるう」

キユポアが言った。

「思いつかないときは？」

ヨデイが訊く。

「それまでのことじゃ」

「ははは。確かにキユポアの言うとおりだ」

アシユマは衣服を脱ぎだした。

「怪獣、どこへ行くのじゃ？」

キユポアが後を振り返り見た。

「シャワーだ。一緒に入るか？」

「だ、誰がお主なんかと……！！」

キユポアは顔を真っ赤にしていた。

一行はノーツ連邦の首都メシエクより北方約百キロにある森林地帯に降り立った。

もう、夜も遅かった。

「さて、今回は居残り組と、攻撃組に分かれます」

ヨデイが切り出した。

「ちょっと特殊な者は……アベ二爺、爺はいますか？」

「は。ここに」

「アベ二爺は特殊先行部隊……と言っても一人ですけれどね。爺には先行して情報収集を行ってもらいます」

「了解したで御座る」

「さて、その情報を元に攻撃組が攻撃……と、言っても主に殻兵器  
関連施設を破壊するんですけどね。後は居残り組み、非戦闘員です  
ね。この黒龍号で大人しく待っていてください。さて攻撃組ですが、  
アシユマ君、僕、エフ<sup>ヨディ</sup>アールさん、アルミナさん、オルバニアン、  
以上！」

「待て、ヨディ。戦闘員の殆どを攻撃に回して、防御のほうに誰も  
入れていないじゃないか……」

アシユマは訴えた。

「さて、アシユマ。私では不服か？ この逸鉄ククリと私の組み合  
わせなら格闘戦闘も十分こなせると思うが？」

リイナが不服を訴えた。

「お前だけでは心許ない。確かにお前は戦闘センスはピカ一だ。ス  
ピードも申し分ない。だがお前には、パワーとスタミナが備わって  
いない。……そうだ、俺がこの船に残って……」

アシユマは言いかけた。

だが、すぐさまヨディに、

「そのプランは却下です。攻撃の中核が抜けては攻撃自体が出来ま  
せん」

そう言われた。

「しかしそれでは……」

アシユマが珍しくごねた。

「大丈夫ですよ、アシユマさま。私がいいます。シールド五百枚掛け  
は滅多な事じゃあ崩せません。それに魔法もありますし、キュポア  
もおります」

アーチエルがアシユマを安心させようとしてにっこりと微笑んだ。  
「キュポア……戦力として使えるのか？ キュポアは？」

アシユマは訊いてはいけなことを訊いてしまった。

「わらわが使えぬじゃとう！？ ならば……」

そう言ってキュポアが精神統一を始めた。

「幾千筋の天駆ける、神の罰たる雷鳴よ  
汝の顔に笑みは無し、  
未来永劫繰り返される  
神の罰をその身に知らん……」

キュポアの指先に気が集まっっていく。

「まつ、まで！！ キュポア！！ その呪文を機内で使っな！ 計器類がやられる」

「……わらわの実力が分かったか？」

「昼間、魔法の基礎を習い始めたばかりだろう？」

アシュマが冷や汗を拭っていた。

「わらわは天才じゃからのう」

キュポアは威張って見せた。

「ホントにこの子は覚えが良くて、砂地に水がしみこむようには正にこの事。これで普通のお勉強も頑張ってくれたら……」

アーチエルが嘆息する。

「姉様、なんだか母様みたいな物言いじゃ」

「まあ！」

「じゃあ、話を戻しましょう。艦内居残り組はアーチエル様、キュポア王女、リイナ嬢、アン嬢、コクレト軍曹、それに戻ってきたアベニ爺。……こんな感じでしょうか？ アシュマ君も異存ないですね？」

ヨデイがそう言った。

「……分かった。了解した」

アシュマも了承した。

「では、若、行ってまいるで御座るよ」

アベニ爺は早速と出発しかけた。

「いや、爺いくらなんでも今からの時間は遅すぎますよ。明日になさい。そのほうがいい」

それを、ヨデイが止める。

「しかし情報は鮮度がモノを言いますぞ？」

「かといって爺を失うわけには参りません」

「おお、若……かたじけのう御座る」

「では、皆さん実質的な行動は明日の夜半から明後日の未明にかけてです。それまではゆっくり休んで英気を養っておいてください」

アシユマは、朝もやの中光が差し込む森の中で、日課である朝稽古をしていた。

アーチエルはアンから教えられて、アシユマが朝稽古をすることを知った。

キュポアはアシユマのブースでまだ寝ているだろう。

教えられて以来、アシユマの朝稽古を飽く事も無くずっと見ている。

アーチエルも、この世にこんな美しいモノがあるのかと、感動して我関せずして泣いていた。

躍動する肉体美と言うのか、生きている芸術とでも言うのか、とにかく美しい。

アーチエルは頬杖付いて、泣きながらアシユマの動きを目で追っていた。

アシユマは稽古を終えた。

そしてタオルを持って、アーチエルの所へとやって来た。

アーチエルは、はっとなり、

「わたくし、また泣いていましたか？」

と、訊いた

「ああ、泣いていた」

アシユマはぶつきら棒に言った。

「済みません。有難う御座います……んふ」

アーチエルはアシユマのタオルを顔に押し当て放さなかった。

「？」

「アシユマさまのにおいがします」

「おいおい、俺の身体も拭かなきゃならないんだから……においフエチか？」

「アシユマさまのものだけです」

「身体を拭きたい……」

「ならわたくしがお拭きいたします」

「ま、構わんが……」

濃く龍号のハッチが開いた。

中からアベニ爺が出てきた。

これから草の者としての活動に入るようだ。

「ご苦労だな、アベニ爺」

「ご苦労様です。アベニお爺様」

「いやいや、これが仕事じゃからの。気にせんで下され」

「無事にかえって来てくれ。アベニ爺」

「畏まつて候。では、行つてくる出御座るよ」

「ああ」

アベニ爺は黒龍号の下部ハッチから小型のサイコ・フライヤーを出してそれに両足を乗せた。

ハンドルと足を乗せる場所しかないサイコ・フライヤーだった。

ヘルメットを被り、走り去ってしまった。

このサイコ・フライヤー、今ミツシヨンから配給された物で、小型軽量且つ操縦が簡単と言うことで、導入された。

ヘルメットにはイメーシスキャナーの機能も付加してあった。

ただ、アシユマの分とアーチェルの分は無い。

いや、あるにはあるのだが現状スペアマシンとしてそのままにしてある。

アシユマとアーチェルはと言うと魔法『ウイング』があるので必要がないのである。

夜、宵の口、アベニが戻ってきた。  
黒龍号のブリッジに皆が集まった。  
皆がアベニの言葉を待っていた。

「良く無事に戻ってきてくれた、爺」

先ずヨデイが労いの言葉を掛けた。

そして、

「早速で済まないが状況を教えてくれ」

ヨデイが続けて言った。

「畏まって御座る」

皆がアベニの言葉に耳を傾けた。

「殻兵器が盗まれた当日、何らかの機関が動いた形跡はあり申した。  
国防省など軍関係、警察関係に運び込まれた形跡は無し……」

アベニは一旦言葉を切った。

アベニも疲れたのだろう。

水を一杯口に含んで飲み込んだ。

そしてアベニは言葉を続けた。

「……じゃが、国家保安委員会と科学省に何らかの動きがあった形跡はあり申した」

「ノーツ連邦の国家保安委員会か……」

ヨデイは呟いた。

「なによ？ それ？」

エフアールが聞いた。

「アヘイビアの中央情報局と並ぶノーツ連邦の諜報機関です。誤解を恐れずに大雑把に言えば、ノーツ連邦のスパイがうじゃうじゃいるところですよ」

「そこへ乗り込むというの？」

「いえいえ。本命は科学省でしょう。若しくは科学省直轄の中央技術研究所……技研と呼ばれている所……そうですね？ 爺」

「ご明察であります。若。おそらく殻兵器は技研に運び込まれており申す」

「で、技研のどこにあるんでイ」

とは、オルバニアン。

「それは、この立体構造図を見てもらいましようぞイ」

データの入ったディスクをディスクリーダーに通した。

「それでは技研の位置で御座るが……メシエクの郊外約二十キロに、名も無き寒村がござる。この村の地下一キロほどの所に技研はあり申す……」

「なんだよ今度は随分と弱気に言っちゃって」

オルバニアンにアベニ爺は突っ込まれた。

「今回最後まで詰めきる事が出来ませなんだ」

「何でさ？」

「データの機密保持の堅牢さ故に、殻兵器を確認するに到っていないので御座るよ」

アベニ爺は気落ちした。

「アベニ爺。殻兵器が確認できなかったと言う場所は？」

アシュマが聞いた。

「この図で言う所のここから……」

アベニはまず立体地図上のある点を指差し、

「ここまでの区間で御座る。」

そう言って更に立体地図上のある点を指差した。

「ふむ。中心に至る最後の区間か。百メートルと言ったところか。」

よし、その区間は俺が持とう」

アシュマが言った。

「ちょっとまったあ！ アシュマ！」

そう切り出したのはオルバニアンだった。

「その部分、俺にも分けろい。俺もたまにゃ、おいしい思いをさせろい」

「どういう理屈だ。訳が分からんぞ？」

オルバニアンがアシュマの傍に来て、

(旦那、独断専行のイメージが付いちまうとアーチェルの姫さんが

また怒り出しますぞ。ここは一つ『みんなでいっつ』と言う印象をつけておいた方が良くないの？)

そう言った。

「それは任せた」

アシユマは言った。

「では、前衛、後詰臨機応変と言うことでそういう感じで行きましょよ」

ヨデイが閉めた。

「アーチエル様、何かありますか？」

と、続けた。

「皆さん無事に帰ってきてください。それだけです」

アーチエルは皆にそう告げた。

いつもの

『敵といえども無益な殺生は避けるように』

との訓示は無かった。

皆、多少拍子抜けしたようである。

「では、皆さん出撃準備に入ってください」

ヨデイは命を下した。

「『幾夜に渡りあの黒き光の正体を掴まんと、黒き卵を欲するものがある。幾つかその黒き卵奪われる。……祝福されぬ命の者、黒き卵を潰す為、世界中を捜しまわる』……か」

ヨデイはそう呟いていた

「え？ ヨデイ、何？」

エファールが訊いた。

「いや、ルーンの黙示録……」

「そう、じゃあ、行きましょう？」

エファールの応えはそっけないものだった。

「アーチエル、じゃあ行って来る」

「お気をつけて、アシユマさま」

二人は唇を重ねようとした……。

「こおら、怪獣！ 何姉様にえっちな事をしようとしているのじゃ！」

キュポアが割って入る。

「いいだろ？ アーチエルが好きなんだ。キスしたって」

その言葉を聞いてアーチエルは顔を真っ赤にした。

「さあ、アーチエル……」

「い、いえ……」

「どうした？ アーチエル？」

「やーい、怪獣が振られてやんのー！」

「キュポア！ 別にアシユマさまを振ったりなんかしてません！  
ただ……」

「ただ？」

「アシユマさまの先程の言葉だけで満足してしまいましたので」

これには、周りにいる皆のほうが気恥ずかしくなって、妙な雰囲気  
気があたりを包んだ。

アシユマは照れたが……。

「では、行って来る」

「お気をつけて」

そう言葉を交わした。

一行はミニ・サイコ・フライヤーに乗り込み、アシユマは魔法『  
ウイング』で目的地、技研へと向かっていった。

途中まではメシエクまで行く道程と一緒。

途中からは途を右に折れて技研のある名も無い寒村に向かった。  
名も無い寒村とは形ばかりのカムフラージュで地下に隠れている  
技研の偽装だとヨディは思っている。

ヨディは首から掛かったミスリル製のシールドの札を握っていた。  
この札はアーチエル手製の物でこれを持っていればシールドと唱

えるだけで、シールドを五十枚掛けしてくれるものだった。

シールドを五十枚掛けしていれば大抵の攻撃はカバーしてくれる。ただし個人の念動力にも左右されるが念封弾系の攻撃には弱い。

そこは、各々が持つ念導境界面と一緒にある。

「シールド！」

ヨデイはシールドを唱えた。

すると、皆は次々とシールドを掛けていく。

名も無い寒村について。

さすが形ばかりの農村は植えつけられたらそれっきり。

作物の手入れなど何もしてなくて、雑草は伸び放題、作物には害虫だらけと酷い有様であった。

「アベ二爺の報告では……」

ヨデイは記憶の糸を手繰り寄せた。

「あの家だな」

目星を付けた。

あの家の中に地下への入り口、エレベーターがあるはずだった。

「よし俺が行こう」

アシュマが名乗り出た。

「アシュマ君、相手はナイトビジョンを装備していると思われる。隴霞は通用しないのでは？」

ヨデイが多少危惧した。

作戦のしよっぱなから大多数の敵と戦いたくなかったからだ。

「わかってる。スピードで勝負だ」

「スピード？」

「我、血の盟約に従い、汝を我の側におかん。

我はそこに汝はここに、

無にして全、全にして無

無限の力、その一端を見せん  
我を死の淵から救いたまえ  
纏え漆黒の羽根

ブースト!!!」

そしてアシユマは走った。

走りながら抜刀した。

そして見張りの二人を瞬く間に倒してしまった。

そこでアシユマはブーストを解除した。体力の温存を図ったからだ。

そしてアシユマは朧霞を使った。

明かりが煌々としている中ではナイトビジョンも無いモノだと思っただからだ。

果たして、矢張りそうで、ナイトビジョンなどつけているものなどおらず、戸が、ひとりでに開いた事を不気味がる者が殆どだった。アシユマは先ず棒手裏剣でこの部屋の監視カメラを潰した。

その上でこの部屋に詰めている保安要員を、叩きのめして行った。パニックになる間も与えずに。

アシユマは皆に合図を送った。

「さて行きましょうか、皆さん」

ヨディ達は茂みの中から身を躍らせて、その家に向かった。

ヨディ達はその家にたどり着いた。

アシユマがクローゼットを開いていて、その中に隠されてある、エレベーターの呼び出しボタンを押した。

エレベーターがやって来た。

中には誰もいない。

アシユマが監視カメラを潰していざエレベーターの中へ。

そして中心層へ。

この技研は全体としては直径一キロメートルの球形をしていて、各フロアはそれの輪切り状態になっている。

その中を部屋と廊下で区切っている。

エレベーターは一旦中心層の手前で終える。

そこから端まで約五百メートル歩かされて階段を下る。

そして中心部までまた五百メートル歩かされる。

その最後の百メートル、この情報が得られなかったと、アベニは言っていた。

そして一行を乗せたエレベーターは止まった。

ここからは一番端の階段を目指す。

アベニ爺のもたらした構造図によれば、このフロアは、道が迷路みたいに入り組んでいて、中々目的の階段にまで行くのは、苦勞が予想された。

途中の十字路で敵の巡回兵二、三人と鉢合わせた。

アシユマは無言で鬼虎を抜き峰に返してばしりばしりと打ち据えて行った。

「先を急ごう」

アシユマは言った。

五分ほど歩いたところで警報が鳴り響いた。

「情けを掛けたが仇になったか？」

アシユマが振り向きざま皆に言った。

「そうとばかりは考えられないんじゃない？」

エファールが言った。

「途中で何台もの監視カメラを潰してきたじゃない？ それのせい  
かも知れなくてよ？」

「そうか」

早速ばたばたとこちらに向かって走ってくる足音が聞こえてきた。

「人道主義はここまでのようだ」

そう言っアシユマは鬼虎の峰を元に戻した。

最初の兵士達がアシユマのいる所へやって来た。

が、急に止まった。

「どうかしましたか？ 隊長」

「せ……閃光のアシユマだ…… B L O O D Y アシユマだ…… 血まみれの悪魔だ」

隊長と呼ばれた男はそうつぶやいた。

「何ですって？」

「俺は一度見た事がある。……そう、奴こそ流血の悪魔、B L O O D Y アシユマだ！！……手柄を立てたい奴は好きにするがいい。俺は御免だ！ なんとでも言え！ 俺は逃げる！」

こうなると面白い物で、アシユマを倒して首を取ろうという者と、逃げようとする者に綺麗に分かれる。

若しくはアシユマ以外の者を討ち取って手柄を立てようとする者が出る。

いま、その場にいる者たちは手練れ達と見て間違いないだろう。アシユマはだらりと右手に鬼虎を持ったままだ。

「きええい！！」

怪鳥の如き掛け声で男がアシユマに切りかかってきた。

その男をアシユマは容赦なく斬って捨てた。

その男は袈裟に斬られ文字通り真つ二つになって床を転がった。

それが合図だった。

敵味方入り乱れての大乱戦になった。

アルミナの豪剣が唸れば敵は三つ四人真つ二つになって吹き飛んだ。

オルバニアンのバルカン砲が火を噴けば敵はあつという間に床に転がった。

エファールの鞭が唸れば幾人かの敵に痛打を与え、そしてヨデイの手槍が煌きを発すれば敵はぶすりぶすりと、胸板を突かれて死んだ。

アシユマはその間に、正に閃光がとき太刀筋で死体を山のように

にうずたかく築きあげた。

その死体らは見事に真っ二つにされ、四散され、血は飛び散る、刀はへし折られる、内臓はぶちまけられるで、凄惨の一言に尽きた。それはアルミナの豪剣でさえも出来ない芸当だった。

返り血に身体を濡らし、陰惨な笑みを浮かべるアシュマ。

おそろしや、アシュマ・アトー！

誰かが言った。

皆じりじりと退き始める。

アシュマは秘剣・裏・閃光一刀・崩しの構えを取る。

中には逃げると見せて反撃してくる輩もいるのだ。

その時……、

「アシュマ！ そつちに一人行ったぞつ！ 一人だ！」

アルミナが言った。

アシュマは体制を変えなかった。

「アシュマ！」

いまだアシュマは体制を変えない。

「アシュマ！！」

後ろから来た男は斧を大きく振りかぶった。

かなりの大男だ。

「アシュマ！！」

アシュマはここであるりと半回転し、相手も見ずに刀を振るった。

そして刀をひきつけそのまま半回転した。

その時には隙を見出そうとしていた輩共がアシュマに切りかかるうとしていた。

アシュマは回転の余勢を駆ってそのまま鬼虎を横に薙いでいた。

忽ち五〜六人の胴体が真っ二つになった。

それを見ていたアルミナは、

「すげえ、アタシにやあそこまで出来ないわ」

そう言わしめた。

このフロアの敵もまばらになってきたところで、

「そろそろ下へ降りましょう皆さん」  
ヨデイは、そう言って階段を降りた。

中央層は中央部までほぼ一直線上にあった。

「こんなに見晴らしいんだ、先頭は俺に任せてもらおうかな？」  
オルバニアンが言い出した。

「どうしますね、アシユマ君？」  
ヨデイがアシユマに訪ねた。

「それは油断だろ？ 現に空気はピンと張り詰めている」

「んな事ねえって現に途は一本道。後は壁。むかつてくる敵もなし。  
問題ないじゃん」

オルバニアンはいたって陽気だ。

確かに例の中心部まで百メートルまでの通路は何も無かった。

「どうせ、アベニ爺なんか適当な事言ってるんだよ。だって何も無い  
じゃないか」

（そうだろうか？ 俺の知ってるアベニ爺は勤勉で実直な人間だ。  
決して面倒くさがったり、いい加減な仕事をする人間ではない。確  
かにあるのだ。警備上、何か重要なシステムが）  
アシユマはそう解釈した。

そう思わせる何かがあった。

そして、その最後の百メートル部分、オルバニアンが最後の一步  
を踏み出そうとするその時、壁が左右からせり出して人間のような  
モノがぶら下がっていた。

その人間のような物は頭には目と鼻の穴しかなく、全身スエット  
スーツのような物を着て（いるように見えて）、露出している数少  
ない部分は手と顔の肌だけで、そこもまたゴムのようにぬめつとし  
ていた。

「なっ、なんだこりゃあ!？」

オルバニアンは驚いていた。

「これか、爺よもつと詳しく報告してくれ！」

ヨデイが叫んでいた。

そう、ざっと計算しただけでもそれは五百体はいただろう。

「コンセプトがナンバースに似ているな。当初からのコンセプトと言つモノがあればこちらの方がそれに近いかも知れん」

アシユマはその言葉を『異形の者達』の眼の前で言つて見せた。

「やーね、何言つてんのよアシユマ、気持ち悪い」

「兄弟達と再会したような、そんな顔をしているわね」

アシユマはこの声に聞き覚えが有つた。そう、それは……

「アビスー！」

「ほう、良く私を覚えておいでだこと。ボウヤ」

「貴様がいるということはイレギュラーナンバー計画はノーツ連邦に移つたのか？」

「増殖ね」

「増殖？」

「こちらでも基礎を教えて独自の研究をするの。私達が知らなかつた有益な情報は即本部にフィードバック。そういうことよ」

「ノーツ連邦側の計画の規模は？」

「それをあなたに教えてどうなるの？」

「いや、このでっかい球体ごと潰したらどうなるのかなと……」

「や、やめて！ この五年の成果が全てペアになるわ」

「ヨデイちよつと忙しくなるぞ」

アシユマが言う。

「わかつてますよアシユマ君。そういうことなら我々は脱出したほうがいいですかね？」

「そのほうが有り難い。しかしカマに良く乗る姉さんだ」

アシユマがアビスを揶揄した。

「お黙り！ さあ、やってしまふのよー！」

「皆は脱出を！ 後は俺に任せろ」

「アシユマ君いつもいいところもってきますね」

とはヨディ。

「今度は俺がいいとこ見せるからな！ 我に秘策あり！」  
オルバニアンへと続く。

「アシユマ、無理しないで危なくなったら逃げてでも戻ってくるのよ！」

「アシユマ。アーチエルに伝言は？」

「アルミナ、何縁起でもない事言ってるのよ！」

「御免、エフアール姉さん」

「そんな事はどうでもいいから、早く行けッ」

アシユマは一体目の『異形の者』を屠った所だった。

「はいはい、じゃあ〜気をつけてねえ〜」

ヨディが言う。

「どう？ アシユマ・アトーここにいる五百体いる『異形の者』は性能がイレギュラーナンバー並みなのよ。彼らと戦って勝てるかしらね？」

アビスは勝ち誇った。

アシユマは何体めかの異形の者を斬り捨てると

「そうかそれならばこちら奥の手を使うしかあるまい」

「奥の手？」

「我、血の盟約に従い、汝を我の側におかん。

我はそこに汝はここに、

無にして全、全にして無

無限の力、その一端を見せん

我を死の淵から救いたまえ

纏え漆黒の羽根

ブースト！！」

（ほう、ブースト……一分三十秒後が楽しみだわ……それにしても随分あっけなく倒されるものね）

アシユマのブーストは、生贄を捜す野獣のように執拗に、貪欲に、確実に、そして素早く、獲物を狩りとって行った。

イレギュラーナンバー並みの『性能』を誇る『彼ら』でさえアシユマのブーストの前には赤子も同然だった。

『異形の者』はその数を四分の三にしていた。

アシユマはこの一分半で百二十体ほどの『異形の者』を葬ったことになる。

「さあ、アシユマ・アトー一分半は過ぎたわよ？ ブーストが止まるわ。あなたの苦痛にゆがむその顔を見せて頂戴」

アビスはサディステイックな笑みを浮かべ、全身を振るわせた。

だが、ブーストは収まりそうも無い。

『異形の者』も戦闘能力は決して低いほうではないのだが、如何せん相手がアシユマでしかもブーストを掛けている。

見劣りするのも仕方が無かった。

二分。

アビスの顔に怪訝な表情が浮かぶ。

（まさかこのまま最後まで倒し切るのか？ そんな馬鹿な！ ブーストの効力は持つて一分半、それは術式の古文書にも書いてあったこと。それを延長するなんて！ ……ある！ サイクルスペルの呪文と併用すれば！ しかし矢張りそれでも体はもたないはず！ 何を考えているのだ？ 奴は？）

アビスは念の為を思い、魔法『テレポーターション』の詠唱を始めた。

案の定、結局ブーストは途切れる事を知らず『異形の者』を全て倒しきった所でアシユマは通常のスピードに戻った。

しかし、流石に体がブーストにも耐えられるよう鍛え上げたとしても、六分間も連続してブーストを使うのは異常で、アシユマは矢張り身体をこわばらせ振るえていた。

「ここまでが限界のようね、アシユマ・アトー。良いわ、あたし自らがあなたに引導を渡してあげる！ 覚悟なさい」

そう言って電磁鞭を取り出し、アビスは勝ち誇ったように言った。アシユマはよろよろと立ち上がり、アビスに背を向け、壁を伝って中央部へ向かった。

そして、

「お前は逃げたほうがいいんじゃないのか？ 勝ったのは俺だ」

「そんな、負け惜しみを！ 見てなさい」

ぶつんと、唸りをあげて鞭が撻った。

アシユマはそれを見もせず、身体に巻きつくその前に、電磁鞭を斬ってしまった。

「くっ！ ならばこれならどう？」

「全てを憎しむその牙よ。

全てを憎しむその爪よ。

我は今より汝の主。

出でよ竜王、

ティアマツト！！」

するとそこに光の渦が現れて形を成して行った。

その姿は勿論竜のそれである。

初めてアシユマが振り返った。

そして血振りをくれると鬼虎を納刀し、腰をすえ、居合いの構えを取った。

ティアマツトが炎を吐く。

が、鬼虎の念導境界面で何かに変換され吸収される。

ティアマツトが炎を吐くのをやめた。

「なら、今度はこっちの番だ」

アシユマが言つと鬼虎を一気に引き抜き三日月型の閃光の刃をティアマツトに向けて放った。

ティアマツトは胸のところを両断され、当然それはマスターであるアビスに痛みとして伝わったろう。

それも相当の激痛を以って、死ぬほどの苦しみに。

「アビス、俺の勝ちだ。止めが必要か？」

「ぐうっ、がはっ！ げほっ！ …… 貴様はつくづく甘ちゃんだな。殺るなら殺るでさっさと止めを刺せばいいものを」

「そうか、なら止めを刺させてもらおうか」

「甘い！ テレポーション！」

眩い光がアビスを包んだかと思うと次の瞬間アビスは光ごと消えていた。

「逃げられたか……」

アシユマは中心部に着き、殻兵器が置いてあることを確認した。

全部で五つの殻兵器が保管されていた。

そして、ヨデイたちが無事脱出できたか連絡を入れた。

「ヨデイ、聞こえるか？」

『あー、アシユマ君ですね？ 聞こえますよ。感度良好！』

「脱出は出来たか？」

『はい、多少手間取りましたが、皆無事です。今はミニ・サイコ・フライヤーに乗っていますよ』

「そうか。もう少し鬼虎の力を解放するのを待とう」

『少しでも非戦闘員を逃がそうということですか』

「そういうことだ」

『無事に帰ってきてくださいね、アシユマ君』

「俺は無事に帰ってこれる。大丈夫だ」

『分かりました。では』

通信は切れた。

「さて」

アシユマはそう言って、鬼虎の鯉口を切って念導境界面を張る。

その内側は念導の力場だ。

アシユマは力場をアンプ、念導境界面をスピーカーにして、

『アシユマ・アトーだッ！ 技研に居る非戦闘員に告ぐ！ これから十五分以内にこの技研をこの世から跡形も無く消し飛ばす！ よ

って、この技研から退去する事を勧告する！ 戦闘要員でも命が惜しい物は退去する事を強く勧める！ 以上！』

これまでに無い大音声で、叫んだ。

アシユマは万の眼よびのまなこを使った。ありとあらゆる所の状況を見るためである。

（おれは、何をやっているんだ。手っ取り早く勧告なんてしないで鬼虎の力を発現すればいいモノを）

と、アシユマは思った。

（あとで、うるさいからな）

とも、思った。

非戦闘員は順調に非難していた。

戦闘員も逃げたいものは逃げた。

後は、アシユマの首を狙っているもの百人前後である。

その者達は雇われの傭兵や牢人が主で、アシユマの首を狙って名を馳せようと考えるもの達ばかりである。

牢人たちはアシユマのいるフロアへとやって来た。

そこで彼等が見たものは、見たことも無い化け物のような人間のような異形の者が、両断され血を飛び散らかせ内臓をぶちまけている死体の山だった。

そして、そこにある大量の血の池だった。

「我が飛ぶのは暗雲の空

戦の女神を犯してもぎ取る

その背の羽根は既に漆黒

我が背に添えて我が羽根に

そして散るかなこのわが身

禁忌を犯して我が翼となれ

ウイング」

アシユマは血の池に足を取られて滑るのを怖れた為、ウイングで

宙に浮いた。

身体も回復してきた。

「あいつ等とでも遊んで、時間を潰すか」

牢人たちは多少怯んだものの、気を取り直し、アシユマに斬って掛かってきた。

しかし足に力が入らない。

血の池のせいで滑りやすくなっているからだ。

案の定、男達は足をとられ、思い切りすっ転んだ。

そこをすかさずアシユマが心臓をぶすりとやった。

「地の利は俺にある。それでも戦うか？」

アシユマはそう訊いた。

一人の牢人が強引に突っ込む。

血の池を走り死体を乗り越えアシユマに突っ込んだ。

大上段からアシユマを叩き斬ろうとしていた。

が、アシユマは腰を落とし左の脇構えから刃を引き回し、そして傭兵の胸を存分に撫で斬った。

傭兵の胸は二つに分かれて後方へ飛んで行った。

並みの腕ではない。

皆が皆そう思っていた。

「逃げるなら、今の内だぞ？」

すると、一人逃げ二人逃げ、つられるように大勢が逃げて殆どの者が逃げ去った。

意地と矜持で逃げなかった者も、アシユマから見れば腕が達していない者ばかりであった。

「お前らも逃げる。その腕では束になっても俺に叶わんぞ？」

「くそ！ 手合わせもしていないのに、こんな若造に馬鹿にされてたまるか！」

「なら、試してみるか？」

「くそおおっ！！！」

五人全員が一斉に斬って掛かってきた。

が、如何せん足元が不安定だ。  
当然動きにばらつきがでる。  
連携が取れていない。

アシユマは一人ずつ対決しているのと同じ事になる。  
一人目の傭兵を袈裟に斬り、二人目を逆袈裟に斬る。

三人目を拝みうちで頭蓋を割って四人目を左の脇構えから斬り、  
五人目を右の脇構えから斬り捨てた。

ほんの一瞬の出来事だった。

「愚かな。捨てずにいい命をむざむざと」

そしてアシユマは中心部へ向かった。

アシユマは万の眼で館内を見てみた。

一人／＼二人の取り付かれたような顔をした研究員を除いて皆退避  
したようだ。

「丁度頃合だろう」

アシユマはそう呟き鬼虎を水平に構えた。

そして、

「……鬼虎よ真の力を我が前に示せッ！」

そう言い放った。

鬼虎を中心にして光が溢れてそれは球状に広がった。

そして技研全てを飲み込んだあたりで光は暗転し、漆黒の闇に包  
まれたかと思うと、急激に収縮を開始した。

そしてそこに残ったのはアシユマ唯一人であった。

最後にアシユマが黒龍号に戻ってきた。

「もう！ アシユマさまったら、全く、こんな所で鬼虎の力を使う  
なんて、もう無茶苦茶です！」

「すまん」

「すまんじゃありません！ 少しは反省してください！」

「いや、……あの、その……」

「言い訳は無しで！」

「……はい」

アシユマ達は、この国での殻兵器は全て処分したと見て、次なる国を目指して黒龍号を駆り、ノーツ連邦を後にした。

### 第三節 漆黒の卵を追って

「次はどこに行くんだ？ 予（預）言の書には何か書いていないのか？」

アシユマが訊く。

「『祝福されぬ命の者、黒き卵を潰す為、世界中を捜さん』ですね。これはあの時レンヌ王子が言っていた通り、世界中を回ってみるしかないでしょう」

ヨデイが答えた。

「そうか。で、どこに行く？」

「どこに行きたいですか？」

「アヘイビア辺りなんてのが楽しそうだな」

「面白そうですね。では、行って見ますか。アヘイビアに。……さて、そうと決まれば、アベニ爺。爺は今の内に休んでおいてくださいね。向こうに着くのは宵の口。アベニ爺の出番になります。他の皆さんも休んでおいて下さいね」

黒龍号は一路アヘイビアのソールの港を目指していた。

ソールの港は治安の悪さで名高いソールの街と隣接している。

しかし素性の知れない者がこっそりと入国するには、適した街だといえよう。

刻は宵の口。

こうした中、アベニがアヘイビアの首都ガーファへ先行潜入した。

「さて、アベニが戻ってくるまでの時間ですが我らも休みましょう」

ヨデイはそう言った。

アーチエルがアシユマの側へと寄って行った。

「アシユマさま」

「？」

「さつきは怒ったりして済みませんでした。今晚添い寝しても宜しゅう御座いますか？」

「済まない。当直なんだ。それに、当直じゃなくとも、二人つきりと言っわけには、いかなさそうだぞ？」

「そう言ってアーチエルに後を促すと、そこにはキュポアが付いてきていた。」

「そーか。怪獣は当直か！ そーかそーか！ わっはっはっ！！」

「やけに楽しそうじゃないキュポア？」

と、アシユマ。

「怪獣が当直だから小気味好いのじゃ」

「あまり褒められた事では御座いませぬよ、キュポア」

アーチエルがそう言う。

「しかし何故か痛快でたまらんのじゃあ。今晚は良く眠れそうだぞ

！ はっはっはっ！！」

キュポアはのっしのっしと歩いていき、女子のベッドルームへと消えて行き、後にはアシユマとアーチエルが残された。

「アーチエルも早く寝るといい。何が起きるか分からんからな。寝ておけるうちに寝ておくのも大事な努めだぞ？」

「はい」

言葉は素直だが、アーチエルは何かを待っているようだ。

アシユマは、アーチエルがキスがしたいのだと思った。

「アーチエル、おいで」

アシユマがそう言った。

「はい」

アーチエルはアシユマの側に寄った。

最後はアシユマが寄ってアーチエルの唇に……。

「こらあっ！ 怪獣！！ 人の許し無く、何をしようとするのじやあー！」

「お前の許しが必要なのか？」

アシユマが言う。

「当たり前じゃあ。姉様は大切な肉親じゃあ。肉親の貞操の危機となれば救うのが肉親の努めであろうが！」

「救わなくとも構いません。貞操の危機でもありません。私はアシユマさまが好きなのです。アシユマさまのすることだったら、何でも受け入れます」

アーチエルはそれを言ってから、恥かしそうに俯いた。

「そ、それでは、こ、困るのじゃあ……」

「？」

「何が困るんだ？ キュポア」

アシユマがキュポアを問い詰めた。

「そ、それは……」

キュポアは返答に困った。

本音が言っている言葉と違った為である。

さて、その本音とは、アシユマの事が『好き』であり、アシユマとアーチエルが引つ付く事に関して『嫉妬』していたのである。

「なんでもないわイツ！ 後は好きにすればよからう……！」

今度こそ、そう言っ、歩いて行った。

ただし今度は、その後姿は、少し悲しげで寂しそうだった。

「キュポア寂しそうだったな。大丈夫か？」

「キュポアにも、少し大人になってもらわないと。あれでよかったと思います。昔から私の持ち物を欲しがる子でしたから」

「そうか」

「アシユマさま……」

アーチエルが唇を寄せる。

アシユマも寄せる。

二人の唇は重なった。

短い時間だったが、アーチエルは満足したようで、唇を解くと、

「おやすみなさい、アシユマさま……」

そう言い、アシユマの頬に口付けをして、そして照れたように去って行った。

アーチエルが寝巻に着替えている時に、キュポアがやってきて、  
「姉様、見逃すのは今宵限りじゃからな。これ以上怪獣の毒牙に掛  
かるのを見ておれん」

そう言って去ってしまった。

アーチエルはくすりと笑うと、ベッドブースを閉じて眠りに入っ  
た。

昼、アベニは情報を持って帰ってきた。

それによると殻兵器はアハイビア中央情報局の手引きによって持  
ち出され、科学技術省に持ち込まれたとの事。

そしてその科学技術省から別の所へ運ばれたという。

その場所とは、名も無き黒いビルでそこでは様々な機密事項の高  
い実験などが行われているという。

「……で、その黒ビルの何処に殻兵器はあるんだい？爺」

ヨデイは質問をした。

「殻兵器は……」

アベニ爺はまたディスクをセットして立体地図を出した。  
立体地図はその黒いビルに焦点を当てた。  
像を拡大する。

「このビルの最上階にあるらしいという所までは確認出来たで御座  
るが、そこから先が未確認で御座る」

「あるにはあるんですね？」

「一応あるんじゃないかと……」

「一応？　なんか煮えきらねえな。アベニ爺」

オルバニアンは少し苛付いた。

「これを見て欲しいで御座る」

アベニ爺が懐腹取り出したのは数枚の写真である。

「これは？」

ヨデイが尋ねた。

「よく見て下され」

皆は目を凝らしてその写真を見てみた。

その写真には、何かの塊がごろごろと隙間無く埋め尽くされていた。

「殻兵器だな」

ぼそりとアシユマが呟いた。

「……あーっ！ ホントだあ！ 殻兵器だあ、こりゃあ……」

オルバニアンは叫んだ。

「でもよお、こんなに多いんじゃないか……」

「この殻兵器の数はこんな物では御座らんよ。このビルの最上階は全てこの殻兵器で埋め尽くされているで御座る」

そうアベニは解説した。

「ちよつ、ちよつと待つてくれ、アベニ爺！ 殻兵器で部屋が一杯だつてえ？」

「その通りでござる」

「その通りでござるって……偽者と本物をどうやって見分けりゃいいんだよ？」

「見分ける必要はないんじゃないか？」

アシユマが言った。

「なんでだよ？ アシユマ？」

オルバニアンは興奮気味に言った。

「全て鬼虎の力で消し去つたしまえばいい」  
アシユマがあっけらかんとして言った。

オルバニアンは空いた口が塞がらなかった。

「これで怖いのは、ここにあるものは全てダミーで、本物は別の場所に移されたときで……」

「街中であの力を使うのですか！！ アシユマさま……」  
アーチエルは口を挟んだ。

「細心の注意を払えば他の建物に被害が及ぶ事は無いだろう」

「それは、そうでしょうけど……けど、また、アシュマさまお一人  
が危ない目に遭うのでしたら私は許しませんよ！」

皆に言い放った。

「でも、アーチエル、この作戦は俺一人のほうで戦いやすい。皆が  
居ると、皆を巻き込みかねない」

「でも……!!」

「アーチエル。アーチエルが思っている程危なくもないし、周りに  
危ない思いをさせもしない」

「本当ですかアシュマさま？」

「本当だよ。アーチエル」

「そこ！ いい雰囲気作らない！」

二人はアルミナのほうを向いた。

アルミナの口調そのままだったからだ。

アルミナは首を横に振ったのみだった。

声の主を捜してみると……それは、キュポアだった。

「キュポア、お前アルミナに似てきたぞ」

アシュマがそう言った。

「な？ なんじゃと？」

キュポアは多少たじろいだようだ。

「ヨデイ今回は俺一人で行くが良いか？」

「うん……僕としては心理的抵抗があるんですけどねえ。アーチ  
エル様ではないですけど。罪悪感みたいなものはありますねえ」

「俺は、なんか釈然としねえぜ。なんか足手まといだって言われて  
るみてえだよ」

オルバニアンが言った。

「あら、そうじゃない。言ってる事。柔らかく表現はしているけれ  
ど」

と、エフアール。

「なに！？ やっぱりそうなのか？ アシュマ!!」

「足手まといと言っではない。一人のほづが戦いやすいと言っ  
ているだけだ」

「同じじゃんかよ！ これまでずっと一緒にやってきて、アシユマ  
は仲間だと思っってたのに……！！！」

「前は仇って言っってたじゃない？」

アルミナが茶々を入れた。

「うるさいな！ 茶々入れんなよ！」

「御免なさい。アタシそんなつもりで言ったんじゃ……」

アルミナは両手で顔を覆ってしまった。

「お、……おい？ 冗談だろ？ そんならいで泣くなよ……なあ？」  
オルバニアンはうるたえるばかり。

「ばあ！」

両手を開いてアルミナはオルバニアンを驚かせた。

「わあ！ ……なんだよ泣いてなんかいねえじゃねえかよ！」

「あんたの頭冷ましたげようかと思って」

「えっ？」

「オルバニアン、熱くなると周り全く見えなくなるから」

「あ……ああ、す、済まない」

「まったく、ドイツもコイツも……」

一人憤慨しているのはキュポアだ。

どうもタベの一件以来、機嫌が良くないようだ。

それに気が付いたのはエフアールで、

「あら、機嫌よくないのね？ キュポア王女」

そう言った。

「ほっとけ」

「あら本当に機嫌が悪いわ。じゃあ、今の軍議の感想は？」

「今のが軍議か！？ ただ怪獣と姉様とオルバニアンとアルミナが、  
イチャイチャしているのを見せ付けられただけではないか！ こん  
な物は軍議とは言えんぞ！」

「お、おい。落ち着けキュポア。それではお前の立場がなくなるぞ」

リイナがキュポアを心配した。

「う……なんで皆してわらわばかりに……」

「では、どうしますか？ キュポア様」

ヨデイがキュポアに優しく聞いていた。

「どつに……といわれても……よし！ アシユマ・アトーは今回、単独潜行をさし許す。余の者、敵の襲撃に備えよ。万が一敵の襲撃あらば一致団結してこれを迎え撃て。決して負けることは許されぬ！ アシユマ・アトーの帰還場所をなくすな！ 以上だ……こんな所でどうじゃ？ ヨデイ様？」

「結構で御座いますよ。キュポア様」

ヨデイには褒められた。

が、キュポアにとって褒めて欲しい人間はただ一人、アシユマだけなのである。

キュポアはアシユマの方を振り向いた。

そこには、姉の優しい微笑とアシユマの優しさを湛えた瞳がそこにあった。

思わずそこに歩み寄るキュポア。

アシユマは同じ目線に腰を落とし、キュポアの頭を撫でる。

「すっかりキュポアをとられて残念？」

エファールがヨデイに言う。

「我が子を取られたような気分ですよ」

ヨデイはそう言うのみであった。

この後アシユマは一人でその黒いビルへと向かった。

アシユマは黒ビルの前のビルの避雷針の上に降り立った。

「あのビルか……」

アシユマは、トンと避雷針蹴って黒ビルに向かって飛翔した。

そしてアシユマは最上階より一階下のフロアに飛び込んだ。殻兵器が割れた窓からこぼれる事を懸念した為である。したが、このフロアには何も無かった。

しかも構造が他のビルと比べて堅牢に出来ていた。

アシユマが突き破ってきたウィンドウガラスもそうだった。

部屋を支えている柱も頑丈そうだ。

ここは何かの実験をするフロアであろうことは容易に想像できた。

「……………」

アシユマは一通り部屋を確認して上へ昇ろうとした。

「待ちたまえよ。アシユマ君」

聞き覚えのある声のアシユマを引き止めた。

「……………ゲールか」

アシユマは振り向きもせず、応えていた。

「悪いが俺はこれでも忙しい」

と、アシユマは続けた。

「こちらも悠長にはしてられないのでね」

「ならば俺が相手になるうか？ ゲールよ」

その声のする方へ目をやると、そこにはなんとエディアード・ウルフィが立っていた。

「裏切り者か。面白い。相手をしてやろう」

ゲールが不敵な笑みを浮かべた。

「エディアード、悪いが間に合っている。俺はこれから上の階に行つて、殻兵器を処分する為に鬼虎の力を解放せねばならん。お前は邪魔だ」

アシユマは言った。

「別に俺は構わん。使いたければ勝手に使え」

エディアードは言い放った。

「どういふ事だか分かっていない様だな。それを使えばお前は巻き込まれて死ぬという事だぞ？」

「構わん。俺は死なん」

「頑固な奴」

「お互い様だ！」

「お喋りは済んだか？」

と、ゲーレ。

そして展開するマシンナリービーイングたち

(アーゲーゲー、ゲーアーゲー、ゲーゲーアー……)

アシユマは低く小さく呪文を唱えていた。

(我、血の盟約に従い、汝を我の側におかん。

我はそこに汝はここに、

無にして全、全にして無

無限の力、その一端を見せん

我を死の淵から救いたまえ

纏え漆黒の羽根……)

「行けッ！ お前たち！！」

「ブースト！！」

そう唱え、アシユマは先ず厄介な高速移動をするマシンナリービーイング、ルルの前にやってきて、

「女を斬るのは趣味じゃないが、許せよ」

そう言いルルの胴体を居合いで真っ二つにした。

続いてこれも厄介な超音波攻撃をしてくるエゲレをその真正面に立った。

驚くエゲレを尻目に真っ向幹竹割りに頭蓋からへその下まで斬り割った。

「……レスト」

アシユマはそう言ってブーストを一時停止にした。

エディアードのほうを見ると、怪力タロスがエディアードの大剣を白刃取りにしていた。

二人とも力が拮抗しているのかびったり止まって動かない。

「いや、タロスが優勢だろうか？」

「じりじりと追い詰められていくエディアード。」

「助けが必要か？ エディアード？」

「さめた口調でアシユマが言う。」

「必要ない。残りの二人とでも遊んでる。」

「そうさせてもらおう。」

アシユマが行くとゲールは小さなスイッチのONボタンを押した。すると床面から人の形をした者が何十体も……いや、何百体も現れた。

見るとそれはノリトレアで良く見た『影の者』達だった。

「こんど、アヘイビアで採用を検討している『影の者』の、マシンナリービーイングバージョンさ。他にも中身が黒尽くめの男のバージョンやナンバーズのバージョンがあるらしいんだけどね……」

「我、血の盟約に従い、汝を我の側におかん。」

「我はそこに汝はここに、」

「無にして全、全にして無」

「無限の力、その一端を見せん」

「我を死の淵から救いたまえ」

「纏え漆黒の羽根」

「ブースト!!!」

エディアードがブーストを唱えた。

途端に形勢は逆転してエディアードがタロスを追いかけていた。

刃はどんどんタロスの方に近付きやがてゆっくりタロスの頭を切り裂いて行った。

勝負はエディアードの勝利だった。

「……レスト……はあ、はあ、はあ……」

「よくブーストを使って体が痛まなかったモノだ。良く鍛えてある。だが、息が上がっている。大丈夫なのか？」

「……大丈夫だ……はあ、はあ、はあ……」

「よくもタロスをやってくれたな。さあ、お前たち、初仕事だ。やられた仲間の分まで切り刻んでやれ！」

ゲールは叫んでスイッチをONにした。

「エディアード！ お前は逃げる！！」

アシユマは言い、エディアードは

「侮るな！ それに仮はもう作りたくない！」

そう言い放った。

「その考え方はもうやめると言ったはずだ！」

「離れて戦うぞ、アシユマ！！」

「ち！ そうせざるを得ないというわけか」

アシユマは舌打ちの後、『影の者』に斬りかかって行った。

「いくらなんでもこの数の『影の物』のマシンナリービーイングを相手に生き残れはしまい。さらばだアシユマ・アトー、エディアード・ウルファイ」

ゲールが別れの言葉を言った。

「行くぞラナリア」

そうしてマシンナリービーイング二体は姿を消した。

「アシユマ！ お前の鬼虎の光る三日月型の刃などは使えんのか？」

「そうだな。やって見るか」

アシユマは鬼虎を納刀し居合い宜しく腰を落とした。

そして、アシユマは鬼虎を引き抜いた。

すると、幾条ものエネルギーの束が曲折をして『影の者』を次々貫いて、倒して行った。

光の束は、窓をでた所で虚空へと掻き消えた。

「ええい、面倒だ！」

エディアードが両手を挙げた。

「幾千筋の天駆ける、神の罰たる雷鳴よ

汝の顔に笑みは無し、

未来永劫繰り返される  
神の罰をその身に知らん。  
サンダーストライク!!」

エディアードは唱えた。

雷光がそのフロアを覆い『影の者』達を襲った。

影同士の間でも電光が走り、『影の者』の大半がやられた。  
残りの半分も瀕死状態だ。

「驚いた。お前はそんな事もできるのか」  
アシユマは驚き、

「出来て当たり前だ！ 元々はお前を倒す為に作られた俺だからな」  
エディアードは少々憤慨した。

「ゲーレも適当な事を言う。見事に俺らは生き残ったじゃないか」  
続けてエディアードが誇らしげに言った。

「さて、残りも片付けるとするか!!」

「幾千筋の天駆ける、神の罰たる雷鳴よ

汝の顔に笑みは無し、

未来永劫繰り返される

神の罰をその身に知らん。

サンダーストライク!!」

エディアードは止めを刺す為にサンダーストライクを二度掛けし  
た。

雷光が残りの『影の者』を貫いた。

この二度掛けで動く敵方の姿は無くなった。

「これでいいだろう」

エディアードは満足げだ。

「後は、アシユマお前の仕事だ」

「分かっている」

「では、俺は行く」

エディアードはそう言い、呪文ウィングを唱えて、アシユマが入ってきた窓から、飛んで行ってしまった。

「さて、俺も行くか……」

アシユマがそう言ったとき、後ろでもぞもぞと、なにやらうごめく気配がした。

後を振り向くと、倒したはずの『影の者』達が次々と立ち上がって復活してきた。

「エディアードめ。何が『後はお前の仕事だ』だ。いい加減な仕事しやがって」

愚痴を言いながらアシユマは、鬼虎の柄に再び手を掛けて一気に引き抜いた。

同時に煌くエネルギーの束。

エネルギーの束は、『生きている死体』の如く立ち上がった『影の者』を次々と貫いて行った。エネルギーの束は今度は反転をし打ち漏らした影の者を悉く貫いて、粗方『影の者』を今度こそ屠った。

「我が飛ぶのは暗雲の空

戦の女神を犯してもぎ取る

その背の羽根は既に漆黒

我が背に添えて我が羽根に

そして散るかなこのわが身

禁忌を犯して我が翼となれ

ウィング」

呪文を詠唱し、

フロアの天井付近を飛び回りながら、万の眼を使い、下のフロアを見てみる。

下のフロアもこのフロア同じ様な構造で人っ子一人いなかった。

上のフロアはと見てみると部屋にびっしりと殻兵器が埋まってい

た。

これではどちらにしろ、上のフロアへ行って確認することなど出来はしない。

よし、ならばと、アシュマは鬼虎を天井へと掲げて、

「鬼虎よ、その力を我の前に示せッ」

と、唱えた。

鬼虎の念導境界面は楕円状に広がって行き、その中に取り込まれたものは瞬時に光の粒となった。

光の楕円はビルの上下二フロア分を中心に広がって飲み込み、そして暗転して急速に収縮した。

アシュマは鬼虎を天高く掲げたままその場に浮かんでいた。

ふと、我に返り、鬼虎を納刀し黒龍号に連絡を入れようとしたとき、向うから連絡が入ってきた。

『アシュマ、聞こえて？ エファールよ。今何処に居るの？』

「黒ビル上空だ。いま仕事を終えた。これから帰る」

『急いで帰ってきて』

「どうした？」

『敵に襲われているの！ かなりの数よ』

「分かった！ 直ぐ戻る！ 状況は？」

『アーチエルとヨデイがバハムートとティアマツトを召喚してるわ。キユポアがシールドを張っていて……オルバニアンとアルミナが機兵で出てもらっているわ。私もこれから魔法で……』

「まで、なぜ港から発進しない？」

『船をロックされているのよ。港側から』

「懐かしい戦法だな『レディール』」

『もう、それを言わないで頂戴』

「兎に角、直ぐに行く。それまで持たせる」

『分かったわ』

アシュマは『ウィング』のスピードを上げて黒龍号を目指した。

黒龍号では戦闘が行われていた。

『影の者』がここでも戦闘に参加していた。アーチエルがバハムートで敵のレッドドラゴンとヨデイがティアマットで敵のサンダードラゴンとそれぞれ戦っていた。

アーチエルはバハムートの召喚を永久連鎖魔方陣でして更に自分はエフアールと一緒に魔法で戦っていた。

敵は、とつくのとうに黒龍号に取り付いていてシールドをはがしに掛かっている。

が、流石はアーチエルの妹キュポア。

中々堅牢なシールドを張っていた。

そこを魔法で一網打尽にしていた。

エフアールが

「風切る翼、銀翼よ。

気高き心、天かける。

汝に問おうその心

風切る翼、剣とならん

サイクロンスラッシュャー!!!」

そう呪文を唱えると、

アーチエルは、

「幾千筋の天駆ける、神の罰たる雷鳴よ

汝の顔に笑みは無し、

未来永劫繰り返される

神の罰をその身に知らん。

サンダーストライク!!!」

と、唱えた。

アーチエルのサンダーストライクはことのほか威力が高いが、しかし中にはむっくりと復活して再び襲ってくる『影の者』がいた。マシンナリービーイング由来の『影の者』がそうである。

以外にも電気に弱いと思われるマシナリービーイングだが、絶縁処理を施している為、生き残る数が少なくなかった。

ただし、ノーダメージと言う訳はなく、やはりどこかに衝撃を受けて、動きがぎこちなく障害が残った。

どうやら何をベースとするかでトリアルをしているようだ。

『マシンナリービーイング』、『黒尽くめの男達』、『ナンバーズ』……。

現在の所効率よく点数を上げているのが『マシンナリービーイング』由来の『影の者』たちである。

コスト対効果も考えなければならぬが。

オルバニアンとアルミナは『ラヴァー』ではなく『炎龍』で出撃した。

『ラヴァー』のほうが、運用時間が短い。

このように多敵の場合、運用時間が長いほうが有利と判断したから『炎龍』で発進したのだ。

兵装は三十ミリ念封弾の六連装バルカン砲に、長さ六メートル超の魔導石製の太剣、そして普通の剣、ライフル。

いまはバルカン砲で敵を蹴散らしていた。

しかし、それも黒龍号に取り付く前まで。

黒龍号に取り付いた敵までは処理できない。

威力が強すぎるのである。

エファールが

「風切る翼、銀翼よ。

気高き心、天かける。

汝に問おうその心  
風切る翼、剣とならん  
サイクロンスラッシャー!!!」

と、唱える。

黒龍号に取り付いた敵を取り除くのに、魔法はうってつけだった。

この戦闘で黒龍号の両隣二隻のサイコ・フライヤーは何らかの被害を受けていたし、付近住民は完全に避難していた。

ジャイアント級の戦いは依然続いていた。

敵のレッドドラゴンが炎を吐けばアーチェルのバハムートがブレスを吐いて反撃する。

向うのサンダードラゴンとヨデイのティアマットは完全に格闘戦になった。

激しい殴り合いの応酬だった。

そこへもう一匹の竜、同じくサンダードラゴンが召喚されてきた。このサンダードラゴン、ヨデイが召喚したモノである。

今までのティアマットを永久連鎖魔方陣に移し、新たにもう一つの永久連鎖魔方陣でサンダードラゴンを召喚したのである。

ヨデイは一人で二体の召喚獣を操るといふ高等技術を用いた。

だがこれは、相当な念の消費を伴うと共に、二体同時に操るといふ事で集中力も相当に使われた。

黒龍号のほうは相当数『影の者』に取り付かれたが、四問のレールガンが良く持ちこたえてくれている。

即ちアベニ、リイナ、アリシアナ、アンこの四人が奮闘して敵を防いでくれていた。

勿論、魔法を操る三人アーチェル、エファール、キュポア。

この三人が居なかつたら、黒龍号は忽ち敵の手に落ちていただろう。

だがここで均衡が崩れ始めていた。

キュポアの精神力が限界に近付きつつあった。

それを見て取った。アーチエルは一旦ゴンドラを降ろしキュポアの様子を見に行った。

案の定限界が近いらしい。

「エファールさん、私シールドのほうに回ります。攻撃呪文のほうは宜しく願います」

アーチエルはエファールに言った。

「宜しく願いますっだって、貴女バハムートも制御してるのよ大丈夫なの？」

「時間が有りません！ 今にもシールドが破られそうなんです！ 願います」

それはアーチエルの切なる願いだった。

その迫力に気圧されたのがエファールは、

「分かったわキュポアをベッドまで運んでいるわ」  
言うに留まった。

「宜しく願います」

そうアーチエルが頼んだ。

「聖なる女神タテトラム

聖なる盟約に従い、

汝をして我に光の加護を与えたまえ

汝、我を護りたまえ。

シールド、バイ、ファイヴハンドレッド！！」

そう言うのと同時に、キュポアのシールドは全て破られたが、内側から新たなるアーチエルのシールドが湧いて起こり敵を元の位置まで押し戻していた。

アーチエルはホツとしたのも束の間、魔法と召喚の双方連続使用がこれほど消耗する物だとは主っても見なかった。

(いけない。これだと長く保たない！ アシユマさま、早く来て！)

アーチエルの願いが天に届いたのか、強力なエネルギーの束が辺りを覆いつくし、曲折しながら、味方にはダメージを与えずに敵だけを貫いた。そして一旦エネルギーの束は上空に集まると再び下って、残敵の掃討に入った。

その間にやっとアシユマ本人の登場となり、港にある広場(そこでは依然として召喚獣同士が戦っていたが)に降り立ち光の束を操っていた。

エネルギーの束はアシユマの頭上に集まり渦を描いていた。

それを鬼虎で、敵の召喚獣目掛けて飛ばすと、二匹の敵召喚獣の首根っこを切り飛ばした。

これで敵はほぼ全滅したはずである。

アシユマは歩いて黒龍号に向かう。

その途中で生き残りの『影の者』と出くわす。

アシユマはそれを一体一体、丁寧に斬り刻む。

ばたばたと後のほうから、一般警察がやって来た。

アシユマにとってはこちらの方がやりにくい。

やや、逃げ足気味に黒龍号へと向かった。

『アシユマ君聞こえますか?』

ヨディだ。

早速戦況報告だろうか?

「聞こえるぞ、ヨディ」

『早速ですがこの港から脱出したいと思います。つきましては、黒龍号をロックしているフックをですね……』

「分かった。切り飛ばせばよいのだろうか?」

『ご名答』

「流石に疲れた声を出しているな、ヨディ」

『このくらい何でもありませんよ』

「無理するな……」

そう言ってアシユマはフックを切り飛ばしてしまった。

「これでいいはずだ」

『じゃあアシユマ君もこっちに帰って来て下さい』

「それはいいがシールドを解除してくれ」

アーチエルにシールドを解除してもらいアシユマはゴンドラからブリッジに降り立った。

見ていると、魔力を使った者に濃い疲労の色が伺えた。

「アーチエル大丈夫かい？」

アシユマは優しく声を掛けた。

「はい。大丈夫に御座います。有難う御座います」

しかし疲労の色は濃い。

「……ヨデイ、お前と、エファール、あとアーチエルには休息が必要だな」

「なんの、僕はまだ大丈夫ですよ〜」

カクンカクンしながらヨデイが歩いてきた。

「何言っているんだ。ふらふらじゃないか？」

「せめて、つ、次の行き先を、決めないと……」

椅子に座った次の瞬間ヨデイはもう寝ていた。

「おい、ヨデイ……」

「んがっ！？ 僕、寝てまひたか？ じゃ、じゃあ、次の行き先はクローン人民共和国と言うことね……詳しくは、オルバニアンとアルミナ嬢に……済みませんがお先に寝かせてもらいまふ……」

そう言ってヨデイは寝室へと向かって行った。

そして入れ替わりでブリッジが上がって来たオルバニアンと、アルミナはそれぞれコクピットと通信士席に座った。

更にリイナがリーダー席に着いた。

オルバニアンは、アシユマに

「次の行き先聞いてるかい？」

そう訊いた

「クーロンだそうだ。いま、二人を寢床へはこぶ。そうしたら席に着く。少し待っていてくれ」

まずはアシユマはエファールを抱きかかえ、エファールのベッドに寝かした。

すると、

「うづ〜ん。あなたあ」

アシユマに迫ってきた。

「おいおい、俺はヨデイじゃないぞ？」

「うづ〜ん……」

そのことは知ってか知らずか安らかな眠りに落ちるエファール。

そして次はアーチエルを抱きかかえるとアーチエルのベッドに寝かしてあげる。

こちらはアシユマがアプローチを試みる

「今日は良く頑張ったね」

そう言っアアシユマはアーチエルに軽く口付けする。

「うん」

短い返事をしてアーチエルは深い眠りに付いた。

アシユマがブリッジに帰ってくると、

「クーロンかあ。また面倒な所へ……」

オルバニアンがある種の感慨に耽っていた。

そう。

クーロン人民共和国。

一時期首都空爆を受けて政治・経済共に多大なる損失を受け国内外に不安と緊張を振りまいたのも東の間。

不世出の大政治家ルー・ウィロンが、軍部を押さえ、首都を移し、何とか国内外の不安を押さえ、それが軌道に乗りかけたところ、先の『岩のピザ』事件である。

クーロン艦隊が蒸発し、首都は灼熱の坩堝なべと化し、人も物も皆、融けた。

この事件を受けルー・ウィロンが行方不明に。

一時は首都災禍に巻き込まれ、死亡説も流れ、国内外に緊張が走ったが、なんとルー・ウィロン本人が電撃的に復活をアピール。

国外に一睨みを利かせて、国内にはルー・ウィロン死亡の噂で浮き足立った、ゲリラの足元を掬い、軍の暴走を押さえ再び国の再建に力を尽くし……。

そうした情勢のクーロンを訪れようというのである。

「リンさん元気かなあ？」

オルバニアンはつい最近の出来事を『懐かし』がった。

以前アシュマがクーロン軍に捕まった事があった。

その時に、現地のエンジニアトとして協力してくれたのが、オロ・エバス、クーロン支社長リン・シャオリン、その人だったのである。

「ああ、リンさんね。面白いひとだったねー」

とは、アルミナ。

二人はあはははと笑った。

そこへ、アリシアナがやってきて、

「この項目にサインお願いします」

そうアルミナに言った。

「う〜ん……これはアタシの所じゃなくてオルバニアンの方だね。オルバニアン、ちょっと見てあげて？」

「どれ？」

「あの、これがあります」

そしてアリシアナがコクピット横に来て言った。

それをオルバニアンが、

「あのさ、軍規上難しいのかもしれないけどさ、俺達は民間人。〜であります口調はこっち側としてはやりにくいわけ。それにそっちの方が俺より年上なんだからもつと『おい、こら、おまえ』口調でも構わないぜ」

そう言った。

「もつ、申し訳ありません!」

「だ〜か〜ら〜」

「オルバニアン、直ぐには無理だ。ゆつくりと変えて行くしかない。もしかしたら、変わらないかも知れない。そういう時でも、受け入れられる懐の大きさって奴を身につけておくといいかもしれないぞ」  
アシユマがゆつくりと柔らかく言った。

「……………わかった」

オルバニアンは、怒った風でもなく、落ち込んだ風でもなく、ただ、淡々と言葉を受け入れた。

「あの、……………オルバニアン少……………さん？ サインを……………」

「あつ？ ああ」

そう言ってサインをした。

「お口添え有難う御座いました。アシユマ・アトー武芸最高顧問」  
……………つと、俺の肩書きはそんな事になっているのか？」

「はい、その様になっております。お嫌でありますか？」  
アリシアナが困った顔をした。

「『さん』付けのほうが好きだな」

「ではこれからはアシユマ『さん』と、呼ばせていただきます」  
「そうだな」

アシユマは応えた。

「じゃあさ、アルミナ、リンさんに連絡入れてよ」

オルバニアンはアルミナに言った

「分かったわ」

アルミナは通信機のスイッチに手を伸ばした。

その後、クーロン上空を飛んで後三十分ほどでリン・シャオリン、クーロン支社長オフィスに付く筈だった。

リンの話では、オフィス一階の庭に着陸できる場所を設けたから、それを使用して欲しいとの事。

故に、クーロン支社長オフィスを目指していた。

この頃になってヨディとエファール、アベニ、そしてアーチエルが起きて来た。

「皆さんお早う御座います」

アーチエルが挨拶をする。

「ああ、お早うさん」

オルバニアンが返した。

そのオルバニアンがヨディと何らかの打ち合わせをしていた。

アルミナはエファールと交代して

「ふわあああつ……。さて、アタシも寝かせてもらおうかな？」

「いやいやいや、アルミナさん、仮眠程度だったらいいですけどリンさんと会うときには起きておいて下さい。あと、だれかキュポア嬢を起こしてきて下さい」

「ならそれはわたくしが……」

アンが起こしに行った。

「あーコクレト軍曹、聞こえますか？」

『はい。聞こえるであります。ヨディ特務……』

「ヨディでいいから……もうすぐオロ・エバス財団クローン支社長に会うわけだからシャワーぐらいは浴びておいてね？」

『はい、了解であります』

「じゃあ、俺もシャワー浴びてくるよ」

そう言っアシュマがシャワーを浴びに行った。

ヨディはオロ・エバス財団のクローン支店の庭へと降り立とうとしていた。

クローン支店と言っても閑静な住宅街だが。

美しい朝が待っていた。

こんな所に黒龍号を置いて大丈夫なのかと思っていたら、隣近所、皆、自分の庭にサイコ・フライヤーを置いていた。

（そういえばこの間来た時も、こんなだったか？）

ヨデイは思いつつも黒龍号を庭に置いた。

ヨデイ達はリン・シャオリンと再会した。

まだ会って居なかったクルーとリンとの相互紹介だ。

「アリシアナ・コクレトであります！ 大佐殿にお目にかかれて光栄であります！」

「コクレト軍曹！」

「はっ！ 何でありますか大佐殿」

「我らがミッションは高度に敵地に侵入したミッションネ！ その軍人言葉はここでは禁止ヨ！」

「うつつ、ここでも。なんか自分の存在を否定されたみたい……」

「そんな事無いわヨ？ 恋でもすれば」

「……………」

「次は」

リンは相手を探した。

次の相手はメイド服を着ている。

「こんにちわ。お初にお目にかかれて光栄です。アン・デボンと申します。皆さんの身の回りのお世話をさせて頂いております」

「わたくしもよ。お目にかかれて嬉しいネ。アン」

次にリンが挨拶に行ったのはリイナだった。

「こんにちはリイナちゃん？ ここは気に入った？」

「うむ。外見とは打って変わって装備は充実しているそうじゃないか？ 早く見て見たいものだ」

（何だこのガキは……）

面食らいつつ、次の対面者を見た。

そしてリンはキュポアを認めた。

リンは杓子定規に、

「ご尊顔を拝し奉り恐悦至極に……」

言いかけるのをキュポアは、

「皆、同じことを言いよる。なにか気の利いたことは言えんか？」

『美人ですね王女様』とか『可愛らしいですね王女様』とか「

そう言った。

「これ、キユポア！」

これを聞いたアーチエルにすぐさま叱られたが。

(王侯貴族にある所謂『変人』と言う名の病だな。ほおって置こう) そうリンは思ったが、変わっていたのはキユポアだけではなかった。

「リンさんですね。アーチエル・アップルトンです。はじめまして」

「は、始めまして」

「どうも申し訳ありません。至らない妹で。それもこれも全てこの姉である私がせい。今後このような事の無いきように致します故、お許し下さい」

「は、はあ……」

アーチエルは一応は、存在感と言う物を示した。

リンは、

(腰が低いというのも、これはこれで変わっているわね。王族と言うものは変人ぞろいでなくてはやっていけぬものらしいわ)

リンはこの日、そう叩き込まれた。

最後はアシユマだ。

そのアシユマを見た途端リンは頭が真っ白になり、小走りでアシユマの元へ駆け寄り、

「私この人の子種欲しいネ」

そう口走ってしまった。

(しまった~~~~。ちよつと、いい男だからって、どうしちゃったの私？ 相手の男の人も困ってるじゃない)

「……………」

アシユマは何を言って良いのか、呆れてモノがいえなかった。

が、とり合えず、気を取り直しアシユマは、

「アシユマ・アトーだ。よろしく頼む。ちなみに婚約者が居る。彼女だ」

そう言ってアーチエルを指し示した。

アーチエルはにこやかにお辞儀した。

そして、リンは誰にも聞かれないようにして

「ロリコン」

少し残念そうに言った。

そしてそれからアーチエルにお辞儀をした。

が、アシュマには聞こえていて一瞬びくりとしたが聞こえない振りを通した。

（しかし衆目の中で自分に『子種くれ』って言う女も珍しいというかわわつてるといふか恥かしいというか……悪い女ではなさそうだが）

アシュマはそんな風に思った。

「とりあえず、情報の整理ネ。こっちに来るネ」

そして地下へ下る階段を降りること数十段。

いつもの高度に電算化された地下本部が目前に現れた。

アシュマら初めてここを訪れる者は皆一様に驚いていた。

「凄いなここは」

アシュマが漏らした。

「ここを見た人は一様にさういうネ」

少しリンは誇らしげだった。

さういえばさつきから、アーチエルがアシュマに、ずっと手を繋いできている。

振り向いてみると、アーチエルはなにやら嬉しげだ。

どうした、と聞いてみると、

「アシュマさまがわたくしの事を婚約者だと言って下さいました…」

何だそんな事かと、アシュマは思ったが、もう片方の手でアーチエルの頭を撫でてやった。

すると、アーチエルは満面の笑みを返してきた。

リンは部屋の一際奥にある大きな机にやってきた。

皆も机の周りに集まってくる。

机の上には何も置かれていなかった。

多分モニターを兼ねているのだろう。

その机を後ろにしてリンは口を開いた。

「さて、皆さん。この国は今、かつて無いほど、混迷と混乱が続いています。そんな中、ルー・ウィロンがその政治的手腕を振るって、何とか分裂するのを防いでいます。さて、そのクーロンに殻兵器がもたらされると、どうなるか？ 各地にある我々の拠点を潰し、そして恐怖と力で人民を支配するネ。これ間違いないネ。だからそうなる前に殻兵器を是非潰してほしいネ。その為だったら情報でも何でも提供するネ」

「そうですか。分かりました。でしたら、殻兵器の情報を」

そうヨデイが訊いた。

「分かりました。殻兵器は確かに運び込まれましたネ。それも空中戦艦で、党中央執行部に」

リンが答える。

「党中央執行部が入っている建物があると思うのですがそれは何処に？」

「それは、エファガナと言う都市にありますネ。その都市の中央区に、党本部ビルがあるネ。そのほか臨時で色々な省庁がありますので、間違いの無いようにネ。と、言っても党中央執行部が一番大きなビルを接收しているので分かりますけれど。ここに乗り込む時は慎重に慎重を重ねて行ってくださいネ。ここに乗り込むと言う事は即ちクーロン人民共和国に喧嘩を売ると同じことになりますから……」

「よしっ！！ その喧嘩、買ったろうじゃないか！！」

オルバニアンが息巻いた。

「ばかかおまえは？ 今リンさんが言っただろ？ 喧嘩する相手はクーロンそのものだって」

ヨデイが諭した。

「だってよ、兄ちゃん。どっちにしたって買わなきゃならない喧嘩

だろ？ だつたら正々堂々と……」

「正々堂々とするだけが途じゃ無いでしょ？ 横から攻める。斜めから攻める。後ろから攻める。勿論前から攻める。兵法に通じるでしょ？ ここら辺はアシュマ君のほうが詳しいから後で聞いておきなさい」

「ちえ」

「で、リンさん。肝心要の殻兵器は何処にあります？」

ヨデイが訊いた。

「はは……ごめんネ。そこまでしか分かってないネ……」

「仕方ない。クーロンに大喧嘩挑むか」

アシュマが言った。

「アシュマ君！ それは……」

ヨデイが言いかけたのを、アシュマは手で制し、

「ただし、これには、クーロンの現地スタッフの協力が必要だと、した。

聞いている皆は訳が分からなかった。

「つまりだ。俺は囷として党本部に乗り込む。そこで大暴れするわけだ。するとクーロンのお偉いさんが、殻兵器を何処かへ移そうとするわけだ。そこをヨデイらに抑えて欲しい」

「でもよ、敵は何処から出てくるかわかんないんだぜ？ 多くの人間の目が……！！ そうかだから現地スタッフの協力が必要なわけか！ で、俺達の仕事は？」

オルバニアンは何か得心が言ったようだ。

「当然、殻兵器を押さえる仕事だ。大まかな流れはこんな感じだが、どうだ？ ヨデイ」

「大変宜しいかと。あと我々を二、三班に分けておくといいでしょう。例えば僕とエファール、オルバニアンとアルミナ……オルバニアンとアルミナは魔導機兵での運用も出来ますから、そちらのほうが良いかもしれません。最後にアベニ、リイナ、アーチエル様、キユポア様。ある意味この布陣が最強かと思えます。以上こんな感じ

でしょうか？」

「あの……」

アーチエルが言いかけた

ヨデイが

「どうぞ」

発言を促した。

「何故、アシユマさまは、また今度も一人危ない、単独行動などと言っ選択肢を、お選びになるのですか？」

「そのほうが仕事がしやすい。今度は皆の方が本命の仕事だ」

「どうしてそんな突き放すような言い方をなさるの？ どうしてもお一人で危ない仕事をお引き受けになさるの？ 私の気持ちはどうなるの？」

「別に突き放しているわけではない。一人のほうがリスクが少ない事もある。分かっておくれ、アーチエル。君や、みんなの気持ないがしちを蔑ろにしている訳ではないんだよ」

「本当ですか？」

アーチエルはアシユマを見つめた。

アシユマがゆっくり頷く。

アーチエルはヨデイのほうを見た。

「大丈夫ですよ。アシユマ君の言うとおりですよ。アシユマ君は攻めてよし護ってよしの人ですからね。大丈夫ですよ、王女」

ヨデイが太鼓判を押した。

「そうですね。一通り安心致しました」

「アーチエル、今回はアーチエルの方が大変なんだぞ？」

アシユマは言った。

「はい？」

きよとんとしているアーチエル。

「い、いや……いい。死ぬな」

「はい。死にません。大丈夫です」

「姉様も、怪獣も今ここは軍議を行っていることを、忘れてもらっ

ては困るぞ?」

キュポアが軽く二人の仲をチェックする。

「わ、分かっております!」

アーチエルもいきなり言われてそう言った。

「さて、いつ決行しますかね?」

ヨデイがアシユマに訊いた。

「ここはもうすぐ朝になる。やるとしたら夜半が良いな……」

「それまでに運び出されませんか? 殻兵器」

「うっっん、リン!」

「は、はいネ!」

「人員を貸して欲しいのだが何人ぐらいまで貸していただけるだろうか?」

「うーん……千人、ツーマンセル、五百組と言うのはいかがかね?」

「この国の規模だからなあ、多いのか少ないのか、基準が分からん」

「多いね。基準はこの国もいっしょヨ。人間やること対して変わらないもの。そんなに言うなら貸してあげないネ!」

「あっ、うそうそ! 神様、仏様、リン・シャオリン様!」

ヨデイが慌てて言う。

「くすくす。ヨデイは相変わらず調子いいネ」

「じゃあ、機嫌直してくれる?」

「うっっんアシユマからまだ御免なさい訊いてないネ」

「俺か? 何に對して謝ればいいんだ?」

アシユマは、多少気分を害したようだ。

「あーっアシユマ君! 何てこと言うの! っっちいらっさい!」

ヨデイはアシユマを引っ張り……。

「……えっっ! ホントは自分も謝りたい」

などと根も葉もない事をでっち上げようとする。

(いや、言っていないしそんな事)

「でも恥かしくて謝れない!」

(お前のほうが恥ずかしいぞ、ヨディ)

「一人で謝るのは恥ずかしいと！」

「誰もそんなことは言っていない！」

「人一倍シャイなお前だから、謝れないだろ？ だから僕が付いて

てやるって！！」

「いい、遠慮する！！」

アシュマがそう言い終わった時には、リンの目の前にいた。

「！！」

「リ、リン……」

数拍、間があいて言葉を聞いたのは、リンのほうからだった。

「……ス、スタッフは予定通りお貸しするネ。あと、無理に謝らな

くていいネ。そっちのほうが魅力あるネ」

(なら、『う〜んアシュマからまだ御免なさい訊いてないネ』

なんて言うなよ)

アシュマはそう思った。

「まず、現地のクーロン支社のスタッフにやってもらいたいことは、党中央執行部に入入りする車の全チェック。殻兵器が持ち出された兆候があるかないか。これが先ず一点。次に、夜、党中央執行部襲撃の際には必ず殻兵器の持ち出しがあるはず。これを見逃さない事。これが二点目。以上二つの事を、気をつけてやってもらえればいい」

「分かったわ。……あなた、クーロンに住んでいたことある？」

リンがアシュマに訊く。

「あるよ？ どうして？」

「さっきの会話で標準語では分かりにくいことクーロン語交えていたから」

「ああ、簡単な日常会話程度な」

「どちらにしても有難うネ。ここから暫くは私達の仕事ネ。夜まで時間があるネ。ゆっくり休むといいヨ」

そう言った後、

【ほらほら！ 忙しくなるよ！！ 控えのエージェント千人揃える

よー！！　すぐさま連絡とつて！　集合場所は天騎馬広場！　やる事は現地にて説明！　兎に角時間が無いよ。急いだ急いだ！】

「リンさんは張り切りだしましたねえ」

「そう見たいだな」

アシユマはリンの仕事振りを見ていた。

その時、後から

「か〜い〜じゅ〜！！」

低く押し殺してそれでいて迫力のある怨嗟の聲が響いてきた。

みると、キュポアが今にも泣きそうな顔で目を真っ赤にして言った。

「おぬしは女子と見ると手を出すのか？　それとも向つかからの誘いにはほいほい乗っていくのか？」

「そんなわけあるか。節操ぐらいあるぞ」

「それじゃあ、何であのリンとやらと楽しく話すのじゃあ！」

「仕事上の話だろ？」

「男と女のそれではないかあ！　……うつつ」

「何を勘違いしてるんだ？　アーチエルは？　アーチエルはなんと言っているんだ？」

「言っても何もオルバニアンやエファール達なんかとお茶しに行ったぞ！」

「置いてけ堀を食らったな。仕方ない。二人でお茶するか。黒龍号のキッチンだけだな」

「ほんとか！？　よし行こう！　それ行こう！　今すぐ行こう！」

先ほどまでの機嫌の悪さは何処へやら、キュポアは喜び勇んでいった。

「そう、興奮するな。大した事は出来んぞ？」

「そんな事構わん。わらわがフォローして進ぜるに」

「そうか。じゃあ、行くか」

「うん！」

アシユマとキュポアは手を繋いで黒龍号へ戻って行った。

「あら！ アシユマさま、お帰りなさい。キュポアも。今、皆でお茶会をしているんですけどアシユマさまもいかがです？」

アシユマとキュポアは目を合わせた

「なんかお茶を」

アシユマが言い、

「オレンジ・ペコを」

キュポアが言った。

その後アシユマはお茶を飲み、軽く食事を採り、シャワーに入っ  
てさっぱりした所で、眠りに入ろうとしていた。

ここ数日寝てなかったのだ。

まあ、アシユマにとっては、まだまだいける範囲だったが。

兎に角、今夜に向けて寝る事にした。

一眠りした後、そして着替え、鬼虎を落とし差しにし、行く準備  
を整えた。

アシユマの装備といえばこれにハーフボディアーマー、防刃効果  
のある革ジャン。

これぐらいである。

アーチエルや、キュポアも一緒にシャワーを浴び服を着替えた。

アーチエルはいつものボディアーマーだ。

矢張り見るものの眼をひきつける。

防刃布が身体を引き締めるからだ。

そしてキュポアはと言うと、矢張り同じボディアーマーを着て  
いる。

前回、アシユマが囚われた時、アーチエルの格好を見て特注し、

作ってもらったのである。

ただしキュポアは成長期にあるため少しだぶついた物を着ているが。

ボディアーマーといえばエファールも同じ者を着ている。

いくらエファールがアーチエル達と同じ物を着ているとはいえ、いつもスタイルを気にしてそれに励んでいる彼女のボディラインを忠実に反映するボディアーマーが、アーチエルやキュポアらに比較して大人の女性としての魅力を十二分に発揮していたのは言うまでもない。

各々がそれぞれ装備を固めた。

アシユマが、ヨデイと最後の打ち合わせに入っていた。

党中央執行部庁舎の位置、仕掛ける時間と、どの程度暴れるかその様な事が話し合われた。

よし、それで行こうとなった頃には夜半まで三十分強と言うところであった。

アシユマがウィングでクーロンの党中央執行部庁舎のまん前に降り立った。

党中央執行部庁舎はかなり大きい建物で、そのビルの前には広場があった。

そしてビルには入り口まで長大な階段があり、来る者を圧倒していた。

魔導機兵二機が党中央執行部庁舎を護っていた。

アシユマはこの党中央執行部庁舎に向かって、

「やあやあ我こそはアシユマ・アトーなり！ 我を討って功名を上げたいと欲する者はおらぬか！？」

大音声で前時代的な名乗りを上げた。

忽ちばらばらと十数人がでてきた。

当直の守備隊らしい。

(これでもまだ足らぬな)

アシユマはそう思い、魔導機兵二機に目を付けた。アシユマは居合いに構え腰を落とし鬼虎を引き抜いた。

すると三日月形の光の刃が飛翔し魔導機兵を真つ二つにした。

続いてもう片方に配置されている魔導機兵にも、光の刃をお見舞いした。

こちらも魔導機兵を真つ二つにし、爆発炎上した。

これが呼び水と待って数十人……いや、百数十人ほどの兵士が庁舎から出てきた。

アシユマは鬼虎を峰に返していた。

早速一人目の腹部を打ち、二人目は袈裟に打って鎖骨を砕いていた。

これを窓の内側からみていたトウ・ライは、アシユマが囷と分かっ  
ついても何も出来ない自分に腹立たしさを覚えていた。

彼等の目的は殻兵器だ。

これは明らかだ。

アシユマはこれを炙り出す役目だ。

これを分かっているのなら党庁舎に立てこもれば良さそうな物だが、そうすればアシユマが直接来てこれを打ち砕くだろう。

ならば、矢張り殻兵器を持って逃げ出すか？

それはそれこそ彼等の思う壺だろう。

いずれにせよ、アシユマは一人で陣を突破するだろう。

どうしたものかと、トウ・ライは思い悩んでいた。

アシユマは、確実に敵兵の数を減らして行った。

アシユマは今更ながら気弾の使いようと言うモノが分かってきた。今までは斬る為のもの、打ち砕くためのもの、討ち貫く為のもの

との認識しか持っていなかった。

気弾で、ただ衝撃を与えて戦闘能力を奪うに留める使い方と言う認識を持ったことは無かった。

いま、ここに来て初めてその使い方に変化を来たしていた。

アシユマはひじょうに細かい、デリケートな気と鬼虎の使い方を学ぼうとしていた。

相手を殺さない鬼虎の使い方。

アシユマはある域に達しようとしていた。

そして、念導境界面。

これの使い方にもある変化が訪れようとしていた。

念導境界面の爆発的膨張である。

敵兵が念導境界面に触れる。

それを反射的に察知して念導境界面を爆発的に膨張させる。

敵兵は圧倒的な気の圧力に弾き飛ばされるのである。

今やアシユマの行進を止める敵兵など有りはしなかった。

アシユマは庁舎の前に来た。

敵兵が殻兵器を持って逃げ出した形跡は無い。

念のためにヨデイに確認を取ってみる。

「ヨデイ……俺だ。アシユマだ。そっちの様子はどうだ？」

『静かな物ですよ。猫の子一匹這い出てきやしない。……いや、サ

イコ・フライヤーだ。上空にサイコ・フライヤー来ている！ オル

バニアン！ アルミナ……！』

「まで、ヨデイ！ それすらおとりである可能性が高い！ 俺が行

く……！」

『分かりました。こちらはもう少し待機していますよ』

「わかった。通信、終わり」

「我が飛ぶのは暗雲の空

戦の女神を犯してもぎ取る

その背の羽根は既に漆黒

我が背に添えて我が羽根に  
そして散るかなこのわが身  
禁忌を犯して我が翼となれ  
ウイング！！」

アシユマはウイングを唱え庁舎の屋上へと向かった。  
サイコ・フライヤーは丁度屋上から飛び立つ所だった。

アシユマはそのコクピットの上に降り立ち、  
船を止める。積荷を<sup>あつた</sup>検めさせてもらう。下手な事は考えるなよ？  
パイロットに鬼虎を突きつけて言うとパイロットは頭をがくがく  
とさせて恭順の意を示した。

アシユマがサイコ・フライヤー内に侵入した時、ヨデイから連絡が  
入った。

『アシユマ君、聞こえますか？』

「ああ、聞こえるぞヨデイ」

『いま、庁舎から十何台かの車が発車したようです。今からそちら  
を追います』

「分かった。気をつけて行ってくれ。さて、この機に乗っているの  
は君たちだけかな？」

パイロット二人はアシユマの流暢なクローン語に対し、ただがく  
がくと頭を縦に振るのみであった。

しかしアシユマは、パイロット以外にも人の気配を感じていた。

さて、それはどこか？

アシユマが奥にある左右のカーゴルームに足を向けたときだった。  
カーゴルームからそれぞれ二人ずつ拳銃を持った連中が出てきた。

「何故拳銃か？」

アシユマが問うた。

「剣ではこの狭いカーゴルームではかさばるからな」  
クローンの若い兵士が答えていた。

「成る程」

アシユマは感心していた。

「またこの距離では、お前の念導境界面も役に立つまい」

「なるほどそう考えたか。ならば、矢張り剣を選ぶべきだったな」

「なんだと？ 負け惜しみを」

「なら試してみるか？」

そう言っつてアシユマはゆっくりと鬼虎を納刀した。

若い兵士達はアシユマが何をしているのか理解できないでいた。

そしていきなりアシユマは左右の兵士に掌底で発気の術を掛けた。

残りの二人が驚いている隙にその二人にも発気の術を掛け、一呼

吸の間に合計四人を倒していた。

アシユマは手早く六人を縛り上げ殻兵器の有無を調べたが存在しなかった。

「ヨデイ、聞こえるか？ こっちは駄目だった」

『そうですか。分かりました。後はこちらで引き受けます。アシユ

マ君は……』

「何か嫌な予感がする。ここで待機する」

『そうですか。アシユマ君の勘は当たりますからね。分かりました。

暫くそこにいてください』

「そうする」

アシユマはそう言っつて通信を切り、地面に降り立った。

そして何とはなしにその辺を歩き回っていた。

こつん、とブーツに当たる物があった。

マンホールの縁だ。

アシユマの何気ない表情は驚愕の表情へと変わった。

ヨデイのクーペ・カプリオレは、夜の高速道路でクーロンの車を追っていた。

エファールが呪文を唱え始める。

「幾千筋の天駆ける、神の罰たる雷鳴よ  
汝の顔に笑みは無し、  
未来永劫繰り返される  
神の罰をその身に知らん。  
サンダーストライク！！」

すると、雷鳴が轟き車を襲い、車の電気系統を駄目にした。  
車は止まり、中から人ができて剣を持ち迎え撃とうとした。  
しかし、すぐさま、エファールの鞭が撓って、男達の剣をその手  
から奪い去って行った。

ヨデイが車から降りて男たちを、棒で突き気絶させた後、車の中  
を検めた。

「どう？ ヨデイ」

と、エファール。

「あー、駄目ですねえ。ないですね」

「そう、残念ね」

「他の車に期待しましょう」

オルバニアンとアルミナは、魔導機兵『ラヴァー』を駆り車を追  
い詰めて、停車させていた。

『よし！ 手を上げてゆっくりと地面に伏せるんだ』

機上のオルバニアンが言った。

アルミナが機から降り、男たちの身体を調べ上げそして縛り上げ  
ていく。

『アルミナ、楽しそうな仕事だなあ』

『ばか！ あに言ってるのよ』

『へいへい。で、殻兵器はみつかったあ？』

『うーん、駄目ねえ。無いわ』

『ちゃんと探したのかあ？』

「捜したわよ！ 失礼ねえ」

『じゃあ、他の組に期待だな』

アーチエルは悩んでいた。

どうしたら、車も人も傷つけずに止める事が出来るだろうと。

「王女。悩んではかりだと逃げられてしまいますゾイ」

アベニが言った。

「分かっています。もう少しお待ちを」

「もう、姉様！ サンダーストライクでも、何でもやって、脅かしてやればいいのじゃ！ 姉様が出来ぬとあれば、わらわが代わりにやっても良いぞ!？」

「そうだわ！ それだわ！」

アーチエルは何を思ったか、

「汝黄金の瞳を持つ者よ

汝黄金の翼を持つ者よ

罪びとどもが汝を仰がん。

今こそ正義を見せるべし！

出でよ竜神、

バハムート!!!」

バハムートを召喚していた。

アーチエルは呪文詠唱に入った。

バハムートはアーチエル達の車を追い抜いて飛行し、追いかけるクローンの車をも追い越して、その前に立ちはだかった。

クローン人の車は慌てて止まり皆逃げ出そうとした。

だが、アーチエルのバハムートが

『逃げないで下さい！ 逃げればこのバハムートのブレスが、容赦なく貴方たちを焼きます』

そう言った。

勿論標準語なのだが、言っている事は伝わったようだ。皆その場に這いつくばった。

あとはリイナがボディチェックをしていって、縛り上げて行った。アベニが車内をチェックする。

アベニがこちらを向いて首を横にする。

「そうですか。では、ヨデイ様に連絡しましょう」

「そうですか、分かりました。ではこちらに戻ってきてください。はい。はい。では」

ヨデイが受けた。

「アーチエルのところも駄目だったの？」

「そうみたいです。何のために車を走らせたんだか。これじゃあ、まるで全てが罠……！　そうか、全て罠なんだ！　じゃあ、本命は何処だ？　何処にいる！？」

その時アシユマの通信が入った。

「はい、ヨデイ……アシユマ君！」

「ヨデイ！　やられた！　敵の本命は下水道からの脱出だった！」

『なんですって！？　追いつけそうですか？』

「分からん。敵が何処で下水道を出て、どれだけの数に分散されるかによる。いま気の流れを追って追跡している所だ」

『今何処ですか！？　我々も急行します』

「Eの二十五度、Nの七十五度だ」

『分かりました』

「皆の目を掻い潜りこんな方法で脱出を図るとは大したタマだ」  
アシユマは独りごちた。

幸い追跡すれば追跡するほど、気の流れは強くなるし、分岐すると言ったことも無かった。

(これは最後まで分岐せずに行くかな)

等とアシユマは考えていた。

案の定分岐はしなかったが、下水道の出口が見えてきた。

(まずいなこのまま街に逃げられでもしたら……)

が、その手前に人影があった。

一人四個、二人いたので計八個の殻兵器があった。

「待て!!」

アシユマが言った。

人影が思わず立ち止まる。

そして振り向いた。

一人は小者、そしてもう一人はトウ・ライ大佐だった。

「トウ・ライか。成る程、人の裏をかくのに長けているわけだ。危

うく逃す所だったよ」

「お褒めに預かり光栄だな、アシユマ・アトーよ」

そう言いながら殻兵器を肩から下ろした。

そして、トウ・ライは

「これをもっていけ。ここは私が何とかする」

と、言った。

小者はそれを拾い上げてその場を去ろうとした。

そこへ、アシユマが、居合い宜しく気弾を発射した。

気弾は小者の背に当り小者は気絶してしまった。

「くっ……」

トウ・ライは悔しがり、

「この場はお前を倒して、活路を開くしかないようだな」

そう言った。

「そういうことだ」

アシユマは素早く納刀し居合いの形に嵌はまった。

トウ・ライは青龍刀（柳葉刀）を抜き鶴翼の構えを取った。

そして、間を空けず舞うように突き、薙いで来た。

まるで何かの舞踏を見ているようだ。

動きに華やかさがある。

しかし、アシユマは寸余の見切りでこれを悉くかわし、居合いを抜く気配を見せた。

するとトウ・ライはするすると間合いの外へ後退る。

アシユマはこれを小賢しいと思った。

「トウ・ライよ、次の一撃が我等の永の別れとなる。覚悟せよ」

アシユマはいよいよ居合いを放つ気配を見せた。

トウ・ライはつつつ……と後ろに下がった。

そしてトウ・ライはふと困った。

アシユマを攻撃する隙が無いのだ。

いつその事鬼虎を抜かせておいて後の先を取るか、と考えを決めた。

トウ・ライは再び鶴翼の構えを取った。

アシユマはじりつと足場を固め、跳ぶように間合いを詰めた。

その速度たるやトウ・ライの予想を遥かに超え、慌てて刀をアシユマの頭部に向けて突いた。

アシユマは首を僅かに捻りこれかわし、抜く手も見せずに鬼虎を引き抜いた。

白い光芒が走った。

十分に手ごたえがあった。

アシユマは血振りをくれて鬼虎を納刀した。

そして後を振り返る。

「ク、クローンに栄光あれ……！！」

それが知将トウ・ライの最期の言葉だった。

アシユマは殻兵器を処理した後、下水道の出口へと向かった。

出口までは二十メートルほどであった。

出口に出るとそこにはサイコフライヤーが待機してあった。

本当に間一髪の所だったのだ。

アシユマは小者を起こし、トウ・ライ太佐の死を告げ丁重に葬る

よつにと言った後、下水道の出口から空の彼方へと飛び去って行った。

#### 第四節 エファールの里帰り

「アイヤー！ よく帰ってきたネ！ ご苦労さん！」  
それが帰宅の挨拶だった。

夜は白々と明け始め、苦闘の終わりを告げていた。

「トウ・ライには、何度煮え湯を飲まされたか分からないヨ。これで長年の溜飲りゅういんが下がるネ」

リンはそう言った。

「今、暖かい食事出すネ。少し待ってるよろシ」

「トウ・ライか……。惜しい人物を亡くしたかもしれない……」

トウ・ライに止めを刺した本人、アシユマがそう漏らしていた。

「何言うネ、アシユマさん！ トウ・ライには何度も煮え湯を呑まされたつて、さつき私言ったネ？ やつとこれからつて時に、何、水差してるネ？」

「あ……、誤解無く聞いてもらえればいいのだが、あ奴、稀代の名将になつてたやも知れんと思つてな。知恵といい、度胸といい、奴以上の知将を見た事がない。たつた一人を除いては」

「誰だよ？ そりゃ」

オルバニアンが尋ねた。

「それを言つと本人が舞い上がつてふんぞり返るから言わん」

「やだなあ、アシユマ君、そんな事言つちや照れるなあ……」

ヨデイがはしゃぎだした。

（妙なとこだけ勘のいい奴）

アシユマは呆れた。

直ぐに食事が出来、早めの朝食はそのまま会議の場となった。

「これで、三大超大国ノーツ連邦、アヘイビア、クーロンと潰してきたわけだけど次どこ行く？ レボトミノ連邦あたりにも行ってみる？」

オルバニアンが言ってみた。

「そうですねえ、レボトミノ……」

ヨデイは考え込むような表情をした。

「レボトミノは行かなくて大丈夫だと思います」

アーチエルが言った。

「それはどうしてですかい？ 姫さん？」

「レボトミノの大統領テオドルさんは信用できる人だと思います」

「あ、さいですか」

「はい」

「アシユマ君は今の話どう聞きますか？」

ヨデイがアシユマに尋ねた。

「アーチエルを庇う訳ではないが、俺もあそこの大統領は信用でき  
ると思っている」

「そうですね……じゃあ、ドラスティス共和国にでも行って見ます  
かね？」

ヨデイが言った。

皆、無言で食事をしていた。

「では皆さん賛成と言うことで、次はドラスティス共和国ってな所  
かね？」

「いんじゃないですか？」

オルバニアンが推した。

「んじゃ、けつて……い」

ヨデイが言った。

「それじゃあ、お世話になりました」

ヨデイがリンに暇いとの挨拶あいさつをしていた。

「それはこっちの事ネ。こっちでの仕事大分やりやすくなったよ。

ありがとうさん」

「へっ、長くなると未練ができていけねえや。ここいらで行かせ  
て貰うぜ。有難うよ、リンさん」

オルバニアンが粹を装って言った。

「あ、あ、もう行くネ？　せめて一晩泊まって……あ、アシユマさん」

「？　何？　リン」

（子種の件覚えておいて。いつか必ず貰いに行くから）

リンはアシユマの耳のもと近付いて、アシユマに囁く。

「忘れた。リンも忘れる」

「もう、いけず〜〜！」

リンのその声を残して黒龍号は遙か彼方、ドラステイス共和国へと向かった。

黒龍号に乗る時分、アシユマがおかしな事を言い出した。

「ドラステイスか……懐かしいな。親父さんどうしてるかな？　エファール？　ジャンにタルチェロ……ジャンはどうしたろうな？　師範ぐらいにはなっているだろうな？　何せアイツはセンスあったしな……タルチェロ……アイツもなかなかやる奴だったからなあ」  
アシユマはどこか楽しそうだった。

それに対しエファールは何故か複雑な表情をしていた。

落ち込んでいるのか、楽しみにしているのか、微妙な表情をしていた。

アーチエル（とキュポア）はアシユマのその当時の話を聞いていた。

ヨデイも中々含むモノがある表情をしている。

オルバニアンは暗く沈んだエファールとヨデイ、そしてアシユマとアーチエルに

「その四人さあ、エファールの里帰りに行ってくれば？」

そう言った。

「え？」

意外な事を言われた四人は四者四様の反応を見せた。

なんと、一番嬉しがったのは意外にもアーチエルで、アシュマの過去が聞けると思ったかららしい。

次はアシュマで普通の喜び方だった。

その次はヨディでこれは屈折した笑みを浮かべて、ふふふと笑っていた。

最後はエファールで露骨に嫌な顔をした。

そんな四人を知ってか知らずかオルバニアンは

「うん、そーだ。それがいい」

勝手に決めつけ、アシュマ以外をさつさと寝かせた。

最後まで、ごねたのは、キュポアで

「なぜ、わらわは付いて行ってはいかんのじゃあ!!」

オルバニアンに噛み付いた。

「今回の目的はエファールの里帰りにある。アシュマはおまけだ。

ついでに言うなら、ヨディやアーチエルの姫さんなんかは、おまけのおまけだ。それに付いて行き、更におまけのおまけのおまけになりたいか?」

キュポアは、そこまで自分を貶めなければならないのかと、逆に行く気が失せて来た。

「怪獣、お前は可哀相じゃな。おまえはおまけじゃ」

キュポアは本気でアシュマを哀れんだ。

「アシュマ、お前も寝て来いよ。ここはかつちりやつとくからよ!」  
オルバニアンが勧めた

「いや、いい。眠くない」

アシュマは本気で眠くはなさそうだった。

「眠くないって言うんだから良いんじゃない?」

アルミナがアシュマを補い助けた。

「そうかあ?」

「そうよう」

「ホントに大丈夫かあ? アシュマ」

「しょうがないなあ。そこまで言うんだったらシャワーだけ浴びさ

せてもらおうか」

アシユマは席を立ちエナジアのバーを下げた。

「キュポアがいるんだったら、キュポアを使えば良いだろうに……」  
オルバニアンがそうぼやいた。

「キュポアは眠ってアシユマが連れて行った」

リイナが言った。

「わあっ！！ ビックリしたあ……。リイナ、お前いたのか。大丈夫なのか？ 子供は寝る時間だぞ？」

オルバニアンは驚いたようだ。

「私もイレギュラーナンバーだ。このくらいは屁でもない」

「ああ、さいでつか。なんなら操縦代わってもらいましょうか？」

「良いのか？ 操縦するぞ？ ホントに」

「出来るンかい！？」

アシユマがシャワーを浴び終えて暫く航行しているとドラスティス共和国の領空まであと一時間と言ったところまで来た。

この頃になるとクルーは起き出し、シャワーを浴びたり、軽く食事を済ますようになる。

「アシユマさまお早う御座います。代わりましょうか？」

アーチエルが声を掛けてきた。

半球版の交代の事を言ったのだ。

アーチエルは少しお洒落をしているようである。

薄いブルーで腰をきゅっと細めた長めのワンピースで袖丈も長く袖口が白い。

裾からフリルも見えている。

「おはよう、アーチエル。どうせあと子一時間だし、このまま行っ  
てしまおう」

アシユマは言った。

ヨデイもシャワーを浴び終え、エファールもシャワーを浴び終えてブリッジにやって来た。

エファールもお洒落をしてきた。

それは品の良いグレーのボデイコンシヤスのスーツに紺のブラウス、アクセントに赤いスカーフを身に着けていた。

足元は黒のストッキングに赤いエナメルのヒールを履いた。

一見落ち着いた感じに決めて見せたそれは、大人の色気と言う物を嫌と言うほど醸し出していた。

そんなエファールを見て、ヨデイはぽかんと口を開けていた。

「な、なによ？ そんな目で見つめて？ そんな馬鹿みたいな顔しないの！」

エファールは少し怒ったような困ったような表情をした。

「エファール、オルト山の麓でいいんだな？」

オルバニアンが訊いてきた。

「ええ、オルト山の麓にアラククと言う町があるからそこで下ろして頂戴」

「そこから道場まで行くわけだ」

「ええ、まあ。でも、貴方たちが言うような道場とちよつとイメー

ジ違うわよ？」

「うを！ 行ってみてえ！ どんな所なんだ？」

「また今度話してあげるわよ」

黒龍号はオルト山の麓にある古い町アラククより少しはなれたところに機を降ろした。

エファールは久方振りに故郷の地を踏んだ。

エファールは暫く感慨に耽っていた。

それはアシユマも似たような感じで、暫くはアラククの町を見回していた。

町と言っても、交通の要衝であるアラックは、かなり潤っていた。だがこの領地全体で見ると、必ずしも潤っているとは限らなかった。

領地は、山がちで、畑は少なく、取れる量の作物も限られていた。また地味は豊かではなく、取れる作物は、必ずしも良質の物とはいえなかった。

そんな地方の領主が、上に納める税金の大半をアラックの町に頼ったのも、無理からぬ事である。

その地方の領主こそエファールの父、エント・ソーフア、その人であった。

エントは、苦しいお家事情から、家伝来の武闘技を広く一般に開放し、そこから収入を得ていた。

一行はアラックの町に着いた。

「何も変わってないな、エファール」

アシュマはエファールを省みた。

アシュマはこの寒いのに夏冬変わらずそのままの格好だった。

「でも、父上にどんな顔をして帰ればいいのかしら」

エファールは困り顔だ

エファールは長めのファー付きの、毛のコートに黒い手袋をつけていた。

「知らん」

アシュマは言い放つ。

「そこら辺の無愛想振りは昔と変わらないわね、アシュマ」

「そうか？」

「そうね。だからカル口たちなんか虐められていたんでしょ？」

言葉も通じなくて、みんなの輪の外にいたから」

「でも一週間で簡単な言葉を覚えて、カル口達をぶん殴ってやった」

「ああ、アレからだっただかしら？ 父上がアシュマの事を注目し始

めたのは」

「そうだったのか？」

「そうよ」

エファールは断じた。

アーチエルは頭に毛の帽子を被り、ステンカラーのコートに襟元と袖口にファーの付いた物を着ていた。

アーチエルはアシユマの過去の事が聞けて嬉しい反面少し嫉妬もした。

ヨディは素早くアーチエルの胸中を察し

「アーチエル様。ここは仕方御座いません。二人の共通の話題です。我慢しましょう」

ヨディは濃茶のジャケットに白のトレンチコートを着ていた。

「とりあえず、車を拾いましょう」

エファールが言った。

エファールたちは車を見つけ領主エントの居城に向けて車を走らせた。

車は九十九折くじゅうひやくの山道を登って行った。

山腹で車を降りた。

車はそこで折り返させ、自分たちはそのまま真っ直ぐ、城のほうへ向かった。

城には、山門があり、侵入してくる者を、頑なに拒んでいた。

山門の周りは、切り立った崖で天然の要害だった。

山門の前には堀が掘られており、水量の多い川が流れていた。

『開門！』

エファールが声を上げた。

門衛が、

『何奴ぞ？ 事と次第によっては許さぬゆえ覚悟せよ。先ずは姓名、次にここに来た目的を言ってもらおう』

山門に付随している塔から、声が降りかかってきた。

『カル口！ 貴方門衛長になったの？ 大した出世だわよ』

『そ、その声、その姿形は……エ、エファールの姉さん!?!』

『そうよ。だから早くあけて頂戴』

『姉さん、気になる奴が一人いるんですが……』

『気にしない!?!』

『い、いやそいつはどう見ても……』

『そうよ、カルロ。貴方の天敵、アシュマ・アトーよ!』

『ひえっ! ひえっ! ひえっ! アシュマ・アトーが帰ってきた  
く!』

門衛カルロは、門をあけるのも忘れて逃げ去ってしまった。

「アシュマさま、カルロさんて聞こえたような気がするけれど、カルロさんてアシュマさまを虐めてらした方では?」

アーチエルがアシュマに尋ねていた。

「それはね、最初の一週間はカルロがアシュマを虐め、第二週目でアシュマが反撃をして最後の三週目の頭にはカルロを子分にしていたわね」

エファールがアシュマの代わりに答えていた。

「ふうん」

アーチエルはそう言ったに過ぎなかった。

この手の話を、アーチエルはアシュマ自身の口から、聞いたかったのだ。

「全く手際の悪い……」

アシュマはぼやき、ウイングで山門脇の塔に登った。

見ると見知った顔が二、三人。

『なんだ、ガングにゴンスにサバニじゃないか。居るなら居ると言え』

山門が開かれていく。

『おまえら、ありがとな』

アシュマが声を掛けた。

『二度と来るなあ! 悪魔あ! 変態野郎!!!』

『なんだってえ?』

アシユマが鬼虎の柄に手をやりながら訊いた。

『な・なんでもござえやせん！ アシユマの兄貴！』

『そうだ、いい子にしてるよ。くっくっくっくっ……』

「アシユマさま、それはドラステイス語？」

アーチエルが訊いた。

「ん？ ああ、そうだよ」

アシユマが返す。

「アシユマさま楽しそう」

「済まない、はしゃぎすぎたか？」

「いいえ。楽しそうなアシユマさまを見るのは嬉しいです」

アーチエルは優しく微笑んだ。

アーチエルは少し嘘をついた。

基本的にアシユマが楽しい事はアーチエルも嬉しい。

しかし前提条件があつて、そこにエファールが絡んでないことが条件となる。

もう、アシユマとエファールにとっては過去の話しの筈なのにある。

アシユマは素早くそれを察知してアーチエルのそばに寄ってきて、そして言った。

「俺の幸せはアーチエルの笑顔」

アーチエルは嬉しさで胸が一杯になった。

二人は久しぶりのキスをした。

一方、エファールとヨデイもいい雰囲気だ。

その様子を覗く遠眼鏡が一つ……。

この途をまがると……そこは野天闘技場だった。

規模もかなり大きい。

ほお、と、ヨデイが感心した。

木型に向かつて木剣で切りついているもの、形稽古に励んでいる物、組み稽古をしているもの、様々な稽古をこの屋外稽古場で行っていた。

雨が降っても、雷が鳴ろうとも、雹が落ちてこようとも、雪が降ろうとも、夏の暑さに負けず、冬の寒さにも負けず、春の砂塵にも負けず強い精神と肉体を作り上げる。それがこの流儀の真骨頂といえよう。

この流儀に名前は無い。

ただ、昔から与えられた技術と技を伝え行くのみだ。

そして今も手を取り脚を取り、自ら指導をしているのは、エファールの父エント・ソーフア公その人であった。

エファールたちはエント公がこちらに向かってくるのを認めた。

四人の内三人が跪いた。

立っていたのは愛娘エファールかと思いきや、さにあらず。

立っていたのはアシユマ・アトー、その人だった。

(アシユマ君、跪く、跪くッ！)

ヨデイは言ったが、公は既に側まで来ていて、跪く暇等もう無かった。

「親父さん、お久しぶりです。アシユマです」

「これがあの、はなたれアシユマか？ 見違えたぞ。全くエファールよ！ ようもアシユマを口説き落とした！ 大儀である！」

「え？」

「そう言う顔を全員がしている中、エファールは、

「父上、それは勘違いで、アシユマは……」

「そう言いかけるのを、

「よいよい。苦労話は中にて聞く。先ずは皆様方、こちらへ」

「親父さん、それは……」

「アシユマが言いかけるのを

「よいよい」

「一蹴してしまった。

そして

「エファールは『必ずアシユマを口説き落として帰ってくる』が口癖じゃったものなあ……」

「エファールは『必ずアシユマを口説き落として帰ってくる』が口癖じゃったものなあ……」

遠い目をした。

そうこう言っている内に、公、自ら、客人を引き連れてきた形になった。

「お父様、城の案内なんて後でいいのよ？ それよりも私とアシユマは……」

「よいよい。自慢話は後で聞こう。別にワシは城の案内なんぞせんぞ？ ピエールに引き渡す為じゃ」

「ピエール、そのまんまの名前だなあ」

ヨデイが呟いた。

「そういえば、そこもとらの名を聞いていなかったな。名乗るのが遅れた。大変失礼致した。わしはエント・ソーフア。この地方の領主をしておる」

すると、アーチエルと、ヨデイはその場に再び跪いた。

「公爵様におかれましては、お初にお目にかかり恐悦至極に存じます。私ヨデイ・ヨフルと申す商人に御座います。以後お見知りおきを」

「そうか、そちは商人か。今後ともエフアールをよろしく頼むぞ」「ははっ」

「お初にお目にかかり恐悦至極に存じます。わたくしアーチエル・アップルトンと申します」

アーチエルが言うと、公爵が即座に驚き、跪き

「ご、ご尊顔を拝し奉り、身に余る光栄。恐悦至極に御座います」

「お、お顔をお上げ下さいソーフア様。私こそお初にお目にかかり、この上ない身に余る光栄。以後よしなに」

と、言ったものだ。

そして、

「エフアールよ、お前はとんでもないお方を連れて参ったな」  
そう言った。

そして、アーチエル達のほうを振り向き、

「何も無き城ではありませんがゆるりとお過ごしくだされ」

とも、言った。

「お心遣い感謝いたします」

そして、アーチエルが謝意を示した。

壮年の男性が現れ、

「私この城の執事をしております。ピエールと申します。皆様方の便宜を取り計らうよう仰せつかっております。以後宜しくお願いいたします」

その姿を見たエフアールは、

「まあ、ピエール随分と老けてしまつて……」

嘆いたがピエールは、

「お嬢様は随分とお美しくなられて……」

目を細めた。

「そしてこれがあのはなたれ小僧のアシユマとは……」  
アシユマを見て言った。

「はなたれはやめてくれ。今は一応この城の客だ」

「そつで御座いましたな。失礼をば。それにしても、ようも鍛えられましたな」

「分かるか」

「はい」

「それが分かる。ピエールも相当にやるな」

「分かりますか？」

「分かるとも」

「なんか男同士で変な盛り上がりか足してるわね」

エフアールが言い、

「そ、そうですね。おほほ」

アーチエルが受けた。

「こちらが皆様方のお部屋になっております。全て個室となっております」

「私の部屋が無いわね」

エフアールが言う

「お嬢様のお部屋は昔のままにとっておいてあります故」

「そう、それならそれでいいわ。もう直ぐ夕食だから、それまでここで寛いでいて」

「ああ」

アシユマが頷く。

「何か不都合が御座いましたらベッド脇のブザーでお知らせ下さい」  
ピエールがそう言うと、エファールはピエールと階上へ昇って行った。

エファールは昔の自分の部屋にやって来た。

ここには色々な思い出が詰まっている。

ポロボロのアシユマが始めてきた日。

初めての稽古で頑なに自分の形にこだわったアシユマ。

いつしか自分がアシユマに惹かれていることに気付いた日。

ジャンにどうしたらアシユマに上手く告白できるか悩み相談した日。

自分の想いに懊悩した日々。

アシユマに勝てる者が居なくなつた日、父でさえも……。

そして、この城を去つた日。

甘酸っぱい気持ちと共に、今もありありと蘇る当時の情景……。

アシユマは愛しい。

いや、愛しかった。

この感情は一生拭い去れないだろう。

だが、今愛しいのは……。

落ち着いている暇もなくすぐさま食事の時間となつた。

門弟は殆どが通いの為その時刻を以つて上がる。

公爵は残つた住み込みの門弟(?)と食事を探るのが常だつた。

それが今日は客が来る。エファールお嬢様も帰ってきていらつしやる。

それだけで場は浮ついていた。

そんな中、エファールたちは入ってきた。

アーチエルは地味目ながらも華がある桃色に染めたシルクのドレスと、裾から見える白いフリルが印象的だった。

そして、矢張りシルクの純白で刺繍の入った手袋を付け、脚には白いストッキングをはいていた。

髪は三つ編みにして巻いてアップにまとめた。

これで先ずどよめきが起こった。

次にエファールが真紅のドレスを着てやって来た。

横側に深く切れ上がったスリットが入っていた。

胸元は大きく切り開かれていた。

足には黒いストッキングを履いて、髪にはバラの髪飾りをつけていた。

更に男たちはエファールが来た事でどよめいた。

男たちが入って来たが門弟たちにはどうでもいい事だった。

皆の前に食事が給仕された。

「さて、諸君！！ 食事の前に聞いて欲しい！！ ここにいる我が

愛娘エファールの婚約の事だが……」

「お父様！」

「親父さん！」

アシユマとエファールが同時にエント公に声を上げていた。

ヨデイとアーチエルが固唾を呑んだ。

「何をうるたえておる二人とも！ 話しは最後まで聞かんか！ ……」

…我が愛娘エファールの婚約者は明日の勝ち抜き式の試合の勝者と  
する。以上」

門弟たちは湧きに湧いた。

明日には、もしかしたら、エファールの婚約者かもしれないという事で湧いた。

例えそうないものは、その夢に酔いしれた。

その食事の席エントはアシユマに言った。

「最近そちの異名に、聞き捨てならぬものを聞く。それは如何か？」

「他人が勝手に名乗る故、気にしてはおりませぬ」

「『閃光の』までは許そう。だが、『血まみれの』とか『悪魔』。

これは一体どうしたことか！？ これは、お前が人を、あまりに殺めてきた証左ではないのかッ？ ワシはお前を、こんな殺人鬼に育てた覚えは無いぞっ！！」

「……………」

「何故黙る！？ そうなのか？ 鬼畜道に堕ちてしまったと言っのか」

「エント様、もうそのくらいにしては頂けませんか？ アシユマさまも、このようになりたくてなつたわけではありません……」

アーチエルが補って助けた。

「何故その様な事が貴女に……いや、失礼しました。分かるやも知れませぬなあ」

アーチエルはエントのその言葉に違和感を持った。

そこに居る誰もがそう思った言葉だった。

「ただ、例え半年間でも、我が息子のように想って来た男です。その男が、『血まみれだの』『鬼』だの『悪魔だの』と、こんな言葉に堪えられましようか？ 私には堪えられません」

「エント様……………」

アーチエルが呟いた。

「公爵様。差し出がましい口を利くようで申し訳ありませんが、アシユマ・アトー、そんじよそらの子悪党ではございません。人類滅亡のような惨禍あるとき、必ずや、立ち上がって、人類を苦難から守り導いてくれるような男だと、私は信じております」

「大きくでよつたな？ 風呂敷広げて。そちの名はなんと言ったかの？」

「ヨディ・ヨフルと申します」

「そつだ。そつであつたわ。そちの名も覚えておくぞ。そつだ、明日の勝ち抜き戦、特別に出場を認めよう。どうも、ただの狸ではなさそつだな。得物は何を使う？ 剣か？ 刀か？」

「『棒』に御座りまする」

「そつか、棒か。槍ならあるが……」

「木製の槍など御座いますか？」

「ある。成る程、木槍を改造して棒にするのか。良い、何本でも作つて納得行く物を使うがよい」

「ありがたき幸せ」

ヨデイはにやりと笑つた。

住み込みの門弟は何も言わなかつた。

皆、

「商人風情が」

そつ思つて侮つていたからである。

だが……

次の日の朝。

門弟は驚いた。

何せ双方合わせて百人による勝ち抜き戦をやるというのだ。

組み合わせは、エント公直々の知恵を絞りきつて、（と、いつても変な隠し事は無くして技量の良し悪しで）作成した、組み合わせ表に皆が唸っていた。

試合のほうはもう始まつていて最初のほうは、やれこつちだ、やれそつちだと、盛り上がつていた。

その後日高くなり中だるみとなり、その後徐々に盛り上がりを見せたのは日暮れも近くなつた頃合。

最後の十強（と、アシユマとヨデイ）の試合に入った。

アシユマの側の列は十強の半分五強の内、四強を倒していた。

向うの列は残る一強、アシユマの幼馴染ジャンとヨデイのみとな

った。

が、ジャンはそこから怒濤の勢いで勝ちを進めていく。そこから逆に反対側の五強を倒し、残すはアシユマのみとなった。だがジャンの体力も相当失われていた。

「公よ。ジャンの体力の磨耗が激しい。少し休ませるのはどうか？」  
「アシユマ・アトーよ。そなたの言う事一々尤もである。ジャンよ、そなたに十分間の休憩を与える」

「公爵様！ 私は大丈夫です。戦えます！！ 今すぐアシユマ・アトーとの試合を望みます！！」

そうジャンが叫んだ。

「裁定は下された。暫し待つが良い」

確かにジャンの息は上がっていたのだ。

その意味では正統な裁定といえるだろう。

心の置き場をどうしたらよいものか迷っていたのはアーチエルである。

勝ち抜き戦でどちらかが勝ち得るたびにそれはアーチエルの居る席……公爵の居る壇上に近付いてくる。

つまり、それは、アシユマがエファールとの婚約の儀をなさなければならぬと言っていることである。

自分の婚約者、アシユマはその時どうするのだろうか？

まさか、エファールとは婚約しはすまい。

そう頭で分かっているも心がざわめく。

あらぬ方へと飛んで行く。

あの、ジャンと言う人、実力の程は分からないが、アシユマに勝って欲しい。

不純な動機で、そう願ってしまう。

ああ！ いけない。

アーチエルはそんな心の葛藤に身を沈めていた。

ジャンの休憩時間が終わったようだ。

「アシュマ、この飯はいつか返す……」

「違うな、ジャン。俺は、お前に借りを作りたくなかったから、十分の休憩時間を貰った」

「！ そつか、それならいいだろう。思い切りやらせてもらおうとするか」

ぴゅん！

木剣をふるってジャンが前に出た。

アシュマの得物はエントが持っていた木刀であった。何種類かの木刀の内一本を借り受けた。

上寸より三寸四寸ほど長い物だった。

二人とも前に出て、審判の

「はじめ！」

の、掛け声で試合は始まった。

ジャンは右手に短めの片手剣、左手には少し小振りのラウンドシールドを構えていた。

それに対してアシュマの場合は、いつもと同じ右手に木刀を持ちだらりとぶら下げている。

これは、ジャンは、アシュマの形だと分かっていたので、憤慨も侮りもせず、更に警戒を強めた。

相手は、以前に、ここにいる全員と戦って勝った男。

そして今は『閃光のアシュマ』『BLOODYアシュマ』との異名を持つまでに成長した男。

はつきり言って、勝てる気がしなかった。

今や、エント公の一番弟子と、自他共に認める男が、この体たらくとは……アシュマが見たら笑うであろう。

そんな事ばかりを思っていた。

「体が硬いな」

そう言いながら、アシュマはすたすたと歩いていき、生死の間仕切りをいとも簡単に踏み越えてしまった。

ジャンはガチガチに緊張したままだ。

「ジャン、突け！」

ジャンは、反射的に言われるままに突いた。

後は体が反射的に動いていた。

付き、払い、薙ぎ……。

そしてその度にアシユマに

「脇が甘い」

「踏み込みが足りない」

「それでは相手に気取られる」

などと注意を払われた。

それは、ジャンにとって、屈辱的なことだったが、全てジャンの悪い癖をアシユマに一つ矯正されて行った。

後の述懐でジャンは、

「あの、短いながらも、充実した教えは、一生忘れられない」と、言っている。

「講釈はそこまでにせい、アシユマ」

「わかった。公爵よ」

そこから先はジャンは覚えていなかった。

次に目が覚めたとき、目に入ってきたのは、まだ青さの残る夕焼けになりかけの空だった。

自分は気を失っていたのだった。

「試合は？ 試合はどうなった？」

ジャンは飛び起きた時、肩口に鈍い痛みが走った。

「骨は折れてねえとさ」

「おめえの試合は終わったぜ。決勝はこれからだ」

「やっぱ、あの、アシユマって野郎は、ただもんじゃねえぜ。十強の内、最強のお前を、赤子の手を捻るようにやっちまうなんてよ」

「どんな負け方をしたんだ俺は？」

「一瞬よ。アシユマがお前の懐に入ってきて、肩口をばっさり。見事なもんだったぜ。やられっぷりもよ」

「さて皆の衆！！ 早朝よりながきにわたりしこの戦い、異邦人同士によって終わりをつげる。この試合はワシ自ら執り行う！！」

公爵の言葉に門弟全員がどよめき立った。

それもそのはず。

一度はこの場所を捨てた男と、全くの異邦人との対決である。

それを公自ら決裁をするというのだ。

どよめいて当然である。

「静かに！ 静かに！！ これより決勝戦を執り行う！！ イーハン出身、アシュマ・アトー！ 前へ……」

どよめきが起きる。

本人はいたって平静だ。

アシュマは、前へと出て行く。

アシュマは、どういふつもりなのだろう？

私の事は念頭に無いのか？

アーチエルは思った。

このままエファールと……。

いいえ、そんな筈はない……。

エファールもきつとこの試合の行方を気にしてる筈。

隣を見ると、少し不安そうなエファールがいた。

「イーハン出身、ヨディ・ヨフル、前へ……」

「えっ？ ヨディってイーハン出身だったの？」

エファールは驚いてみせる。

「互いに礼……始め……」

「アシュマ君は僕に勝ちを譲ってくれるなんて事は……」

「ないな。全然」

「やっぱり……」

「秘剣朧霞……たとえお前に……」

「ずるつちい！ 蘊蓄うんちくはいいからさ、朧霞は無しにしてよ……」

「そうこういつてる間に破る方法を考えるんだな……」

そうしてアシュマの身体は消えて行った。

皆がざわつき始めた。  
それはそうである。

人一人がその場から、消えうせてしまったのだから。  
ジャンは、

「あの技は……」  
そう呟いていた。

(アシユマが出て行く前に、編み出そうとしていた技だ。完成していたのか)

ジャンはそう思い出していた。

ヨデイは眼を瞑り、必死にアシユマの気を探ろうとした。  
が、駄目だった。

ヨデイが絶望しかけた時、公が

「水面に、投げたる小石の如く。波紋は広がり、跳ね返りて来たる」  
ヨデイは、はつとなり、すぐさま自分を中心に気を放った。

そして『波紋は広がり跳ね返りて来た』。

「そこだっ!!」  
ヨデイが棒を撓しならせたのは、ヨデイの真後ろだった。

が、アシユマにとっては受け止めるのが、ごく当然の当たり前で、  
すぐさま反撃に出ようとするところだった。

その時公爵が、  
「それまで!!」

試合を止めた。

全員が公の裁定の行方を求めている。

「この試合、勝者をヨデイ・ヨフルとする!!」  
門弟全員がどよめいた。

納得がいかないようだ。

「聞け! 皆の者! アシユマ・アトーはこの聖なる試合において、  
邪なる剣を使った。しかもこれをヨデイ殿は見事看破して見せた。

聖なるものが邪なるものを制したのだ。これ以上勝者たる理由があ  
るっか?」

門弟全員は納得した。

素朴な人たちだとアシユマは思った。

「改めて告げる。勝者、ヨディ・ヨフル!!」

わあああつ!!

門弟が湧いた。

エファールは複雑な気持ちで、言葉を発せないで居た。

「予てよりの約定通り、ヨディ・ヨフルを我が愛娘エファールの婿<sup>がね</sup>とする」

わあああつ!!

「勝者ヨディは壇上へ来るように。アシユマ・アトーは後でワシの部屋へ来るように」

「わあああん!! エファールさ〜ん!!」

ヨディは壇上へ来るなりエファールに泣いて抱きついた。

「わっ! 来るなり、なに抱きついてんのよ! みつともない!」

エファールは、ぼかぼかヨディを殴っていた。

「だって、もう駄目かと思いましたがよ〜。アシユマ君にエファールさん取られるかと思って」

「……もう、ばかね。最後に選ぶのは私。そして選ばれるのは貴方、ヨディ・ヨフルに決まっているでしょう?」

言ってエファールはヨディを優しく抱きしめた。

エント公は優しく二人を見つめた。

「エント様、ヨディ様がエファール様の想い人と知って?」

アーチエルは尋ねた。

「何のことやら? わしは勝者にエファールを与えたまで。それ以上でもそれ以下でもないわいの。さてワシらも行くかの」

「はい」

アーチエルは応え、

「あつ! 父上待つて!」

エファールは父親の後を追う。

「あ! エファールさん待つて!」

ヨデイが追いつがるものだから、ドレスはバリバリと破け、そしてエフアールはその裸体を衆目の前に晒す事になった。

うおおおおおっ！！

その時、門弟の熱気は最高潮に達した。

「きゃああああっ！ 何てことするのよ！ この変態！！」「

この後のヨデイの運命や推おして知るべし。

合掌。

エント公は自分の部屋で昔を懐かしんでいた。

素晴らしい素質を持つている少年に出会えた事。

その少年はアシュマと名乗った。

頑なに自分の形を崩そうとしないアシュマ。

そしてぐんぐん大きく伸びて、成長していくアシュマ。

エントはこの少年が、何処まで伸びるか見たくなくなった。

自分の流派など、どうでも良かった。

アシュマが、何処まで成長するかが、見たかったのである。

しかし、アシュマはここを飛び出してしまふ。

自分が更なる成長を遂げる為に。

今日の見たアシュマの秘剣は決して邪剣などではない。

アシュマが剣理を、極めて、極めて、極めつくしたその先に、掴んだ境地なのだ。

かつてアシュマは言っていた。

この世にあるものと、自分とを同化させる事が出来るのならば、この一剣は一本にもなるし無限にもなるのではないか？

それがあの一剣に湧いてでたのではないか？

それが聞きたかった。

コンコンとドアをノックする音がした。

「誰か？」

「アシュマです。親父さん」

「入るが良い」

アシユマは無言で入ってきた。

「掛ける」

アシユマはエント公の机の前にある椅子に掛けた。

「あの剣は……」

エント公は話を切り出した。

「あの剣？ ……ああ、朧霞ですか」

「そう……名付けたのか。その朧霞だが……あれがお前の出した答えなのか？」

「こたえ？」

「そう。昔に『この世にあるものと自分とを同化させる事が出来るのならばこの一剣は一本にもなるし無限にもなるのではないか？』と言った答えだ」

「ああ、そういえば昔そんな事も言ったかもしれませんが…」

「…」

「ですが？」

「朧霞は一通過点に過ぎません。自分で言うのもなんですが、アレは邪剣です。時と場合によっては便利に使えますが……」

「何、一通過点に過ぎぬというか」

エント公は、自分の胸が躍るのを、抑えられなかった。

「して、その境地とは？」

「明鏡止水……無想剣です」

「なんと！ 無想剣」

「万物と同化し一剣より無限が沸き起こり、無限を一剣に還す。それを我想わずうちに行く。これが自分の考える無想剣です。親父さん」

エント公は泣いていた。

人目を憚らず泣いていた。

悲しいのではない。

ただ、

(こやつはでかくなる。これだけでかいのに、まだまだでかくなる。とてもこの器に入り込むような珠ではないわ)

エントはその想いに、ただただ泣いていた。

アシユマはエント公を、ただ見つめていた。

最後に部屋の窓から外が覗ける遠眼鏡を何げに見た。

アシユマ達は食事の申し入れを辞すと、エントの治める城を後にした。

殻兵器の事があつたからである。

夜も更けた。

帰途の途中、山賊に出くわした。

覆面をしている。

『女と金を置いていけ。そうすれば命だけは助けよう』

山賊の首領格は言った。

『尻尾を巻いて逃げろ。そうすれば命だけは助けてやる』

アシユマがそう言った。

エフアールとヨデイが戦う気配を示した。

アシユマがそれを手で制した。

山賊よりも速くアシユマが鬼虎を抜いた。

『見損なつたぞ、カルロ』

そう言った言葉と賊が剣を抜くのが同時だった。

「アシユマさま殺しては……」

アーチエルが言いかけるのをアシユマは、

「分かっているッ！」

怒り気味に言った。

四人が同時に切りかかった。

が、そこに一陣の風が拭きぬけたようであった。

アシユマは賊の間を走りぬけ、

『こつちだ』

そう言った。

皆はつとして振り返った時、皆の持っている剣が、ぼきり、ぼきりと折れていた。

皆は恐れをなして逃げて行ったが、山賊の首領格は懐からナイフを取り出して、こちらに向かつて襲い掛かってくる気配を見せた。

『俺あ気に入らなかつたのよ、おめえみてえな無口で愛想も無く、挨拶もろくに出来ねえ奴が、何で公爵様のお気に入りなんだよ!?』

俺は絶対許せねえ!!! 納得がいかねえんだよ!!!』

『カル口、悲しいぞ。そんな俺のことなんてほおっておいて、精進すればもつと高みへ昇れたものを』

『くそっ! 同じことをさっきも言われたよ! エントのジジイにな』

『貴様、まさか……』

『そのまさかよ。エントのジジイをここに来る駄賃に殺つて来たのよ』

『アーチエル!!! 俺はコイツを殺す!!! 百害あって一理無しだ!!! 許せよ!!!』

アーチエルは二人の間にどう言う会話がなされたのかわからなかったが、最早二人の間に割つて入る事が出来ないと悟った。

「アシユマ! 私達はお父様の所へ行くわ」

悲壮なエフアールの声だけが聞こえてきた。

そして今来た道を大急ぎで戻って行った。

『やっと二人きりになったなあアシユマ』

『貴様だけは楽には殺さん』

『それはこっちの台詞よ』

そう言ったとき、カル口はアシユマに向けて毒霧を吹いた。

『くっ!!!』

アシユマは毒霧に目をやられた。

カル口は腰溜めに短剣をアシユマ目掛けて突いてきた。

が、アシユマはカル口の手首を掴んでそれを防いでいた。

『なつ、何故だつ！ お前は目が見えないはず！ なのに……』  
アシユマは秘剣、万の眼を用いていた。

『それは、お前が深い剣理を、悟っていないから、分からないんだ』  
『よ』

そう言つて、カル口を突き飛ばすとアシユマは

『どうもその折角の短剣を使いこなせないでいる、手が良くないな』  
あ

そう言つて、鬼虎を一閃二閃させると、カル口の右手の指を切り飛ばしてしまった。

『ひいっ！ いでえ！！』

だが果敢にも、もう片方の手で短剣を掴み、襲いかかろうとする。だがこれも、アシユマが鬼虎を振るうと、こちら側の手の指が、全て切り落とされてしまった。

『く、くそつ！ 義手代にいくら掛かると思つてやがるんだ！』

まだ余裕のようだ。

『カル口、貴様は益もない人間だから、殺すと言つたばかりだ。逃げるな』

そしてカル口の右の足首から下を、切り飛ばしてしまった。

『ぎゃっ！！』

カル口はつんのめつてごろりと転がり、こつちを見た。

『な、なあ、アシユマ。お、俺が悪かつた許してくれ、頼む』

『貴様は親父さんを殺した。親父さんの事だから口には出さなかつたかもしれない。潔く死んだかもしれない。が、元来、死など望んでいなかったはずだ！ それを貴様が……』

『す、すまねえ……お前の事を引き合いに出されちまつてよう！』

『それで何処を斬つた？ 足首か！？』

アシユマは残る足首を斬ってしまった。

『いでえっ！！』

『膝か？』

両の膝の臍を裂いた。

『うがあっ!!!』

『肘があっ』

両肘の腱も切ってしまった。

『やめてくれえ……アシユマあ……お前は鬼か？ 悪魔か？』

『嬉しい質問をしてくれる。その両方だよ……それにな人間はここを刺されると……』

アシユマはずぶりとカルロの腹部に刃を突き入れると、

『うっぎゃああああああっ!!!』

カルロは痛みが、

『致命傷じゃないが、痛みは相当なものだ』

アシユマは言った。

『あと、七〜八時間ほどすると、太陽が昇り始める。ここいらの直射日光はきつかったなあ。覚えてるか？ カルロ。それに夜の間は野生化した獰猛な野犬、昼間は死体をついばむ猛禽類がいたなあ。ま、精々無事に、帰還できることを祈っているよ。ふふふ、じゃあな』

『鬼！ 悪魔っ!!! お前は人の命を……』

アシユマがウィングで飛翔した後、聞こえてきた罵りの言葉だ。

『お前に、人の命を、どうこうと言われたくないね……』

アシユマはそう呟き、飛び去って行った。

途中、鬼虎に振動、続いてアシユマの携帯端末に信号。

何故か鬼虎の方を先に見てみる。

瞬間、頭の中に何かが詰め込まれたような感覚に陥る。

鬼虎に古代文字が浮かび上がる。

『システム本体に重大な生命維持の危機を感知。修復しますか？  
はい。いいえ。』

「……読めた！ 俺にも読めた！」

……などと感動している場合ではないのだ。

この場合の『システム本体に重大な生命維持の危機を感知』とはアーチエルの命が危ないという事。

多分ザ・ライフを使ったのだろう。

無茶をする娘だ。

早速命を救ってあげる。

そして携帯端末を取る。

「もしもし、アシユマだが……？」

エント公は生きていた。

いや、蘇った。

いや、これも違う。

蘇生したのだ。

アーチエルが後先考えずにザ・ライフを掛けたのだ。

そのお鉢がアシユマに回ってきた。

アーチエルを蘇らせる時に、頭に何か詰め込まれたような感覚に陥った、と喋ったら、アーチエルも、実は自分のときにもありましたと、告白した。

それにしてもエファールが、エント公にだきつき泣いて甘えていた。

こんなエファールを見るのは、初めてだった。

エント公によるとエファールは末の娘だという。

そういえばそうだったとアシユマも思い出す。

二度目の辞去だが仕方ない。

仕事はまだ山積している。

そして……。

「永の別れではないのよ父上……」

「しかしなあ、エファールよ……うつつうつつ」

「おとうさま！ 泣かないの……お父様に泣かれたら……私まで……うつつ、うつつ。……つい名残惜なごりおしくなっちゃうじゃない」

これが大人の巧妙な仕掛けと言うものだった。

「……残るかい？ エファールさん？」

ヨデイが優しい目で訊いた。

「父上……だめです。やっぱりこの人に付いて行きます」

エファールはヨデイになびいてしまった。

（まだまだですな、父上殿）

（何の。今日はたまたま運が良かっただけじゃ。勝った気でおるでないぞ）

火花を散らすようなそんな光景が見えたような気がした。

「しかしアーチエル様、かくも老いた爺<sup>じい</sup>やの命を助けていただき感謝の言葉も御座いません」

「命は皆平等にあるもの。老若男女を問いません」

アーチエルは優しく諭すように言った。

ここで一行は、やっと二度目の辞去を得た。

ヨデイ達は今度は安全を図って黒龍号に近くまで来てもらった。

後部ハッチから乗り込む面々。

エファールだけがいつまでも城を見続けていた。

「エファールさん。残りたかったら残っても良かったんですよ？」

ヨデイは少し揶揄してみた。

「ああた？」

エファールの口調が変わった。

「ひいつ!？」

「あああ？ 私の鞭が唸る所を見たい訳え？」

「いや、あの、その、ご、御免なさい……」

「夫婦のお楽しみ中すまないで御座る。早速調査結果を……」

「お？ すまないね。アベニ」

「ちよつとなによろ？ 二人して……」

いつのまにか二人の周りには人だかりが出来ていた。

「それでは、報告するで御座る。この国に殻兵器を持ち込んだ形跡なし。国のどこの機関にも、研究機関にも持ち込まれた形跡なし。以上で御座る」

「アベニが報告した。」

「そうですか。良かった。さて今日は寝ましようか？」  
と、ヨデイ。

オルバニアンは暇なので昼間寝ていたらしい。

そのお陰で目が冴えているらしい。

「俺まだいけるぜ！ ガンガン行こう」

他の者は寝ていたらしい。

「このまま寝かせて」

アルミナは眠そうにしている。

「今日は寝ましよう」

そう言う事になった。

エフアールが一人寂しく

「まあ、いい里帰りになったわ」

と、呟いた。

## 第五節 スコラ強襲

「うーん……ノルブルの天気はどんよりしてますねえ……」

ヨデイはノルブルの首都ロードルブリッジの郊外、山林の中に黒龍号を隠した。

どんよりした鈍色の空は今にも雨が降り出しそうだった。

「おお、寒い寒い……」

アベニを送り出したばかりのヨデイは、そう言って肩を震わせながら黒龍号の中へと戻って行った。

「アベニ爺は行ったかい？」

オルバニアンが訊く。

「ああ、行ったよ」

ヨデイが答える。

「このいつ降るとも知れない曇天の中をご苦労様で」

「全くです。ありがたいことで」

「全く何よあの体たらく。爺むさいったらありやしない。アベニ爺のほづがよっぽど若々しいわ」

エファールが吐き捨てた。

が、勿論本気ではない。

この間、エファールの父親エント公が瀕死の重傷を負った時も取り乱すエファールをなだめ、支え、何とか正気を取り戻させてくれた。

この人には、そういう力があるのだと、初めて知った。

それでも感謝している。

愛してもいる。

少し助平だが。

……それは人の事言えないかとエファールは、今までであったいろんな事を思い出し、くすりと笑ってみせる。

ヨデイがそれを見て後退る。

「私の可愛い笑顔を見て何で逃げる訳？」

「いつ？ いや？ 別に逃げてるわけでは……」

「いいえ、逃げてました」

「逃げてませんよー！！」

そういうヨディは逃げ始めた。

「まちなさい！ こらあ」

エフアールがヨディを追いかけた。

「アシユマさま。またやってますけど、止めなくて宜しいんですか？」

アーチエルは少し二人を案じた。

「愛情表現だ。ほっとけ」

アシユマは意に介さなかった。

「愛情表現なんですけれど、あの時試合に勝っていたら、どうなさるおつもりだったんです？」

「エフアールの話は蹴って、お前を選ぶ」

アーチエルは感激して、

「まあ！」

感嘆詞を一つついたら後アシユマの頬にキスを……

「またえつちい事をしよる。衆目の事も考えよ怪獣！ 姉様も……」

まっやくドイツもコイツもなっちょらん」

キユポアの一言でまたもキスはお預けになってしまった。

「もう！」

アーチエルのフラストレーションは溜まりっぱなしだ。

アシユマは、ははは、と笑って、視線を禁呪の書籍に戻した。

アシユマはここ数日間、時間を見つけては禁呪関連の書籍に目を通してきた。

そして、殻兵器に使用された禁呪をほぼ確定していた。

その名は『エンジェル』。

名前こそ美しいが威力は計り知れない。

アシユマが色々な書籍から集めて吟味し分析した結果の詩篇はこ

うだ。

禁忌を破り、犯したる者よ。

暗黒の彼方より来たる死の淵よ。

歴史は巡るこの場も然り。

黒き死の棘甘美な果実。

我にも与えよその快楽を。

今こそ彼らにその快楽を。

エンジェル

これが殻兵器の正体である。

属性は暗黒魔法。

即ち黒の魔導石と一緒に唱えられるものだ。

アシユマはこれを胸の内に秘め墓場まで持っていくつもりだった。

夕方、アベニが帰ってきた。

早速作戦を練る。

殻兵器自体は国防省に運び込まれた模様。

突入編成をどうするかでもめる。

先ずもめたのが、又してもキュポアの処遇である。

必ず本人は行くといって聞かないだろうし、かと言っておいて行けば、後で文句を言われるのは必定。

困った所である。

「で、俺に説得させるか!？」

アシユマが叫ぶ。

「アシユマ君が一番キュポア嬢の扱い上手いでしょ？」

ヨデイが乗せる。

「全く……」

「わらわはいいぞえ。待機組でも」

キュポアは、拍子抜けするほど、あっさりと承諾してしまった。

「お？」

意外に思ったのは、アシユマだけでない。

そこにいる全員がそう思ったのであった。

キュポアはキュポアで計算があつて、

（たまには、わらわも駄々をこねるだけでなく、一步退いて話も分かる大人の女の演出もせねばな。すると怪獣が、怪獣がわらわに…

…きゃ~~~~~っ！！）

喜びの為の演出らしい。

アシユマは、キュポアが一人で勝手に喜んでいる様を見るのは不気味だったが、とりあえず不安要因が一つ減ったので、よしと言う事にした。

アシユマはそう思うことにした。

夜半、首都ロードルブツギ、国防省前五百メートル。

平坦で見晴らしのいい敷地にその建物はたっている。

ゆえに、侵入し難く且つ脱出しにくい。

侵入者泣かせの立地条件だった。

「なあ、あんな所アベニ爺はどうやって忍び込んだんだ？」

オルバニアンは素朴な疑問を言ってみた。

「アベニ爺は変装も得意ですからねえ」

ヨディは当て推量で言ってみた。

「何階にあると言っていた？」

アシユマが確認する。

「十七階です」

ヨディが答えた。

「とにかく、あの入り口付近の敵は俺が何とかしよう。監視カメラ

には見つかるかもしれんがな」

「宜しく願います」

「我が飛ぶのは暗雲の空

戦の女神を犯してもぎ取る

その背の羽根は既に漆黒

我が背に添えて我が羽根に

そして散るかなこのわが身

禁忌を犯して我が翼となれ

ウイング」

アシユマは飛翔して行き、国防省の入り口に降り立った。

もちろん朧霞を使ってである。

入り口を警備する兵士は傍目には勝手にばたりばたりと倒れていき、あつという間に歩哨の兵士は皆倒れてしまった。

ここでアシユマはふつと姿を現し皆を招き寄せた。

「相変わらず見事ですなえ。朧霞」

ヨデイは言った。

「その朧霞を見破ったんだろ？」

オルバニアンが訊く。

「えへん！ その通り」

ヨデイが走りながら答える。

それを聞いていたアルミナが、アーチエルに

「本当にそうなの？」

そう訊いていた。

「私には分かりません。ただ、エファールさんのお父様が、朧霞の謎掛けをしていたように感じます」

「謎掛け？」

「『水面に、投げたる小石の如く。波紋は広がり、跳ね返りて来たる』だ、そうです」

「貴女よくそんな細かい文言まで覚えられるわねえ」

エフアールが呆れて言った。

「普通ではないのですか？」

「普通じゃないわ」

「うん普通じゃない」

「それにしても五百メートルを走る事がこんなに辛いだなんて……  
も、もう、私……」

「アーチエル、運動しなすぎ。それに私達に付き合わずに飛んで  
た方が楽だったんじゃないの？」

アルミナに諭された。

「あ、そうでした」

ヨデイたちが入り口に付いた。

「よし、中に入りましょう」

ヨデイが皆に指示をした

先頭はアシュマだ。

早速敵がお出ましとなる。

矢張り監視カメラには、朧霞はきかない様だ。

アシュマはヨデイを振り返り、言った。

「アシュマ君そんな事言っていないで、前、前！」

アシュマは、鬼虎を抜くなり峰に返して、鬼虎を振るった。

ヨデイは最近頼とに思うことは、アシュマが、鬼虎を振るう先に、  
わざわざ敵が入り込んでいって、鬼虎に当りに行っているように、  
見えることである。

アシュマの先読みなのだろうが、流石は達人と言ったところか。  
次々と敵をなぎ倒していく

だが、敵は散発的にしかやってこない。

少しおかしい。

それを最初に言い出したのはアシュマである……。

「おかしいな？」

「何がですか？」

ヨデイが応える。

「まるで誘っているようだ」

「誘っている？」

「足止めしているとも言っ」

「まさか……敵が散発的に来るのは、それだけの兵力が無いからでは？」

その時車の音が外から聞こえてきた。

「まさか！」

ヨデイが反応する。

「アシユマ君、ここはもういいです。車を追って下さい」

「いいのか？ 次に来るのは大部隊だぞ？」

「大丈夫です。王女、だそうですが？」

「仕方ありません。脱出を第一義とします」

「すまん、みんな！ 先に行く」

「おう！ イイって事よ！」

オルバニアンが威勢良くアシユマを送り出した。

アシユマは、窓ガラスを破りウィングを使って車の後を追った。

それから間も無く、アシユマの予告どおり大量の敵が現れた。

アシユマは車に追いつきつつあった。

装甲車のようだ。

銃眼から銃口を出しアシユマを狙い打つ。

だが、アシユマにとっては意味を成さない。

鬼虎の念導境界面に触れた途端、それは光に変換され電光として鬼虎の本身に吸収された。

車を追い越して、車のボンネットの上に降り立った。

「ひ、ひいいい……悪魔だあ」

運転手がさわぐ。

「騒ぐな！ あれが魔法と言う奴であろう。ただ、空を飛んで来たに過ぎん。それよりも奴を振り落とせ！」

「は、はい」

車は左右に蛇行した。

しかしアシユマが振り落とされる気配はまるで無い。

「車を止める」

アシユマが言う。

車は止まらない。

「二度は言わんぞ？ 車を止める。さもないと運転席を潰すぞ？」

「奴のハツタリだ！ 進め！ どうせ奴は何も出来ん！」

「特別だ。もう一度だけ警告してやる。車を止める。さもないと潰すぞ」

「いけ！ 走れ！ 奴の言う事などに構うな！」

「BLOODYアシユマの警告でもか？」

「いけ！！」

「救われん奴だ」

アシユマは鬼虎を助手席側に向けて気を込めた。

鬼虎の念導境界面が爆発的に膨張し、装甲車両の助手席側を潰した。

助手席側にいた上官は潰されて圧死した。

「ひっ、ひっ、ひいっ！」

運転手はパニック状態だ。

「車を止める！」

アシユマは強く命令した。

「！！！」

車のブレーキが踏まれ、装甲車は急停車した。

アシユマは車の後ろ側に行き

後ろの扉を開けようとした。

中から鍵が掛かっているようだ。

アシユマは鍵が掛かっているであろう部分に鬼虎を差し入れた。手ごたえがあった。

そのまま鍵を切り落とす。

そして扉を開けた。

中には兵士が三人いてそれぞれが一つずつ殻兵器を抱えていた。

「殻兵器を渡せ。さもなければ殺す」

アシユマがそうやって脅すと、一人が手放し殻兵器を放り投げた。

アシユマはそれを受け止めた。

すると残りの二人も殻兵器を手放した。

「殻兵器はこれだけか？」

兵士はがくがくと頭を縦に振って肯定の意を示した。

「もついい。行け」

アシユマは車を行かせた。

アシユマはその場で殻兵器を始末した。

ヨデイのティアマットがブレスを吐いていた。

通路の大きさに合わせて召喚したのは、五、六メートルのティアマットだった。

ティアマットのブレスは強力だが、大きさがこれでは威力は半減していた。

おまけに敵の銃弾は浴びるわ、剣で切られるわで、満身創痍のティアマット、いやヨデイだった。

「皆さんいったんティアマットは回収します」とうとうとヨデイが音を上げた。

「ヨデイ、下がってな。こう言うときに役立つのは、俺の可愛いバルカンちゃんよ」

言ってオルバニアンはバルカン砲の斉射を始めた。

確かにこう言う時のオルバニアンの念封弾のバルカン砲は効果的で、敵を次々なぎ倒していく。

オルバニアンが血路を開いて皆で突破した。

出口が近付いてきた。

オルバニアンたちは出口に向かって走った。

出口から外へと出た。

これで開放されるかと思っただが、状況はそれほど甘くなく、出口の周りには武装された兵士で一杯だった。

「こりゃあ、一斉に切りかかられたら、お仕舞いだなあ」

オルバニアンがぼやいた。

その時……

「天の雷、裁きの光よ、

願わくば、汝の敵を

その鎚にて、敵を滅ぼさん

我が覚えた怒りに換えて。

サンダーボルト!!」

アーチエルが叫んだ。

いかすち  
雷が辺りを襲った。

アーチエルがサンダーストライクの下位魔法、サンダーボルトを行使したのは多敵に対して満遍なく魔法をいきわたらせる為だ。

が、死人はいないはずである。

これで血路が開かれた。

後は脱出のみである。

ヨディはこの事をアシユマに知らせた。

ヨディ達は黒龍号のある所、ロードルブツギの郊外まで戻ってきた。

ヨデイが、

「今回は、大変痛い思いをしてきたびれました。早く開いてください」

そう息も絶え絶えに言った。

「はいはい、待っててくださいね」

アーチエルがシールドの解除に向かった。

「さて、次は何処にしましょうか……」

ヨデイが言う。

「次は小型のティアマツト出さなくて良いところにすりゃ良いんじゃないかね？」

オルバニアンが揶揄する。

「しょうがないじゃないですか。あの時はああいう選択肢しかなかったんですから。全くもう、酷い目に遭いましたよ。今度は召喚しなくていいところを……あれ？」

「ぎゃはははは、結局結論が一緒でやんの！」

「こら、怒りますよう！ もう」

「おっと、兄ちゃん、そいつあ勘弁」

「ねえ、オルバニアン、前から思ってたんだけど、なんでヨデイのこと時々『兄ちゃん』とかって呼ぶの？」

アルミナが話に割って入った。

「いや？ 別にただそう呼んでるだけ」

「ふ〜ん……」

「アルミナだって、エファールのこと『エファール姉さん』なんて呼んでるだろ？」

「それはそうだけど……」

「まあ、順当に行けば、次はノリトレアでお仕舞いだな。他に殻兵器を奪える勢力があるとも思えん」

リイナが言った。

「お〜〜」

一同から感嘆の声が上がる。

「じゃあ、次のノリトレアで任務終了ってところかな？」

オルバニアンが言う。

「そうですね、そんなところでしょう」

ヨデイが応じる。

そして、

「じゃあ、ノリトレアまで一気に行きましょう」

と、言った。

「そうだな。一応、挨拶にも行かないとイカンしな」

アシユマが呟く。

「誰に？」

アーチエルが訊く。

「ん？ それは行ってからの楽しみ」

「教えてくれないの？」

「直ぐに分かるさ」

「もっ」

「じゃあ、行きましようか。休める人は休んでくださいね」

ヨデイがコクピットに座ろうとすると、オルバニアンが、

「ヨデイはさっきので、痛い思いをしてるから休んでなよ」

そう言った。

「え？ いや、しかし……」

「ここは若いもんに任せてさ」

「じゃ、じゃあお言葉に甘えちゃいませうかね？」

「おう、甘えられるぜ！」

見るとエファールとアルミナも変わるようだ。

そして、アーチエルとアシユマも交代。

リーダーはなんとキュポアが付いた。

「できるのかい？ キュポア姫」

オルバニアンが訊いた。

「サイコレクターじゃる？ 要はイメージスキャナの裏返しじゃ。外に念を放出して跳ね返ってきたものを捕える。ただしステルス処理された者には効果が薄いんじゃない」

キユポアは答えて見せた。

「よく知ってるな」

アシュマが感嘆した。

「リイナの請け売りじゃがの。それに、リイナに仕込まれた」

「さて、そろそろ行きますか」

オルバニアンの操縦する黒龍号は浮き上がり空高く舞い上がった。雲の上に出て、一路ノリトレアを目指した。

ノリトレアには、昼近くになって到着した。

一夜明けて、すべての元凶ともいえるこの地に、ある種の感慨にひたり一行は降り立った。

思えば、全てがこの地より始まった。

ガルマインとの戦いの始まり。

破壊の権化バヴェル。

エヴァイブ・エブルとの戦い。

鬼虎を手に入れたこと。

アーヌとの宿命の戦いの幕開け……。

アシュマは、アベニとは別に行動する為に、ヨデイに単独行動の許可を貰おうとした。

目的は勿論ガルマインである。

「ガルマインに挨拶ねえ……」

ヨデイが言う。

オルバニアンが聞いていれば、おそらく一緒に行くと言っただろう。

アーチェルはまだ夢の中だ。

いま、ブリッジはアシュマとヨデイ……アルステイーンの二人し

かない。

「すまんアルステイン。お前の居城を血で穢すような事にもなるやもしれん」

「罪無き人を殺めさえしなければ、城なんていくら穢れても構わないんですがね。アシユマ君なら、無事に帰ってこれるだろうし。アーチエル様には、何も言わなくていいんですか」

「いったら、アーチエルに反対される。そうすると俺はもう、行けなくなる」

「誰が何を言うんですかあ？」

アーチエルがブリッジに入ってきた。

「あ、アーチエル様、お早う御座います」

「お早う御座います。ヨデイ様、アシユマさま」

「じゃあ、ヨデイ俺は行ってくる」

「アシユマさまどちらへいらっしゃるのです？」

「ちよつとしたお使いさ。直ぐに戻る」

アシユマはアーチエルの頬にキスをして外へ出て言った。

「ヨデイ様？ アシユマさまは、どちらへいらっしゃったのです？」

「ええ、ちよつとした、お使いですよ。お使い……」

アシユマはノリトレアの首都、王宮市の中心、ロイヤルパレス王宮の城門の近くまで飛んできた。

勿論人に目立たないようにではあるが。

地上に降り立つと門に向かって歩いて行った。

跳ね橋を渡り門番に近付いていく

「はい、通行許可証……」

門番にそうアシユマは言われると、アシユマは門番の眉間を人差し指と中指で突いた。

すると門番はそのままその場に立ったまま意識を飛ばされた。アシユマは何事も無かったようにその場を歩いて立ち去った。

街中は平時であるにもかかわらず暗く陰鬱な雰囲気か漂っていた。これがガルマインの治める政治の結果なのであると、気付くのに左程の時間を要さなかった。

マルル広場を徒歩で歩いて行つた。

この広場も元来なら人々がにぎわっているに違いない。人々はどこか陰を落としたように暗い表情をしていた。

「そこのお前、そこを動くな」  
アシユマは後を振り向いた。

「貴様、市民の帯刀は認められていない。市民カードを出せ」

警らの兵士は、剣を抜きながら、こちらへやって来た。

アシユマはまたも、兵士の眉間を指で突いた。

これがガルマインの治世なのだ。

いや、『治世』と、呼ぶにもおこがましい。

力で市民を押さえつける。

これでは、市民が陰鬱になる筈である。

常に監視の目が光っているのだから。

アシユマはマルル広場を後にした。

アシユマはマルル広場から第十二番門へ通じる道を歩いていた。

この第十二番門には、因縁めいたモノを、感じずにはいられない。かつてこの門を通じてガルマインに迫つた事がある。

門を抜けると王宮だ。

その門に近付いてきた。

するとすぐさま兵士達がやって来た。

それなりに人数はいるようだ。

指で眉間を突くような、悠長な事をしている暇はなさそうだ。

兵士は何も言わずに、斬ってきた。

多分、この門を渡ろうとする者は、問答無用に、斬り伏せて良い事になっているのだらう。

アシユマは兵士の剣を掻い潜り、何処を掴んでどう捻ったか、兵士は、ぽーんと投げ飛ばされて堀に落とされた。

水柱が上がる。

次の兵士また次の兵士とアシユマは兵士を投げ飛ばして行った。門衛は詰め所で何か連絡をしている。

兵士を十何人か投げ飛ばした後、その詰め所にいる門衛を無視してアシユマは王宮の中央大塔を目指した。

中央大塔を目指しているその途中で、かなり大勢の兵士がこちらを目指して走ってきた。

「ち。面倒な」

アシユマはそう吐き捨てると、鬼虎を抜いて峰に返した。

向うの兵士も走りながら剣を抜いてきた。

アシユマの峰打ちが最初の兵士に決まった。

続いて二撃目、三撃目と決まって兵士達は次々もんどり打って倒れて行った。

倒した兵士の数は百を下らないであろう。

だが、命は生かしておいた。

どうせ小者である。

命を奪った所で何の益も無い。

アシユマは鬼虎を引つ提げたまま、中央大塔へ向かった。

中央大塔の入り口には、先程よりも更に腕の立ちそうな男達が、そこを警護していた。

アシユマは構わずそのまま進んだ。

衛兵たちはアシユマに殺到した。

閃光のアシユマの異名通り、アシユマはその速い太刀捌きで守衛たちを倒して行った。

残りの衛兵達が怯んだ所で、アシユマは大喝した。

「まだやられたい者は居るかッ！」

多少腕に覚えのある者が、却ってアシユマと自分との力量の差を知る事が出来、敵わないと見て、道を開けた。

アシユマはその道の真ん中を堂々と歩いて行った。  
一階ホールに着いた。

塔を上るには二つの方法がある。

階段を上るのとエレベーターを使う二つの方法だ。

アシユマは階段を選んだ。

エレベーターでは途中で閉じ込められてしまう可能性があるからだ。  
だ。

まあ、閉じ込められてもいくらでも脱出する方法はあるのだが……。

ただ、歩いて上ったり走って上るのも時間が掛かる。

アシユマは階段通路を、ウィングで『飛んで』上る方法を探った。  
途中の要所要所でガルマインの手下『影の者』が護っていた。

余談ではあるが、今やガルマインは影の者を大量に養成、そして  
海外に『輸出』していた。

その素体はナンバーズなのであるが、素体は、アヘイビアから大  
量に輸入していた。

いわば輸入して加工して輸出する。

ノリトレアお得意の生業の形式である。

話を元に戻そう。

『影の者』はいわば殺しのプロフェッショナルである。

その者を前にして峰打ち程度で済まそうとはアシユマは思ってい  
ない。

アシユマは鬼虎の返した峰を元に戻した。

斬るつもりでいた。

アシユマは速攻と言わんばかりに備えの弱そうな影の者に斬りか  
かった。

拝みうちに頭蓋を割られる影の者。

続いて右へ左へと斬りかかり、横に薙ぎ、袈裟に斬りと大立ち回  
りをしてみせる。

気が付いてみれば、影の者たちは全滅していた。

こればかりは、仕方が無いとアシユマは思った。  
退く事を知らず、手を斬られようと脚を斬られようと体が動く限り襲ってくるのだ。  
命を絶つしかなかった。

アシユマは最上階へと来た。

ガルマインはここにいる筈である。

廊下を暫く進んでいくと大きな門に行く先を阻まれた。

門を両手で押し開けた。

そこは広く大きな一つの部屋であった。

部屋の遥か向うに椅子があった。

玉座だ。

その玉座に人が座っている。

ガルマインだ。

ガルマインはその膝の上に幼帝モ二八女王を抱いていた。

「ガルマインよ、いまだ幼帝を膝に抱き自分は王気取か。そんな事はもうやめよ。貴様は王の器ではない」

アシユマは言い放った。

「何をしに来た？ 下がれ。ここは、貴様のような下郎が、居てよい所ではないぞ。下がれ！ 下がりおろう！」

ガルマインが応じた。

「何をしに来たかだつて？ そうだな。挨拶代わりだ。一手ご指南願おうか？」

「玉座に座る者が軽々しく下座に降りられるものか」

「ならば、そこが貴様の墓標になる」

「果たして斬れるかな？」

「相も変わらず、モ二八王女を盾にするのか」

「ガルマインよ。あ奴は、いつぞやの賊ではないのかえ？」

「流石はモ二八様。その通りにございます。あ奴は、アシユマ・ア

トー。性質たぢの悪い賊に御座います」

「衛兵！ 衛兵はおらぬか」

「モ二八様。衛兵は居りませぬ。みな、あのアシユマ・アトーにしてやられました。見て下さい。あの返り血を浴びた姿を。アレが真つ当な所業を積み重ねてきた人間の姿でしょうか？ 否。アレこそ悪行の権化、その姿なのです。その為にもモ二八様の慈愛の光を、一刻も早く、ノリトレアの人々に、照らしつくさねばなりません」  
「ならば、ガルマインよあそこに居る賊にこそ、わらわの慈愛の光とやらが必要ではないのかえ？」

「御意」

「これ、アシユマ・アトーよ近う寄れ」

ガルマインは、何を言いだすのかと驚いた。

モ二八がアシユマを、呼んだからである。

アシユマはこのあつけらかんとして、人を信用し、素直な反応を見せる幼帝に、好ましいモノを覚えた。

「女王それは出来ません」

アシユマが言った。

「何故じゃ？」

「玉座の前に行けば頭を垂れねばなりません。そして即座に斬れるようガルマインが刀の柄に手を掛けているからです。私は陶物のように、斬られてしまうでしょう」

「ガルマインよ本当なのか」

「モ二八様。そのような事を誰がするでしょう？ いいえ、誰もしません」

「だが、ガルマインよ。わらわは、あの者の、暗く沈んではいるが透明に澄み切った瞳を見た事がない。あの者、あながち嘘を言っているようには、見えん」

「モ二八様。これだけは言っておきます。ここに来るまでに、民の表情を読み取つてきましたが、誰一人として、幸せな表情をした者は、居りませなんだ。そのことを、よくよくお考え下さい。ご健勝

であられますように。では、これにて御免」

アシュマは踵を返し、今来た道に戻って行った。

「アシュマ……覚えておくぞそなたの事は……」

モ二八王女が呟いた後、

「ガルマイン！ そちには聞きたい事がある」

モ二八は、早速アシュマの言葉の検証につこうとしていた。

（アシュマめ、余計な事を吹き込みおつて。こ奴には、わしの掌で踊る傀儡であつてもらわねばならんだ）

ガルマインはそう思っていた。

アシュマは、アシュマで

（あれでは、暫く、ガルマインを斬る事も出来ぬな。）  
そう思っていた。

アシュマは黒龍号の前に降り立った。

今や、ガルマインの居城と成り下がっていた王宮から、戻ってきたのである。

アシュマが、黒龍号のハッチを開けると、アーチエルが仁王立ちして、腕組みをしていた。

「な、何かなアーチエル？」

アシュマは少し狼狽えた。

「何処へ行ってらしたのですか？」

「あ、朝言つたる？ ちょっとお使いに……」

「お使いってどんな？」

「人にちよつと挨拶に……」

「人にちよつと会いに行つただけで、こんなに服にべつとりと返り血がつくのですか？」

今日のアーチエルは、舌鋒鋭かった。

アシュマは段々追い詰められていく

「こ、これは……ペンキ！ そう、ペンキだ！ 街を歩いていて、

ペンキ屋の三脚にぶつかって……」

「ほう、ペンキ」

「それよりもアーチエル。ずっとそこで待ってたのか？」

「そんなわけありません！ アシユマさまが帰ってらっしゃるのが分かったから、こうしてお待ちしていたのですっ！」

「凄いなアーチエル。アーチエルは、気配も読むようになったのか？」

「分かるのはアシユマさまのだけです！！ そんな事はどうでもいいのです！！ 問題は何処へ、お使いに行ってらしたかです！！」  
アシユマはドジったと思った。

これで話をそらせると思ったからである。

「べ、別に知人の……」

「ガルマイン？」

「そう、ガルマインのとこまで……って、何で知っているんだ？」

「彼が全てを吐いてくれました」

言ってアーチエルは、後を振り向いた。

そこには、エファールの鞭で雁字搦めにされたヨデイの姿があった。

「どうですか？ これでも、まだ、言い逃れする気ですか？」

「はは……完敗だ。はあ」

「良いからお入りになって？ 何でそんな危ない事なさったの……？」

それからのアーチエルは優しかった。

服を洗っている間に風呂に入れとか、風呂から出れば下着は替えておきましたとか、お休みになるんでしたら、ホットミルクはいかがです、など甲斐甲斐しい。

そして、アシユマが寝ようとしたとき、アーチエルが寝巻き姿で現れた。

「ずっと休んでいたのではなかったのか？」

「休んでましたわ」

「じゃあ、何故？」

「今日は、私がアシユマさまを寝かしつけます。そうしようと思っ  
て」

「そうか、暫くアーチエルにも甘えていない。そうさせてもらおう  
か」

「はい」

嬉しそうに返事する、アーチエルが居た。

アシユマがベッドシエルを閉じて、アーチエルが初めて発した言  
葉が、

「どうして、危ない事ばかりなさるのですか？ 私の気持ちを、分  
かってはくださらないのですか？」

要は本人はそれとは気付いていないが、アーチエルがアーチエル  
自身で溜め込んでいたモノを、吐き出す場所が欲しかったのであっ  
た。

少し前までは、アーチエルがちよくちよく来ては、小出しにして  
きたモノを、最近ではキュポアの監視の目もあり、それも出来な  
かった。

まあ、それで来るのなら仕方の無い事だと、アシユマは納得する。  
そのうち興奮して泣いたりもしたが、アシユマにはそれがいじら  
しく、愛しいもののように思えた。

アシユマは延々と聞かされたが、嫌な顔は一つもしなかった。

その間中ずっと（と、言っても二十分ぐらいだが）アーチエルの  
髪を撫でたり、手櫛を入れたりしていた。

「なんか御免なさい。わたくしばかり。今日は私がアシユマさまを  
寝かしつけるはずだったのに。でも、アシユマさまにこうして寄り  
添っているだけで、落ち着きます」

「俺もだ」

「アシユマさま……」

「……すー……」

「……アシユマさま……お休みになられたのですね。ゆっくりお休

みになって下さい。わたくしのアシユマさま。愛しい人」

アーチエルはアシユマの唇に軽く口付けをした。

丁度、その頃アベニが戻ってきた。

どうやら、この国には、殻兵器の類は一切持ち込まれていないらしい。

よって、この国に居る必要性が全く無くなった。

「……アーチエル様出てきませんね」

ヨデイが言った。

「あなた、出歯亀見たいな事しないの！」

エファールが言った。

「半球板なら私も触れるぞ？ アーチエルや、キュポア程ではないかな」

とは、リイナ。

「リイナにお願いしますか。エナジアよりはマシでしょう」

「エナジアと比較するか？ あんな微生物と？ やめた。レーダー

に付く」

「ああっ！ 僕のばかつ！ 御免なさい？ リイナさま！！」

「ほう、『様』と来たかい響きだ」

「あうあうあ。女王様が二人いる！ 僕はどっちの僕しもへなの？」

「くつくつくつ。この困る様を見ているだけでも楽しいな。虫みたいで」

リイナが言った

「うふふ。そうね。これが、私が、彼を愛する理由の一つよ」

エファールも応じた。

「ま、そんな事はどうでも良いわ。リイナ、エンジンお願い。行くわよ、あなた」

「あ、あの。で、僕はどちら様の僕なんでしょうかあ？」

「……で、ヨデイ、今度はどこに行くの？」  
エファールが聞いた。

「とりあえず行く所は全部潰したんですよ」  
「それで？」

「で、報告がたら、オロのところに行こうかと思えます」  
「え？ オロ？ いやあねえ。皆も起きたら、さぞ嫌がることでしょうよ？」

「しょうがないです。皆さんには、たつぷり嫌な思いをしてもらいましょう」

「ええ？ なんか、いやあねえ」

「その間、聖なる学び舎、鷲に襲われる。学び舎の者、祝福されぬ命の者に助けられ大事には至らない』か……」

「え？」

「いえいえ。ルーンの黙示録ですよ」

それを聞いてエファールがリイナに

「そういえばレン又王子はどうしているのかなあ？」  
そう訊いた。

「……げ・元気だ……」

「連絡を取り合っているの？ そう。良かったわねえ」

「……あ、ああ……」

リイナは顔を真っ赤にして俯いてしまった。

(うふ。可愛いわねえ。あら？)

エファールは通信を受けた。

「はい、こちら黒龍号。……あらオロ。お元気そうで何より……」

(オロか……こっちは来ないでくれよ。ろくな事がないからな) などとヨデイは願っていたが……。

「ヨデイ、オロよ」

「そら来た。はい、ヨデイ。何かな？ オロ」

ヨデイのインカムにオロの音声だけが流れてくる

『ヨデイ、そこにクルー全員は居るか?』

「いや、殆どが休んでいる」

『スコラがアヘイビア軍に襲われそうだ。とにかく皆を起こしてくれ。状況を説明したい』

「わかった。オロ。エフアール! 皆を起こしてくれ。緊急事態だ」

「ほら、貴方が予言の話なんかするから……」

「それは後!」

皆が起きて来たのはそれから五分後だった。

アシユマは寝巻き姿のアーチエルと手を繋いでいた。

それを目ざとく見つけたキュポアは、アシユマの空いている側の手に自分の手を繋いだ。

そしてアシユマの手をきゅっと握った。

アシユマもそれに気付き、ぎゅっと握り返してやる。

キュポアは、顔が笑みで一杯になるのを禁じ得なかった。

だが、よく見ると、アシユマ達の顔は、緊張で引き締まっている。にやけている場合ではないのだと、キュポアは思った。

全員が揃った。

オロが全員に聞かせるように話をする。

『諸君、大変な事になった。スコラがアヘイビア軍に襲われそうになっている。直ぐに急行して、これを止めさせて欲しい。これが要点だ。もっと詳しく話そう。事の起こりは今から二十分前、スコラ側に対しアヘイビアを中心とする、大量破壊兵器査察団が、査察の要求をしてきた。勿論こちら側にその意図もないし、その様な兵器を作った事も無い。こちら側としてはその様な大量破壊兵器は無いものとして査察を拒否した。勿論それは不当な査察で受ける謂れが無い。以来緊張が高まっている』

アシユマは果たして本当にそうだろうかと思った。

一度に何百人の命をも奪う事もできる魔法。

その巨体で敵地を蹂躪する事も出来る召喚獣。

それらは大量破壊兵器とは言えないのだろうか?

それらの秘密を独占したい。  
秘匿したい。

それらが多分オロの本音だろう。  
皆はそのことに気付いているのか？

だが、今のアヘイビアの権力行使の勢いからして、スコラ側に人的被害が出ないとも限らない。

特に、緊張が高まっているとされる今のこの状況では、そうなる可能性が非常に高い。

結局はアヘイビア軍と衝突する事になるだろう。

「オロ、何故自分のところの軍を使わない？ こう言うときのための、私設軍ではないのか？」

『アシユマ殿か。確かにそうだが、今、私のところにも査察がやってきて動くに動けんのだ』

「成る程、アヘイビア側はそういう作戦な訳か」

「それにしても、よくこの短期間に査察の許可が下りたなあ」とは、ヨディ。

『事前の根回しが利いていたらしい。要するに殻兵器の奪取による研究・分析が失敗した時の為の二段構えの作戦だった可能性が高い』  
「成る程ね。それで査察軍の構成がアヘイビア中心なのも頷ける」

ヨディは、得心がいったように頷いた。

『で、ヨディ、どのぐらいの時間でスコラに着く事が出来る？』  
オロが訊く。

「うゝゝん、後三〜四時間と言ったところか」

ヨディはそう答えた。

『分かった。四時間までは何とか持たせる。その後は任せる。なるべく早く来てくれ。頼んだぞ』

そう言って通信は切れた。

「さあ、皆さん臨戦態勢です。眠い方もおられましょうがここは緊張ってください」

ヨディが全員の士気の鼓舞をした。

「それにしても今頃スコラ襲撃とは……目的は一体なんでしょうかね？」

ヨデイがアシュマに訊いた。

「おそらく殻兵器の呪文部分……俺は禁呪だと思うが、その部分の奪取と説明が目的だろうな」

「殻兵器の呪文部分、禁呪……アシュマ君は掴んでいるのですか？」

その禁呪を？

「ああ。調べた。多分『あれ』で間違いないだろう」

「その『あれ』と言うのは？」

「こればかりはヨデイにも言う事が出来ん。許せ」

「そうですか、アシュマ君をしてそう言わしめる呪文ですか……」

「何しろ殻兵器に使われる物だからな」

「いいですか？ オルバニアンさん、アルミナさん」

アリシアナが、オルバニアンとアルミナに、整備室で二人に言い聞かせるように、言った。

「今までのイメージスキャナは、脳に掛かる負荷が大きすぎました。しかしこの新型のイメージスキャナなら、脳に掛かる負荷を今まで物より八割がた軽減できます」

「そんなになのかい？」

オルバニアンが言った。

「ええ。これにより、ラヴァーは今までの運用時間の約四倍、二時間強の運用が出来ます」

「じゃあ、あの三十分の制限は一体なんだったんだ？」

「仕方ありません。このラヴァーでさえ試作機で、最新鋭のテクノロジーを、惜しげもなく使っているわけですから、実験機的な要素を排除できません」

「まあ、いいじゃないのオルバニアン。短いより長いほうがいいんだからさ」

アルミナがオルバニアンをなだめた。  
「ま、そりゃ、そうだな」

黒龍号はスコラの上空目前まで来た。

査察軍……実質的なアヘイビア軍はいよいよ持ってスコラに襲い掛からんとしていた。

そこへ黒龍号は先制攻撃を加えようというのだ。

「アシュマ君、オルバニアン、アルミナさん発進してください。スコラの生徒を巻き込まないで下さいよ」

『了解』

『了解ッ！』

『了解よ』

「発進！」

発進して間も無くアシュマは、鬼虎秘剣、真・蚩を使おうと思っていた。

狙いは発進前の魔導機兵の群れ、ざっと見たところ約二千もの大部隊だ。

まだ機体には人は乗っていないようだ。

アシュマは空中で抜刀の体勢を取った。

そして、アシュマは抜刀し、蚩で待機していた魔導機兵約二千を襲った。

光の粒は、幾千幾万もの光の糸となり、魔導機兵を貫いて行った。忽ち起こる大爆発。

魔導機兵に人員が乗る前だったので人的被害は最小で済んだ。

そして間髪入れずに、ヨデイが敵陣へ入電する。

『大量破壊兵器査察団を名乗る、アヘイビア軍に告ぐ！我が名は義賊ダストモンキーなり！貴公らのやろうとしていることは、侵略行為に他ならない！よって義により学び舎スコラに加勢いたす！同時にアヘイビア軍には、宣戦を布告いたすものとする！』

黒龍号は短い距離であったがすべるように降りてきて滑るように止まった。

そして校庭の中央に固定した。

「アーチエル姫！ シールドを！」

ヨデイが叫んだ。

「はい、分かりました」

半球板から手を放し呪文の詠唱に入るアーチエル。

「聖なる女神タテトラム

聖なる盟約に従い、

汝をして我に光の加護を与えたまえ

汝、我を護りたまえ。

シールド！！ バイ・ファイヴ・ハンドレット！！」

シールドの球面が一度きらりと反射して光った。

シールドの魔法の由来はよく分かっていない。

性質も実は良く分からない事が多い。

外敵の物理的攻撃には物理的応力で対抗するし、魔法攻撃には念の力による応力で対抗する。

外側からのものは完全シャットアウトするのに、内側からは放し放題。

シールドを掛けたマスターが「ワーム」と唱えると孔が出切るし、シールドの能力は掛けた本人の能力の違いにもより、強くなったり弱くなったりもする。

これが今のところ分かっている、シールドの性質である。

アーチエルが掛けるシールドは最近頓とみに強くなってきたようだ。

「じゃあ、アーチエル姫、黒龍号の事頼みましたよ」

ヨデイはボディーマーで武装してエファールと共に出て行った。

黒龍号の砲座にはリィナ、キュポア、アン、アベニ。

アーチエルはゴンドラに乗り機体の外へ出た。

建物の壁を乗り越えてミニ・サイコ・フライヤーが乗り込んだ。  
た。

勿論アヘイビア軍の歩兵部隊である。

黒龍号の砲台が火を噴く。

「校舎への被害は最小限に抑えろ！ 間違っ  
て校舎なんか当たるなよー！」

リイナが叫ぶ。

アーチエルは、ここではアーチエル流の博愛主義を捨てた。

でなければ、スコラの同胞の命を救う自信がなかったからである。  
既に黒龍号の周りでは黒龍号を襲うグループと、書庫を捜すグループとで分かれていたが、既に混沌として訳の分からない状態になっていた。

「幾千筋の天駆ける、神の罰たる雷鳴よ

汝の顔に笑みは無し、

未来永劫繰り返される

神の罰をその身に知らん。

サンダーストライク！」

アーチエルは叫んだ。

ガガガガッ

と、雷鳴が鳴り響き、雷いかずちが敵のサイコ・フライヤーに降り注いだ。

敵のサイコ・フライヤーの大半が地に落ちた。

そしてサイコ・フライヤー群は上手い具合に黒龍号に狙いを定め  
てきた。

特にアーチエルに。

「幾千筋の天駆ける、神の罰たる雷鳴よ

汝の顔に笑みは無し、

未来永劫繰り返される

神の罰をその身に知らん。  
サンダーストライク!!」

アーチエルは再びサンダーストライクを撃った。  
アーチエルの主義を捨てたとはいえ、アーチエルはその主義を捨てきれないでいた。

心に強い葛藤を覚えつつアーチエルは深い悲しみの中、魔法を振るっていた。

だが暫くすると敵兵たちの約半数はむくりと起き上がり、黒龍号を諦めて書庫を捜し始めた。

アーチエル側から見れば、黒龍号への襲撃をやめてスコラへの襲撃を開始したように見える。

アーチエルは迷った。

サンダーストライクが効かないとなると、魔法としては何を使っているのか？

ファイヤーボールは、火達磨になってのたうつ姿を見たくないし、サイクロンスラッシャー系統の魔法も人が切り刻まれていく様を見たくはない。

ウォータースラッシャーと同じである。

グラウンドクラッシュ系は校舎を破壊する危険性を孕む。

そうこうアーチエルが迷っている間に、敵はどんどん分散していく。

「アーチエル!」

叫び声が飛んできた。

アシュマだ

アシュマは、鬼虎秘剣、三日月を放っていた。無数の光の刃がアヘイビア軍の兵士の身体を切り裂いてゆく。

アシュマの秘剣・三日月などは斬る相手を選ぶ。

それはアシュマの『気』が由来のものだからだ。

その『気』に親和性があれば斬らないし、逆に敵対性があれば斬

る。

だからアシユマは安心して、秘剣の類を撃てる。

アシユマはアーチエルの側へやって来た。

「後の汚れ仕事は引き継いだ。こ奴らはマシンナリービーイングだ。既に人間ではない。赤い血に惑わされるな」

「しかしそれでは……」

「いいから任せろ」

「はい。アシユマさま。相済みませぬ」

「後は任せろ。中で休め」

「はい」

ゴンドラはアーチエルを中に隠した。

アシユマは向こう側に、戦っているヨディとエファールの姿を認めた。

ヨディとエファールは健在だった。

懸命に二人は棒と鞭で戦っている。

ヨディの棒術もそうだが、エファールの鞭使いも中々のモノである。

アシユマはその中へと斬って入った。

「助勢がいるか？」

アシユマは二人に訊いていた。

「大丈夫よ」

「もう直ぐ彼らも来ますしね」

「彼ら？」

『お待たせーッ 外の残敵掃討に手間取っちゃってさあ！』

アルミナのラヴァーだ

『おおっし！！ やってやるぜっ！！ 敵は何処だ！！』

今度はオルバニアンのラヴァーだ。

「成る程」

アシユマが妙に感心した。

「アシユマ君は書庫に行つて下さい。生徒の護りは我々が引き受け

ます」

「分かった！ 頼む！」

アシユマは書庫へと走った。

途中横合いから出てきた敵は、構わず斬って捨てた。

しかしマシンナリービーイングと言うものは、全く生氣を持たないものだなと思った。

そう、まさに生命の息吹と言うものを、まるで感じさせないのである。

言うならば、戦闘用に生態部品を流用された機械そのもの……と、言うような感じがしてならない。

生き物ではない。

少なくともこの時点では。

アシユマは書庫へ来た。

出入り口は一つしかない。

人が出た気配は無い。

つまりは敵は書庫の中を漁っているという事だ。

が、怪我の功名か、アシユマが持って行った書物の中に、どうやらお目当ての書物があるらしい。

「お前ら捜しても無駄だぞ。俺が予め見つけて焼いたからな」

アシユマは嘘を言った。

これ以上書庫を荒らされたくはなかったし、かといって本のありかを示すなどと言う危険な行為も避けたかったからである。

アシユマは鬼虎を抜いた。

宣戦布告の合図である。

マシンナリービーイングたちもナイフを抜いた。

近接格闘戦用の武器があるということは念導境界面つまりは念の力場を持っていると見て間違いないだろう。

脳核がその発生装置の中核を担っていることは間違いない。

人格を決める部分まで部品にすると、許しがたい所業である。最早、彼等を救う手立てはただ一つ、『死』あるのみだ。

これほど悲しい戦いも他には無い。

マシンナリービーイングの戦闘員たちが、階段を駆け上りこちらに向かつて殺到してくる。

アシュマは最初の敵を拝みうちに、頭蓋を斬り割った。

そして次を袈裟に斬り、逆袈裟に斬り、腹を撫で斬り、腕ごと横に撫で斬り、ナイフと腕ごと再び頭蓋を割った。

もう、無茶苦茶だった。

腕を飛ばす。

首を飛ばす。

膝下から脚を斬り飛ばす。

胴を二つに切り分ける。

アシュマは怒っていた。

これほどの貴重な蔵書を誇るこの部屋で、土足に塗れ、血に塗れ、大切な本たちが穢されて行く。

奴等の存在によって。

階段は既に血で塗れ足元がすくわれかねない。

アシュマは呪文ウィングを唱えた。

アシュマが一羽ばたきすると、階段の段に溜まった血がぶわっと舞い上がる。

それが蔵書に対し雨のように降り注ぐ。

もう怒りは収まらなかった。

斬った。

斬って斬って切りまくった。

原形を留めない位に。

結果、書庫は血の海となった。

アシュマは書庫から出てきた。

「アシュマ君、ゴクローサン。随分と真っ赤だけど気分はどうかね」  
ヨデイが訪ねた。

「最低で最悪だ。死にたいくらいだよ。奴等貴重な本ほど持ち出さうとしゃがって！ しかもそれを盾代わりにしゃがる。思わず俺はそいつを本ごと斬り捨てちまったよ。しかもそいつは死ぬ時に、思い切りページをばら撒きやがった。『聖なる魔法とその起源』だぞ。世界に二冊と無いかもしれないんだぞ？ それをあいつ等……」

アシユマが応える。

「アシユマさま、元気出して？ 大切なのは人の命でしょ？ ここから秘密が漏れなかった事が、どれだけ殻兵器の流出を抑えたことになるか、そしてそれがどれだけ人類の為に貢献した事になるか、はかり知る事が出来ないわ」

アーチエルがアシユマを元気付ける。

「その通りねアーチエルさん。そしてアシユマ・アトー先生」

その声音は厳しかったが、優しく二人を包む優しさも溢れていた。

「校長先生！！」

「校長……」

その声の持ち主はミス・ケリー・サトウ。

このスコラの校長だ

「どうしたの？ 『血塗れアシユマ』なんでしょう？ 巷では。このくらいでへこたれていちや駄目でしょう？」

「『俺』は血まみれでも構わない。でも血塗れであってはならないのがこの世に二つ、一つは『アーチエル』、そしてもう一つがこのスコラの『蔵書』だ」

「まあ、アシユマさまツたら……でも、私も一緒に血に塗れとう御座います」

「え？」

アシユマが軽く驚く。

「アシユマさまが戦わなくてはならないのなら、わたくしも戦います。アシユマさまが血を浴びるのなら、わたくしも浴びます。アシユマさまが血を流されるのなら、わたくしも血を流します。以前に言いました。だから……」

「分かった。なるべくアーチエルを特別扱いするのはやめよう。でも攻撃は無理せずに、気分が悪くなったらやめること」

「はい」

「分の悪い敵が来たら俺に頼る事」

「はい」

「後は……」

「万<sup>マン</sup>アシユマさまに従いまする」

「貴方たちもいい夫婦になりそうね」

と、ミス・ケリー・サトウ。

「まあ」

照れるアーチエル

「さ、さあ。つ、次の敵は来るのか？」

アシユマも照れた。

「僕は蚊帳の外ですか。さーみしーなー……」

「まあ、ヨデイ先生。大丈夫よ。貴方方二人も大丈夫だから」

ミス・ケリーはフオーした。

「アーちゃん……」

「！」

「アーちゃん！」

「ミカさん!!」

廊下で二人の親友はひしと抱き合った。

「……………ひぐっ、えぐっ、ぐすっ……………」

ミカは泣き出した。

「どうしたのミカさん……………何か起こったの……………!？」

「うっん、そうじゃないの……………でも学校がこう言う状態でしょ？」

……………不安で、心細くって……………そうしたら、アーちゃんやアシユマ先生、来てくれたでしょ？ とっても心強かった。有難う、アーちゃん」

ミカは余程心細かったのか一気にまくし立てた。

「誰か犠牲になった方は居る？」

「私の知り合いにはいないけど十何人か……」

「そう……ジーク君は？」

「あ、大丈夫……その、私を護ってくれた……」

ミカは臆面も無くそう言っただけだ。

「そう、よかった」

二人の間柄が堅固なのを見て取ってそれを嬉しく思った。

「こちらが今の籠城場所になっています」

廊下を伝ってミス・ケリー・サトウ校長と、ヨディ、アシユマ達がやって来た。

すると、廊下の少し先から、

「リイナ〜！」

と、呼ぶ声がある。

懐かしいその声の持ち主はミカだった。

「リイナ〜！」

「ミカさん！」

「リイナ、逢いたかったわ！」

「私もよ。逢えて嬉しい！」

（なんかさあ、また人格変わってない？ リイナ？）

アルミナがオルバニアンに声を潜めて言った。

「いいんでないの？ 上手くやっってるみたいだし」

オルバニアンが言った。

（私が言いたいのはそうじゃなくて、地が出たときに皆が驚きやしないかって事。そうならあの子の立場が無いでしょう？）

「うん、まあ、そうだが……そんな時やそんな時。何とかなるんじゃないかね？」

オルバニアンはいたって能天気だ。

「もう！」

「そういえばリイナ明るくなったわねえ？」

ミカが言う。

「そうかなあ？」

「お、可愛いリイナではないか？」

言って話に入ってきたのはキュポアだった。

「リイナ、こちらの方は？」

ミカが訊いた。

「あ、それは、私の妹なの……」

アーチエルが照れながら答えた。

「キュポア・アップルトンと申す。姉ともども、よしなに頼む」

「いえ、キュポア王女、こちらのほうこそ宜しくお引き立ての程、

お願い奉ります」

ミカが慌てて畏まった。

「うむ、苦しゅうない」

「貴女様が、キュポア様でいらつしやいますわね。私、サクラコ・

セタと申します。以後よしなに」

「うむ、大儀。確かそなたは、イーハンの家老の娘と姉様から聞い

たが？」

「はい、その通りにございます」

「堅固にな」

「有難う存じます」

「キュポア様、私エミル・フォルテ。宜しくね」

「おお、エミルと申すか。こちらこそ宜しくなのじゃあ」

「ねえ、アーチエルちゃん？ 妹さんのほうがよっぽど王女らしく

なくって？」

サクラコがアーチエルに耳打ちをした。

「え？ ま、まあ……」

アーチエルは言葉を濁した。

「それにしても、一時的にしろ帰ってきてくれて安心したわ。アシユマ先生も居る、ヨディ先生や、エフアール先生も居る。いざとなった時に駆けつけてくれる。この心理効果は絶大だわ」

サクラコはその効果を絶賛した。

「はいはいはい！ 皆さんそこまでにして頂戴。先生方を案内できません。さ、先生方」

ミス・ケリー・サトウ校長が、連れてきた場所は、アシユマ達が、このの教員になるのに使った部屋だった。

アシユマ達が入るや否や忽ちに大歓声が沸き起こった。

これにはアシユマ達もたまげた。

生徒達が、割れんばかりの歓声と拍手を送ってくるのだ。

ヨデイは大いに喜んだが、アシユマは照れた。

他の皆もそうで、しかもあのヨデイのはしゃぎようからほぼ全員が、顔を真っ赤にしてうつ向いていた。

アシユマはそんな中ぐるりと改めて周りを見てみた。

成る程ここなら頑丈そうだとアシユマは思った。

ケリーは話を続けた。

「ここはいざと言うときの為に千六百人が籠城して一ヶ月耐えられるように設計してあります。あの向うには居住施設もあり、食料も備蓄しています」

校長はそう言った。

「残念ながら死者も出ているのです」

ミス・ケリーは続けた。

「それでも、スコラを代表して謝意を表したく思います。どうも有り難う」

言ってケリーがヨデイに手を差し伸べた。

ヨデイがケリーの手を握って大きく握手をした。

そんなときだった。

彼らが慌しく飛び込んできたのは。

「先生大変です！！」

エス・タタラオが飛び込んできた。

このエス・タタラオ、エヌ・フンデーネと共に何故か故有ってノリトレアからやって来た高級官僚である。

「また、襲撃ですかッ!？」

驚く、ケリー、走る緊張、戦く生徒達。

「禁呪関連の本が見当たりません!！」

言ったのは、エヌ・フンデーネだ。

「なんですつて!？」

「『黒魔術の歴史』、『高位魔術の秘術』、『暗黒魔法入門』、『禁呪とは』、『時間と空間魔術と意思』……」

その内容を聞いていているうちに、アシユマはそろりとその場を抜けようとしていた。

「アシユマさま、朧霞も使わないでよくまあ、逃げようとしてしましたわね？」

すぐさまアーチエルに見付かってしまったが。

「逃げようとなんて……」

「持っているんですね？」 『全部』 「

……」

「持っているんですね!？」

「はい……」

「先生、実は……」

「アーチエルちよつと待て!！」

「？」

「今言った本は全て予めあるところに隠してあります。ですが、これらは焚書ふんじょした事にしませんか？」

アシユマがケリーに言う。

「焚書……本を焼く……」

ミス・ケリー・サトウが驚く。

「だけでなく、基本理念がこのスコラにおいて適当でないとの理由で。そうすれば禁呪関係でスコラが襲われることはもう無いでしょう」

「ですが……」

「そうだ。そうなさい。そのほうが安全ですよ」

そう言ったのはヨデイだった。

「無駄な戦いをせずに済みます。戦死者の方々も無駄に命を散らさずに済みます」

「そうかしら。そうでしょうか……。いくら禁呪の本だからと言って、焼いてしまってもいいのでしょうか？」

ミス・ケリー・サトウ女史は迷った。

「実際焼くわけでなし、方便ですよ方便。本と生徒の命は天秤に掛けられません」

「……………そうですね。実際焼くわけで無し。で、その本はどちらに？」

その時アシユマは、本当に逃げようと思った。

アーチェルに手を握られてしまった。

スコラは、内外に禁呪に関する書籍、資料の全てを焚書に処したと発表した。

アヘイビアなど各国のトップは、スコラを追い詰めすぎた為だ、として（同じアヘイビア国内でも）アヘイビアの軍部に非難が集中した。

だが、七賢人側では何故かノーコメントだった。

と、言っても、七賢人のコメントが表の世界に上るわけではないが。

「どうやら上手く行ったみたいじゃないですか？」

ヨデイは理事室でミス・ケリーに言っていた。

「その様ですね。取り合えず、スコラに攻撃が無くなったのは良い事でした」

これまでは散発的にちょっとした戦闘が続いていた。

生徒に死者は出なかったものの、怪我人は日に数人と出ていたの

である。

それも無くなったのだ。

「理事長代理の読みも奥が深い」

ミス・ケリーはヨデイを理事長代理と呼んだ。

そう、ヨデイは、スコラの理事長代理なのであった。

「理事長代理はいつまでいらっしやるので？」

「そうですねえ、何もごたごたが無ければ暫くは……」

「理事長代理！ テレビを……テレビを見てください！」

バンと、ドアを開けて飛び込んだのは、エス・タタラオとエヌ・フンデーネの二人だった。

かなり慌てているようだった。

「何ですか、騒々しい。折角のお茶が……おとととと……」

「何呑気な事やってるんですか王子！」

「王子？」

ミス・ケリーが怪訝な顔をする。

「あ、いや、テ、テレビ見ましょうテレビ」

ヨデイがテレビのリモコンで電源をONにしてテレビを見る。

『本日午前六時、事業家で有名なオロ・エバス氏が、氏の持つ私有地を以つて、アヘイビア連邦共和国からの独立を宣言。同時にアヘイビアに対して宣戦を布告いたしました。繰り返します……』

「こっ！ こりゃあ、一大事だ！！ ミス・ケリー・サトウ！！

あそこの頑丈な一画にシールドを張ってください。それと……」

「でしたら建物全体に張るのがよいでしょう。校舎の形が、増幅装置の役割を果たしますので」

「ではなんでこの間、シールドをかけなかったの？」

ヨデイが素朴な疑問をミス・ケリーにした。

「あの時は混乱もありましたし、掛ける間も無く理事長代理が駆けつけてくれたもので……」

「そうですね……まあ、護りは万全にしてください。多分ここには襲ってこないでしょうが」

「何故そう言えるのですか？」

「ルーンの黙示録に書いてあるんですよ。では何かありましたら僕の所に連絡を。何か他には？」

「御座いません」

ミス・ケリーが言った。

「宜しいので？」

ヨデイが言った。

「宜しい、行ってきなさい！」

「分かりました！」

ヨデイは颯爽と部屋を出て行った。

## 第六節 オロ・エバス対イーチャイルド

詳しい経緯はこうだった。

オロ側として、アヘイビアを中心とした、大量破壊兵器査察団の査察を拒否。

激しい睨み合いが続いていた。

散発的な小競り合いの後一気に緊張が高まり、今度接触すれば即暴発する事態にまでなった。

その上、アヘイビアによる資産凍結が目論見られたがそれは世界経済に対する影響が計り知れないという事でそれは見送られたが、オロはこれに不信感を募らせ更に緊張感が高まる。

そして思い悩んだ末、独立を宣言。

同時にアヘイビアに宣戦を布告……。

いまだ睨み合いが続く中、双方とも艦隊を中心に部隊を編成。

一触即発の状態が続いた。

そこへヨデイが帰ってきたのである。

相当優秀な魔導師を配しているのであらう、かなり強固で巨大なシールドが張られていた。

そのシールドに虫食い穴<sup>ワーム</sup>が出来た。

黒龍号はその虫食い穴を通してオロの邸宅の前に下りた。

正面入り口から堂々と入る。

「オロ！ オロは何処だ？」

ヨデイが大声でオロを捜す。

すると、オロ自ら出迎える。

「おお、ヨデイー！！ 待ちかねたぞー！」

「待ちかねたぞ、じゃ無いぞ！ オロ！ 何しているんだ？」

「何しているって見れば分かるだろう？ 戦の準備だ。戦評定には

君にも出てもらうぞ？ ヨデイ。あと、アシユマ殿も頼む」

「……………」

「そうムスツとしなざるな、アシュマ殿」

「アシュマ君でなくとも、ムスツとしたくもなるさ」

「いうな、ヨデイ。どうしようもなかったのだ」

「その、どうしようもない、と、いうのが一番怪しい。本当に、どうにも避けられなかったのか？」

「私の全資産が、何の謂われもなく、差し押さえられそうになったんだぞ？ これを黙ってみていられるか！？」

「結局は金か」

「はあ、とヨデイは溜息をついた。

「ヨデイ、お前は、金に対して嫌悪感を抱いているようだ、金は人間の生活……営みに必要不可欠なことだぞ？ 給料もお金、社会保障費もお金、福利厚生もお金、インフラ整備にだって金が掛かる。オロエバス財団で働く社員等の人たちに払うべき給金の一部は、この資産の内から捻出される事もある。その社員の事を考えてみる。資産を護る為にアヘイビアに対して、宣戦を布告するしかなかった事も、分かるだろう？」

「だが、戦闘員の士気は低いのと違うかな？ オロ」

「そうなのだ。どうしても同族同士で戦う事に、抵抗のある者が多い。多民族国家なのにな。ははは」

「ははは、じゃないだろうよ。で、戦評定はいつ？」

「もう、直ぐにでも始められるが？ ところでアリアは？」

「レキシタニアにいます」

「そうか。そのほうがいいだろう。では、戦評定を始めよう」

「わかった。いこう、アシュマ君！」

「ああ……」

階段を上りきった廊下で、アーチエルが不安げに立っていた。

「アヘイビアと戦う事になるのですか？」

そのアーチエルがアシュマに話しかけて来た。

「ああ、多分な」

「同じ国同士の人が、こんな風にして戦うなんて、納得行きません」

「俺も納得していない。なるべく戦いを回避できるよう、頑張ってみるつもりだ」

「お願いします。アシユマさま」

……が、開戦派と非開戦派の意見は平行線を辿る。

だが戦評定では開戦派が多数を占めたので、開戦は避けられないものとなった。

ヨデイには、オロが寧ろそつなるように工作している節があると感じていた。

「『この間一人の黒き野心家一人大地に立つ。私はこの人を見る。

甚だ傲岸不遜な人である』……か」

「ヨデイ、何か言ったかね？」

オロはヨデイに訊いていた。

「いや、何でもない」

「では、次に黒龍号の扱いについてだが……」

オロは言い始めた。

「黒龍まで接收するのか！」

ヨデイが叫んだ！

「あれは、私の船だ。どう使おうと問題あるまい？」

「オロよ。そこまでされては、俺はこの戦自体から下ろさせてもらう」

アシユマが言った。

アシユマのことを知らないどこかのお偉いさんは、

「若造一人が、何を言っているのかと思えば、戦から抜ける？ 抜

けたければ勝手に抜けるがよい！ 全く最近の若者といったら堪え

性知らずで……」

等と言ったものだから、アシユマは本当に席を立って出て行ってしまった。

「バツ、馬鹿！！ 煽ってどうする！ ヨデイ、すまんがアシユマ

殿を……」

「嫌ですね、黒龍まで接收となれば僕も、もうこの軍にいても

意味ないですから、やめます」

「おう、辞める辞める！ 若造どもめらが！」

「准将！ 君は三階級降格！！ 一時、評定の場を休場とする」

オロはアシユマ達を走って追いかけた。

一方降格を言い渡された元准将は、あの二人が、アシユマ・アトーとヨデイ・ヨフルということを知らなかったし、周りに訊いて知ろうともしなかった。

ただの若造と言う認識しか持つておらず、そんな者はこの場には不似合いと思っっていたからだ。

それがこの二人がアシユマ・アトーとヨデイ・ヨフルと言う超VIPであると思えというほうが無理だった。

特にアシユマアトーはこの戦局を左右するほどの超兵器鬼虎の持ち主で、稀代の剣客であるなどと、顔を知らないこの初老の男に分かるべくも無い。

「アシユマ殿！ ヨデイ！ 待つてくれ」

そう言って回り込んだオロは土下座をした。

「オロ、いくら土下座をしても俺達は非開戦派だ。その主義主張は変えられんぞ」

アシユマが言った。

「こちらの開戦派、非開戦派の話し合いの結果等、どうでもよいのだ。問題なのはこちらがどう転ぼうとも、平和の使者を遣わそうとも、もう既に相手の意思は決まっております、開戦と成るのは避けられないだろう」

オロが振り絞るように声を出した。

「そのことを何故さっきの評定で言わなかった！？」

ヨデイがオロを責めた。

「そうすれば、如何にもこちらの劣勢と言う観を否めず、こちらの士気に影響が出るのは必至だ。そうなってからでは遅い。そうなっ

た軍は脆い。頼むツ！ 力を……力を貸してくれえっ！！」

「アシユマさま、力を貸してあげてくださりませ」

「ん？」

そこにいたのは、アーチエルだった。

いや、先ほどアーチエルと分かれて来た階段上の廊下がそこだった。

アーチエルは飽きもせず、ずっとそこでアシユマの、『開戦せず』

の、一報を待っていたのだろう。

そのアーチエルが

『力を貸してあげてくださりませ』

そう言っただけだ。

「いいのか？ アーチエル」

アシユマが言った。

「殿方には、殿方の避け得ない、戦いがあるのだと悟りました。でも、女子おなこにも、女子の戦いがあることを、ご理解下さい」

「それが、待つと言うことか？」

「はい」

「黒龍号で待てばよいモノを」

「場所は関係ありません」

「そうか」

「……はい」

アーチエルは恥かしそうに頬を少し赤らめ、少し俯き加減に顔を伏せた。

「女子だな」

アシユマは違う意味にその言葉を使った。

「はい」

アーチエルはそれを勝手によい意味でとった。

アシユマは、アーチエルは今の言葉をそう取るだろうとは思ったが、そのままにさせておいた。

アーチエルは話題を変えるように、

「オ口様、面をお上げ下さい。これから一国の元首となられる方が、その様ななりでは困りますよ。下々の規範となるようであってはいけません。運用は任せる」

「う、うむ。そうであるな。……それからヨデイ、黒龍号の接收はせん。運用は任せる」

「そうではなくてはな。オロ！」

ヨデイが言う。

「では、評決をとりに行かなければならぬ」

で、評決は全会一致で、

「アヘイビア討つべし」

と、なった。

そして、

「敵に先手を討たれる前に敵を討つべし」

そう言う評決が採択された。

「『女子』だな」

その時アシユマは、呟いた。

「ん？ 何かいいましたか？ アシユマ君」

ヨデイが訊く。

「いや、先に行つててくれ。直ぐに追いつく」

「はあ……直ぐにですよ？」

アシユマが『女子だな』と呟いたのは、女子は情に流されやすいものだなと思つたからで、アーチエルの心の動きを指していた。

そしてそれに心動かされるのは、男の業だと思つた。

全ての評定は終わった。

アシユマは評定の中から出てきた。

アーチエルはあの階段にいるであろう。

あの階段脇の廊下に来ると、アーチエルはいた。

ここはカーテンで少し物陰になっていて、周りからは少し見えにくい。

実は、その階段を降りれば、黒龍号の直ぐまん前に入る事が出来る。

アーチエルはアシユマを認めると、少し小走りにやって来た。アシユマとアーチエルはお互いを抱き締め合った。アーチエルにはこれで十分だった。

そんなところも可愛いと、アシユマは思ってしまう。つつい、アーチエルに甘くなるわけだ。

自分でそう思ってしまった。

「アシユマ君。そんなところでニヤついてないで、早く行きますよ。発進ですからね」

ヨデイが言う。

そして先に行ってしまった。

アシユマはそんなヨデイを無粋だと思った。

アーチエルに続いてアシユマが黒龍号に乗った。

「アシユマ君遅刻ですよ」

ヨデイが時計を指差した。

確かに作戦時間が始まっている。

「すまん」

アシユマはインカムをとってゴンドラに乗った。

「事前の打ち合わせ通り艦隊のまん前まで行きますからね」

「なあ、姉様、怪獣とえっちい事してたじゃろ？」

キュポアが言う。

「してません」

アーチエルが否定する。

「してたじゃろっ？」

「してません！」

ゴンドラに乗ってもついつい姉妹喧嘩(?)に目が向いてしまう。

「アシユマ君、ボーっとしてないで発進しますよ？」

「あ、ああ。済まないやってくれ！」

アシユマは自分の油断を悔いた。

黒龍号は旗艦『アロアオゲル』の脇をすり抜け、草原の丘を超えた。

そこには、夕日と艦隊を反射した湖があったが、それもモノの数分で通り過ぎてしまった。

今とはとにかく艦隊の最前線まで突出する事が任務だった。

しかし、速い速い。

流石は世界一と自称して憚らないほどのスピードを誇る黒龍号だった。

あつという間に艦隊の最前列に着いた。

丁度全艦通じで、発進中だったのだ。

それを全艦発進中に艦艇を抜いて行つたのだ。

『アシユマ君！ 念導境界面の展開をお願いします！』

「了解！」

アシユマは鯉口を切り念導境界面を発生させ総全長二十キロメートル、直径二、五キロメートルのおよそ五十隻の艦隊をすっぽりと包んだ。

「『驚、これを認めず爪と嘴でこれを喰らわんと欲するだろう。此処に祝福されぬ命の者、壁になり、盾となり、矢となる』……だな」

ヨディはそう呟いた。

「ヨディ、またルーンの黙示録？」

エファールが訊いた。

「ええ、そうです」

「ふう〜ん最近そればかりね」

ヨディは、すでにルーンの黙示録を諳んじられるまでになっていた。

同時刻、近くに停泊していた、アヘイビアの艦隊も発進していた。こちらは錐の陣形だ。

一気に突き崩す戦法で出るつもりらしい。

アロアオゲルにいるオロが叫んだ。

「方形の陣を敷け！」

ゆつくりと艦隊運動がなされていく。

普通、こんな悠長な事をしていたら狙い撃ちにあっただろう。事実そうだった。

敵の司令が、

「各個撃破で行くぞ。攻撃開始！！」

アヘイビア艦隊から放たれるプラズマキャノンの閃光。

が、受けた攻撃はその場で光に変換され、電光となりある一点に集中した。

その一点とは勿論アシユマの鬼虎である。

正にアシユマは『此処に祝福されぬ命の者、壁になり、盾となり』である。

オロ・エバス軍は方形の陣を敷き終えた。

しかも、敵を覆い被せるかのようにである。

「よし、全艦攻撃開始！！」

オロが叫ぶ！！

戦艦群はプラズマキャノン攻撃を始める。

アシユマは控えめに攻撃をする。

これだけ目立っているのだ。

後で組織内で、槍玉に挙げられないためである。

それでもアシユマの攻撃は強力で、一際目を引いてしまう。

ここに『矢となる』で、予言は成就した。

僚艦もプラズマキャノンで攻撃を続ける。

敵艦にも念導境界面と言うものはある。

ある程度の攻撃にも耐えられる。

しかし限界と言うものはやってくる。

一艦落ち、二艦落ち、次々僚艦が落ちていき今や彼我勢力は一對二になっていた。

敵は必死になって抵抗を試みるが、それは所謂『無駄な抵抗』。

敵の攻撃は全て鬼虎によって吸収されてしまうのだから。

オロはここで敵軍司令に降伏勧告をした。

彼我勢力は一对三。

最早敵は、全滅と言っている状態である。

敵司令は、進退これに窮まれりという心境で、投降の申し入れに素直に従った。

その場で、武装解除が行われ、艦内をくまなくチェックされ、ドッグまで曳航されたのが二日目の朝。

そして、ドッグで、更なる検査などをする予定だ。

これで、新生アヘイビア艦隊も全滅の憂き目を見た。

オロの大勝利である。

オロは大統領官邸、国防総省などに艦をやり、オロからのメッセージを伝えた。

アヘイビアには今のところオロの国家に非干渉でいる事。

国元連総会を開き新国家として独立を認める事。

後は追って沙汰をする事。

以上だった。

一方、議会は紛糾し、大統領は槍玉に挙げられる毎日の連続だった。

どうしてくれるんだ！

大統領の判断ミスではなかったのか？

下手にオロ財閥を、刺激しないほうがよかつたのではないのか？

折角の新艦隊がむざむざと……。

などなど。

いくら能天気なサバンナ大統領でも頭を抱えざるを得なかつた。

ここへ来て進退窮まつたという時にその通知は来た。

イーチャイルド家からの通知だった。

大国家アヘイビアたる者が、ましてやその大統領である貴方が、

ここまで新興の財閥、所謂成り上がりたるオロ・エバス等に、ここまで愚弄されて良いものなのか？

否。

このままでは国家の威信に関わる。  
沽券に関わる。

ここは私もが一肌脱ぎましよう、端的に言えばそう言ってきた。

すぐさまアヘイビアの国家防衛対策委員会にイーチャイルド家の代表として、ネリア・クーシ・カハデクサン……イーン・イーチャイルドの車椅子押し青年が、参考人として、招致・召喚された。その場でイーチャイルド家はその施設に構えている軍備をアヘイビア人民の為に使うこともやぶさかでないとし、その場でイーチャイルド家の艦隊を貸し与える事を承諾した。

これでサバンナ政権の延命も図れるし、これに勝利すれば政権の人氣も高まるとしてサバンナは小躍りして喜んだ。

単純な男である。

ヨデイはもしネリア・クーシ・カハデクサンを目の前にすればこう呟いただろう。

『その後、もう一人の黒き野心家、鷲の為に敵を打ち倒す剣になる。私はこの人も見る。神の人に近い間柄である』  
と。

このとき、タイン教の総本山、レジルデ市国の法皇、イイヒラシバ十六世が動こうとしていた。

オロ・エバスの武装解除への勧告の為。

同じ国家内で内戦のような状態が続く事を憂い止める為……と言  
うのが表面上の理由らしい。

オロは、

「何もこのタイミングで……」  
と、思った。

これでは武装解除を、暗に迫っているような物ではないか。

ヨデイはレジルデの裏に七賢人の影あり……と言つ事を躊躇<sup>ためら</sup>つた。武装を解除して公平な裁きが行われるかどうか、甚だ疑問だったからである。

だからヨデイはオロには、  
「武装は軽々しく解除しないほうが良い。この場合」  
とは、一応言った。

法皇到着後のスケジュールがオロ側に提出された。

午後二時、専用機で到着。

午後二時十五分、リムジンにて移動

午後三時半、第一次会談

午後六時、夕食

……。

こうまで決まってしまう状況では、もう、まな板の上の鯉。状況を  
見守るしかなかった。

「こうまで先手を打たれると、私は、法皇の前で、武装解除をしなくてはならなくなるな」

その日、法皇イイヒラシバ十六世が、専用機でオロ・エバス空港へやって来た。

専用機は無事着陸。

法皇はタラップを降りる前に一度祝福の印を切る。

そしてリムジンへ。

リムジンに乗って、すぐさまサンルーフから身を乗りだして、周りに居る皆に祝福をして回った。

「危ないな」

アシユマが呟いた。

そこはオロの執務室だった。

主だったメンバーは、全て集まっていた。

「『危ない』とは？ アシユマ殿」

オロが訊く。

「狙撃される可能性が高いつて事だ」

「ばかな！ 事前のチェックは入念に……」

その時であった。

法皇の頭が撃ち抜かれたのは。

全員が一瞬で凍りついた。

これは全世界で中継放送をしている。

「畏だ！」

アシユマが叫んだ。

「直ぐにでも武装解除を！！」

オロがパニックになって叫んだ。

「それをしちやいけない」

ヨデイが止めた。

そして

「『聖廟もこれに立つが、頭を射抜かれ大事に至る。嗚呼、なんと私はそれを見た』……くそっ！ これを知らながら僕とした事が……」

と、悔いた。

（これではまるで、ルーンの黙示録の通りに、世界が回っているよ  
うだ……）

ヨデイはここまで来ると、却ってルーンの黙示録の恐ろしさが身に沁しみみた。

「これで、又、私は、顔かたちを変えねばなりません」

顔は真っ白く能面のようで髪の毛がない、人形のような頭の男が、ネリア・クーシ・カハデクサンと話をしていた。

どうやらこちらが本物の法皇、イイヒラシバ十六世で、撃たれた  
ほうが影武者であるらしい。

「順当に行けばイシディア八世かネクロマンシア三世でしょうなあ」  
その時、事件現場では、大変な事になっていた。

荒れる現場、けたたましいサイレンの音、現場封鎖をする警官達

……。  
そこはさながら戦場の様でもあった。

早速イーチャイルド陣営は世論誘導に動く。

「折角このアヘイビアに、平和をもたらす為に来てくださった、神からの使者である法皇様に対して、死を以って出迎えるとはなんと言う大罪！　いつかオロ・エバスに天罰下らん」

イーチャイルドがスポンサーのメディアには全てこれが流れた。

「聖廟の信徒激しく怒り、世界を震撼させる」

ヨデイなら、ルーンの黙示録から、この一節を持ってきただろう。そしてイーチャイルド軍が動き出した。

オロに弁解の隙を与えないつもりだろう。

オロ軍は全世界中、非難轟々の中発進して行った。

今や全世界は（レキシタニアなど一部を除いて）イーチャイルドの味方だった。

イーチャイルド艦隊はオロ邸へと針路を定めた。

一方のオロ艦隊も発進して行った。

今回は初めから直立方陣のオロ艦隊。

対するイーチャイルド艦隊は横に並んだ鶴翼の陣相も変わらずの陣形だ。

数はおよそ六十五。

前回鹵獲した艦艇も含まれている。

一方イーチャイルド艦隊の数はおよそ五十。

何かを待っているようだ……

「何？　アーヌの『ヌル』が来れないだど？」

イーチャイルド艦隊の司令は言った。

「『調整』がまだなんだそうさ。何しろまだ発掘したばかりだからな」

ネリア・クーシ・カハデクサンが言った。

「持ち主と同じで調整が必要なようだ。面倒な」

「それも致し方御座いますまい。まあ、アー又は来られるようですが」

（なんなのだ、あの若造は。大体艦隊司令のわしを差し置いてそれよりもVIP待遇とはどういう事だ？ 一体あの若造は何者なんだ？）

艦隊司令はいらつきながら、声を潜めて側近の物に噛み付いていた。

「司令！ アー又殿到着の由に御座います」

「なに？ で今何処に居る！？」

「我が艦の舳先に降り立っています！」

「ならば、最前線の艦の前へ行けと伝えよ」

「伝えました。ですがこの艦に……」

「ならば、この艦を最前線にもって行けばよいではないか？」

ネリア・クーシ・カハデクサンが言った。

「全くあの若造はなんなのだ！」

艦隊司令は頭の血管が切れそうになった。

イーチャイルド財閥艦隊旗艦イオウデイスは、アー又とネリア・クーシ・カハデクサンを乗せたまま艦隊から突出して、そこに陣取った。

これを見たオロ艦隊の総司令オロは、これを勝機と見たのか全艦に攻撃開始を命令。

敵旗艦イオウデイスに攻撃を集中するように伝えた。

これが呼び水となって、双方激しい砲撃戦となったが、双方の艦隊とも被弾した艦は一隻もなかった。

これを見てアシュマはおかしいと感じた。

こちら側の艦隊が被弾しないのは自分が護っているからいいとして、敵側に被害が及ばないのはどうしたことか？

アシュマは、ゴンドラの上からヨディを通じて、攻撃をいったん中止して貰う様に頼んでみる事にした。

「ヨデイ、ちとおかしい。オロに攻撃をいったん中止してもらえないか？」

『僕もおかしいと思っていたところだ。オロに言ってみよう』

「頼む。しかし正直言っただけだ」

『何が？』

「自分以外にこうした事が出来る者が居るなんて……」

『『者』？ 『物』ではなくて？』

「いや、人のなせる業だろう。派手だが見た目以上にデリケートなんだよ、敵の攻撃を受けるってのは。打ち太刀と受け太刀の受け太刀ぐらいに神経を使うね」

『でも、相手がアシユマ君と同じ様な事が出来なきゃいけないって言うのは、鬼虎を持っていないといけないわけ……対の鬼……』

「『天龍鬼』……！！ まさか、アーヌ……！！」

『だとしたら、僕等はどうやって、対処すればいいんでしょうか？』  
ヨデイが叫んだ。

「先の先だ！ アーヌに、何か仕掛けられる前に動くしかない！」

「いや、もうお前は、先の先を取ることは出来ない。だが、ありがたく思え。他の艦でなく先ずお前を倒す事にした」

声のするほうを振り向くと、そこには宿敵アーヌが空中に浮かんでいた。

「それは感謝の至り……」

「ゆくぞー！！」

アーヌが居合い宜しく天龍鬼を抜き放ってきた。

「くっ」

アシユマはゴンドラを飛び出て何とか難を逃れた。

「我が飛ぶのは暗雲の空

戦の女神を犯してもぎ取る

その背の羽根は既に漆黒

我が背に添えて我が羽根に

「……………」

「呆れたものだ。今頃ウイングか……我と天龍鬼のつながりを忘れるどころか、攻撃に遅れを取り、必要な呪文も唱えていない、なんと嘆かわしい」

アーヌはアシュマの師匠のような事を言ってきた

そして八双に担いだ天龍鬼を振り下ろしてきた。

アシュマは鬼虎を上を抜きざま天龍鬼を弾いて何とか凌いだ。

だがアシュマは風に煽られて黒龍号から落ちてしまった。

「アシュマさま！！ 何故ウイングを唱えないのアシュマさま！？

……ヨデイ様、私出ます」

アーチエルはうるたえ半球板から手を放そうとさえた。

『だめだ。出るんじゃない！ アーチエル！』

アシュマはインカム越しに会話をしてきた。

「でもウイングが……」

『アーチエルうるたえるな！ これは俺の誘いだ！ 現にアーヌは、

直ぐそこまで来ている』

そしてアシュマは続きの呪文を詠唱をした。

「……………」

そして散るかなこのわが身

禁忌を犯して我が翼となれ

「……………」

あとは、トリガーキーの発声のみとなった。

アーヌはアシュマが、黒龍号からの落下のショックで気を失った  
とでも思っているのだろう。

こんな決着の付け方が一番嫌いなのがアーヌのはず。

必ず追って来ると踏んで正解だった。

だがアシュマは生への執着と死の恐怖を感じていた。

下手をすれば自分は落下して死んでしまう。

若しくは落下を途中で止めてもアーヌの手に掛かり死んでしまう。  
生き残るには……？

アシユマはそこまで考えが思い及んだ時アシユマの意識は……  
飛んだ。

真っ白になった。

無の世界だ。

手には一振り、鬼虎があった。

眼の前には天龍鬼を振りかぶったアーヌがいた。

胸がから空きで隙だらけだと思った。

だから鬼虎を水平に……普通に薙いだ。

普通に。

するとアーヌは身をよじって鬼虎をかわそうとしたが、叶わず横腹を三分の一ほど切り裂かれていた。

そこで初めて

「ウイング」

と、無意識に唱えた。

地上から一メートル半。

地上に激突するまでギリギリの所だったのだ。

アーヌの方は逆に地面に激突していたが、そちらのダメージは少ないようである。

「そうか。無想剣か。最後の境地に達しようとしておるな」

「最後の境地とは？」

「本当に……そう言うのか？ あそこまでの攻撃を……ワシに……して、おいて」

「あそこまでの攻撃？ 俺はよくは覚えていないが？」

「……無想剣たる所以か……さあ、殺せ」

「いや、それよりも大事な用がある」

アシユマは上を見た。

艦隊戦が始まっている。

「我に二度も生き恥をさらせと言つのか？」

「済まぬがそうしておいてくれ。真に相済まぬ」

「おのれ！ アシユマ・アトー二度と……二度と許さぬぞ！」

アシユマは上を向くと、ウィングを行使して上空へと向かって飛んで行った。

艦隊戦はほぼ互角の勝負だった。

双方四分の一程度の戦闘不能艦を出していた。

アシユマがそこへやって来た。

味方を救う為にある。

アシユマはまた念導境界面を敷いた

「ヨデイ、ヨデイ！ 無事かッ？ 健在かッ!？」

アシユマは空中を高く昇りながらインカムに向かつて叫んだ。

見るとかなりの数の敵魔導機兵が入り込んできている。

『……ですよ………』 健在ですよ……』

アシユマのインカムに通信が入ってきた。

「ヨデイかッ!? 無事か？ 皆は？ アーチエルは？」

『皆、無事ですよ』

「そうか。よかった」

『アシユマさまは無事ですか!？』

ヨデイに代わって、アーチエルが向うの通信口に出ていた。

「大丈夫だよ、アーチエル」

『よかった。よかった……』

アーチエルは両手で顔を覆って泣き始めてしまった。

「アーチエル、大丈夫だから。直ぐそばに行くから、少しの間だけ待っていておくれ」

『うん』

およそ王族らしからぬ返答の仕方だった。

だが今のアシュマにとつてはそのほうが好感が持てた。アーチエルの素直な気持ちの表れと取ったからである。

『ね、姉様、わら、わらわにも……怪獣、無事か？』

「キユポアか。無事だ」

『こら！ あまり皆に心配を掛けるような事をするなあ！』

「すまん」

『済まんて済んだら警護方はいらぬぞ！ よいか、必ず無事に帰ってくるのじゃ！』

「相分かった」

アシュマはオロ艦隊を後に背負い、鬼虎に手をかけそして一気に引き抜いた。

幾千条の光の束がイーチャイルド艦隊を襲う。

次々艦隊を貫く光の線。

艦隊は次々と爆発していくイーチャイルド艦隊。

その中で旗艦イオウウデイスは難を逃れた。

……いや、アシュマの攻撃の九割がたは弾いたようである。

かなり良質の魔導師を何人も抱え込んでいるかのようにも思える。

だがネリア・クーシ・カハデクサンの後には、オルバニアンとアルミナが、いつか見た不思議な喋る箱……聖櫃が鎮座してあった……。

アシュマも、攻撃が効かない敵が居る事に気が付いていたが、先にこの戦いを終結させるほうが先であった。

オロの艦隊では、敵魔導機兵に制空権を握られていて少々うるさい事になっていた。

が、帰るべき艦隊を失って右往左往し、オロ側の艦に次々と打ち落とされた。

若しくは、オルバニアンかアルミナのラヴァーに撃墜される。

あるいは投降を申し出たりする結果となった。

こちらの状況も終了しつつあった。

旗艦イオワウデイスはそのまま逃げ出していた。

オロは、戦闘が終わり、シャワーを浴び、バスローブのまま、軽い食事と酒を嗜んでした。

テレビのスイッチを何気に入れてみる。

忽ち目に入ってくるテレビのロール。

「売国奴オロ・エバスに正義の鉄槌を！」

別のチャンネルを回してみる。

「折角このアヘイビアに、平和をもたらず為に来てくださった、神からの使者である法皇様に対して、死を以って出迎えるとはなんと言う大罪！ いつかオロ・エバスに天罰下らん」

また別のチャンネルも、

「悪魔オロ・エバスに神による天罰を！」

確かこの番組は、オロがメインスポンサーの番組だったはずだ。

そういえばオロ系列のCMが一本も流れていない。

その代わり流れているCMがこれ

「オロを倒して平和な世界を取り戻そう！」

このCMを作ったのは、どうやらイーチャイルドっぽい。参った。

流石にこのメディア展開作戦には。

メディア担当部の部長を呼ぶことにした。

部長がすぐさまやって来た。

既に対応には着手しているという。

内容もキャッチコピーも満足のいくものだった。

メディア担当部長をもどし、激励し自分も鼓舞した。

が、イマイチ足りないので、ヨディを呼んで着にしようと考えた。が！

やって来たのは黒龍号の面々。

仕方がないので、自分を肴にサケを飲みだした……

「大体だ、諸君！ 敵がプロパガンダで来るなら来てみる！ こちらだつてプロパガンダの一つや二つ……いや、十や二十すぐさま用意してやるさ！」

オロは既に出来上がりつつあった。

「それ以前に、この戦争だつて、仕掛けさせるように仕向けてきたのは、向こうじゃないか！！ それをどうして、自分の軍隊を使って、戦争なんかしなければ行かないんだ！！ 消耗するんだよあれは！ 自分のところでは！」

「で、オロ、自分のところのキャッチコピーはなんだよ  
オルバニアンが言った。

「さつきまで思いついていたんだが忘れた」

「なんだよ、オロ、そんなんで勝てるのかよ!？」

オルバニアンも出来上がりかけている。

「確かにこれじゃあ、めげるわな」

ヨデイがテレビ画面を見ていたら矢張りオロを貶めるプロパガンダの山、山、山。

中にはオロ側からイーチャイルド側へ寝返るのを奨励するCMまである。

ニュースの中には、本当か嘘かは分からないが、オロの商品の不買運動まで起きている……と言う事らしい。

だが、オロの部下の報告ではオロの商品が、生活の根幹に関わる所まで根を張っているため、不買運動はイマイチ盛り上がりに欠けるという。

テレビでは、オロと言う人間のドキュメンタリー番組を放送していた。

途中

「ふむふむ」

とか、

「こんなのは私ではなあい！」

などとオロが騒いで見ていた。

総じて見るとオロの誹謗中傷のための番組だったように見受けられた。

最後にニュースの特集番組で、怪光線を放つ謎の男としてアシユマが取り上げられた。

流石に顔写真を載せることは出来なかったようだが、こちらの誹謗中傷も中々の物で、先のマリク紛争の謎の光球を引き合いに出し、イーチャイルド艦隊を攻撃するのはこれに匹敵する悪行だとして締めくくっていた。

キュポアとアンとコクレトは、あれを引き合いに出すとは、全然無関係ではないかと憤慨していたが、それを聴いていた当の本人が平然とした顔をしていた。

これがプロパガンダなのだと言う思いが、アシユマにはあったからである。

しかし、その他理由を知るメンバーは、何も言う事が出来なかった。

憚ったのだ。

そして会は、お開きになってしまった。

が、何だかんだ言って、盛り上がった会だった。

皆オロの部屋から退き始めた。

最後にアシユマが部屋から出るときに、オロが、

「人間、汚名に耐えるというのは辛い事なのだな」

と、言った。

アシユマは何も言わずに……何も言えずに、その場を去った。

イーチャイルド家方面より艦隊が現れた。

艦数はおよそ六十。

どうやらこれが本隊のようだ。

急ぎ艦隊が発進していく。

黒龍号もオロ邸前から発進していく。

アシユマはインカムをつけてゴンドラを上っていく。

アシユマは、風に身体を預け、革のジャケットが大きくなびいた。その時鬼虎の鯉口がひとりでに切られた。

「ん？ 何か来るのか？ 鬼虎よ」

その時、

バチッ！

と、言う音と右の脇の後に強い灼熱感を覚えた。

音がしたほうを見るとアシユマの念導境界面で焼け焦げた蜂のロボットが落ちていた。

恐らく七賢人側の小型ロボットの蜂と思われた。

確信は無いが……。

「うっ……」

アシユマはその場で意識を失った。

「！」

異変を察知したのがアーチエルだった。

「ヨディ様！ アシユマさまが、一大事に御座ります！ ゴンドラを降ろしてくださいませ！」

「アシユマ君が？ まっさかあ。またまた……」

「はやくー！！」

「うひょっ！」

ヨディは、アーチエルの剣幕に押されてゴンドラを降ろした。

降りてきたゴンドラには、アシユマが手すりに寄り掛かって、ぐったりしていた。

アーチエルはエナジアのバーに手をかけて、

「アシユマさまっ！！！」

叫んで飛びついた。

「アシユマさま！ アシユマさま！！ しっかりして下さいー！」

アーチエルは半泣きになりながらアシユマを呼んだ

「き……こえ……て、いる」

「！ 怪獣が倒れたって……？」

キユポアがブリッジに飛び込んできて、泣きそうになりながら言った。

「騒ぐな……」

アシユマは息を切らしながら、苦しげに言った。

そしてアシユマはアーチエルの耳元で囁くように何かを言った。

「何を言っているのですか？ 半病人なのですよ！？ アシユマさ

ま！！ 戦うなど出切るわけないではありませんせぬか！！」

アーチエルはもう殆ど泣き声に近かった。

アシユマはまたアーチエルの耳元で再び囁いた。

「だからアシユマさまは戦えないって…… ヨデイ様に何を訊くんですって？ …… ルーンの黙示録？」

視線が急にヨデイに集まった。

ヨデイは操縦をしているので、後ろを向くわけには行かなかったが、背中にひしひしと視線を受けてやり難そうだった。

「あゝこの節ですね…… 『二人の黒き野心家相容れず、ぶつかるだろう。この時も祝福されぬ命の者、一方の野心家の盾となり、矢とならん。病に伏せるもその役目は果たすだろう。その働き悪魔の如し』ですね」

アシユマがまた何かを囁いた。

「戦わせてくれ！？ …… 駄目よアシユマさま！ 絶対安静ですからね！」

アシユマは続いて呟く

「…………… 艦隊なんてアシユマさまが心配する事ではありませんせぬ！

！ …… 恨む！？ 恨むとおっしゃったのですか！？ わたくしに

！？ 戦わせてくれないから…………… って…………… いいです！ 好きだけ

御恨みなさい！ 恨まれても…………… ぐすつ。私は…………… ぐすつ」

「分かった…………… ヨデイ、はあ、はあ。…………… ゴンドラを上げてくれ…

……………」

アシユマはやっと自分の声で会話をした。

アシユマは業を煮やしてついにヨデイにゴンドラを上げるよう直

接頼んだ。

「……………」

ヨデイは沈黙を守った。

彼もまた思い悩んだのである。

「駄目よ、ヨデイ様！ アシユマさまを行かせては！」

「ヨデイ……………はあ、はあ」

「ヨデイ様！」

ゴクン！ と、言う音と共にゴンドラがゆっくり上に上がっていき、

咄嗟にアーチエルもゴンドラに上がる

「アーチエル！」

アシユマが驚く。

こんな行動的なアーチエルは中々見られないからだ。

ヨデイは艦隊の先頭へと急いだ。

今のごたごたで遅れた分、急いで取り戻さないと、いつ戦闘が始まってしまつか分からないからだ。

瞬く間に黒龍号は艦隊の先頭に立った。

ゴンドラの上では、アシユマがアーチエルに、支えられるようにして立っていた。

敵の艦隊が見えてきた。

鬼虎の鯉口がひとりでに切られた。

「敵の……………攻撃が来るぞ……………。危ないから……………離れてろ……………」

「大丈夫です！」

アーチエルは気丈にもそういった。

敵のプラズマキャノンがオロ艦隊に襲い掛かってきた。

その攻撃の全てをアシユマの念導境界面が受け止める。

四方から電光が鬼虎の鯉口目掛けて走ってくる。

それらが全て鬼虎の鯉口内に吸い込まれていく。

それは、アーチエルがアシユマを支えている側で起こった。

「きゅあっ！」

アーチエルは後方に吹き飛ばされた。

そして後のゴンドラのバーに、腰をしたたかに打ちつけられた。

「ああっ！」

「大丈夫か？ アーチエル！」

アシュマはパートナーの身を案じた。

「……大丈夫です。それよりアシュマさまは？」

「大丈夫だ。アーチエルは下に下りるのがよい」

「いえ、大丈夫です。是非ともアシュマさまのお側に……」

アーチエルは再びアシュマの側についた。

「強情な娘だ」

「せめて芯が強いと仰ってください……」

アシュマは鬼虎を抜いた。

これでアーチエルにとって電光の吸収時のショックは緩和されるはずだ。

そしてアシュマは鬼虎を振るう時が来た。

アシュマは右手一本で左の脇構えをし、車に鬼虎を振るった。

幾千条にも光の束がイーチャイルド艦隊へと伸びていく。

が、それらはイーチャイルド艦隊の真ん前で弾かれて消えてしまった。

「！」

アシュマは驚愕した。

そして警戒した。

アーヌを。

しかしその気配はなかった。

しかしその代わりに、強力な念導波攻撃がやって来た。

アシュマの秘剣・蛭や三日月などと同質の物である。

アシュマは必死に堪えた。

堪えたが、堪えきれずにアシュマの念導境界面にほころびが出来、僚艦十二丁三隻吹き飛ばされた。

「アシュマさま……！！！」

「ああ、こんな事は初めてだ。どうやら、相手はアーヌ以上の念の持ち主らしい」

「アーヌ様以上の……」

「ああ。そして多分そいつは敵の旗艦にいる。強い念を感じる」

「効果ありだぞ！ 流石だ……」

旗艦イオウウデイスのネリア・クーシ・カハデクサンは色めき立った。

この効果の元は一体どこにあるのか？

ネリア・クーシ・カハデクサンの後には聖櫃が鎮座していて、ネリアは後を振り返り聖櫃を畏敬の念で見ている。

聖櫃がどうやら念導境界面を張り、強力な念導波攻撃を仕掛けてきたようだ。

そしてアシユマはアーチエルに支えられて敵の旗艦に向けて気弾を飛ばそうとしていた。

「アシユマさま、大丈夫ですか？」

「大丈夫でない……と言ったところで、向こうが容赦してくれるわけもあるまい？」

「それはそうでしょうけれど……」

「それよりアーチエル、お前の支えが必要なようだ。頼む」

「分かりました。こうですか？」

アーチエルはアシユマを下から持ち上げるようにして支えた。

「そうだアーチエルしばらくそのまま我慢してくれ」

アシユマは言った。

非力なアーチエルのことだ。

この体制も長くは持つまい。

一発で相手を倒さねばならないだろう

なるべくギリギリまで気を練らなければならぬだろう。

「アシユマさままだですか？」

「ア、アシユマさま……まだですか？」

「ア、アシユマさま……」

「も、もう……だ……め……」

アーチエルに限界が来たその時、アシユマは

「ふっ！！」

無言の気合を発して気弾を放った。

それは、光の矢のようでもあった。

気弾は、謎の者が発する念導境界面にぶつかり、弾き飛ばされそうになりながら、最後には中へねじ込む様に入り込んで、はじけた。そして、旗艦イオウデイスは、艦の頭から艦の最後尾までを貫かれ、大爆発を起こした。

その時にブリッジが切り離されてサイコ・フライヤーとなり、この戦域から脱出した事など、アシユマに気付く余裕はもうなかった。ただ立って、念導境界面を張るのに精一杯だった。

それだけでも戦局的には全く違った。

アシユマの念導境界面のお陰で、敵からの攻撃は全く受けなければ、こちら側からの攻撃は仕掛け放題なのである。

これほど有利な事はなかった。

敵艦隊は損害が二分の程度出たところで引き返して行った。

オロ・エバス艦隊の勝利である。

アシユマは汗だくでゴンドラから降りて来た。

「アシユマさま？ ひどい汗よ？ 大丈夫？」

アーチエルが心配になって訊いた。

すると当の本人は、

「もう大丈夫だ。毒気は抜けた。シャワーを使わせてもらう」

アシユマは言った。

その後をアーチエルが追い、

「アシユマさま、病ではなく毒だったのですか？」

と、訊いた。

「すまなかつたな、アーチエル。さっきは助かった。俺一人ではどうしようもなかった」

アシユマはそう言ってアーチエルの頭を撫でた。

「アシユマさま……」

アーチエルは、アシユマの役に立てたのが、そんなに嬉しかったのか、頬を赤らめ目を潤ませた。

オロの戦評定では、イーチャイルドに、余剰な戦力を残したままで放置しておくのは危険として、討伐に打って出る事になった。

ただし今回アシユマと、ヨデイは戦闘に参加できない旨を皆知らせた。

評定には、アシユマの能力を高く評価する向きが現れ、今更ながらアシユマが戦闘に出ないことに対する不安感、と、言うものが募っていた。

だがアシユマは、毒のダメージが残っていたし、アシユマのいない黒龍号など意味が無かったからである。

今回は予備戦力の艦艇投入し、全て含めて総勢六十隻を発進させる事にした。

早速、善は急いで艦の編隊が済むと、夕日を背景にオロ艦隊は発進して行った。

イーチャイルドの屋敷では、ネリア・クーシ・カハデクサンとイン・イーチャイルドそして聖櫃が脱出を図っていた。

聖櫃は先程の艦隊攻防戦で、強力な念導境界面を張っていた。

このような『箱』に一体何の秘密があるというのだろうか？

ネリアは黒尽くめの者たちに、

「こんな屋敷や艦隊などどうなっても構わんが、一艦でも一人でも道連れにしる。良いな？ 私はしばらく姿を隠す」

と、言っていた。

黒尽くめの男も

「畏まりました」

と、言った。

ネリア・クーシ・カハデクサン達は高速型のサイコ・フライヤーに乗り、イーチャイルドの屋敷を後にした。

オロの艦隊は丁度、イーチャイルドの艦隊が再編成されている所に、出くわした。

イーチャイルドが世界中に配備している艦艇をすべて集結させ、最後にもう一太刀オロに仕掛けようとしていたのだ。

数は凡そオロ艦隊の二倍。

だが、間が悪かった。

ばらばらのイーチャイルド艦隊はオロ艦隊のいい的ではなかった。た。

この時点で勝敗は決していたと言っても過言ではないだろう。

オロの艦隊はイーチャイルド艦隊を全滅させ、イーチャイルド邸宅を抑えた後、そのまま二手に別れ国防総省と大統領官邸の上空を占拠し、そのまま無条件降伏を迫った。

暫くの沈黙の後、アヘイビア政府は明け方には無条件降伏を認めた。

ここで改めて国元連総会を開き新国家として独立を認めること。

オロの資産の凍結は破棄すること。

後は追って沙汰する事。

オロは以上の事を要求した。

アヘイビアを自分の国家とすることには何故か興味が湧かなかつた。

意味がないからであろう。

オロの欲求は唯一つ利潤の追求だけであるからだ。

『その後一人の野心家もう片方を追いかけてこれを撃ち滅ぼす。黒き野心家鷲の巣の中からひとり立つ』

ヨデイは一人これを呟いた。

(矢張り世界はルーンの黙示録を中心にまわっているのか？ このままでは『是にて新生人類は滅亡する』事になってしまう。この滅亡は回避できないのか？)

ヨデイは人知れず暗たんたる気持ちに陥っていた。

## 終節 アシユマの危難

黒龍号はいま、スコラに在った。

それは、今一度学内の様子を見たいとアーチエルが言って実現した。

そして、一週間の滞在が決まった。

今はミカ達とミス・ケリー・サトウと校内を見て回っていた。

あの時には気付かなかった、戦闘の惨禍がありありと残されていた。

「結構傷跡が残されているのね」

アーチエルは残念そうに言った。

「でもミカさんたちが無事でよかった。だって、死んだら何にもならないもの」

「有難う。アーちゃん」

「もう直ぐ冬期休暇だよな？ みんなはどうするの？」

アーチエルはスコラの皆と居る時、口語がより砕けたものとなっていた。

本人はそれに気付かないようで、平然として喋っていた。

勿論それには周りの者も気が付かなかった。

ただ、ミス・ケリー・サトウだけが気付いていたが、それには気が付かないふりをしていた。

「冬期休暇の前半はここに居る事にしたの。だってその分、アーちゃんと一緒に居られるでしょ？」

「実家には？」

「アーちゃん達が帰ったら私も帰るの。そうしたらちよつと二年参りができるでしょう？」

「ニネンマイリ？」

「ああ、御免ね。知っているつもりになっちゃって。もう、アーちゃんもイーハンの人みたいな気がして……」

「ほかのみんなは？」

アーチエルが訊いた。

「そうねえワタクシは……」

サクラコが話し始めた。

「矢張り実家に帰るのはアーチエルちゃんか帰ってからね。後は実家に帰ったら年賀の挨拶を受けないと……」

「ネンガ？」

「ああ、儀式みたいなモノよ。流して、流して」

「アシユマさまは、このこと分かるのかしら？」

「イーハン出身だもの。大晦日とお正月ぐらいは知っているんじゃないかな？ そう言えばアシユマ先生は？」

ミカが訊いた。

「ああ、アシユマさまは書庫に行ってるわ」

「ヨデイ先生とかは？」

「ああ、ヨデイ様とエファールさんとオルバニアン様とアルミナさんは買い物に出かけているわ」

「そう……」

「あら？ キュポアとリイナだわ」

アーチエルが気付いた。

すると向うもキュポアが気づき、手を振りながらこちらに走り寄ってきた。

「これ！ 廊下は走るんじゃありません！」

ミス・ケリー・サトウがキュポアとリイナに注意していた。

仕方なく二人は歩いてきて、アーチエル達と合流した。

キュポアは細長い何かを布に包んだ物を持って、リイナは体操着とブルマを大量に持っていた。

「な？ うちの購買部の親父に、頼んでもらって正解だったろ？」

リイナが言った。

「おお、あそこの親父は、中々マニアだったのう……銃の」  
キュポアが受けた。

最後のほうは声を潜めて……。

「なにが、マニアだったの？ キュポア」

「ああ、姉様。なんでも無いのじゃ。何でも。のう？ リイナ？」

「なんでも無い。気にするな。アーチエル」

リイナも口を揃えて言った。

「ふうん……」

アーチエルは、もう既にそのことには関心は無いようで、再びミカとの会話に没頭していた。

「キュポア様とリイナとアーちゃんは今年の年末年始どうするの？」

ミカが言った。

「私の国は大護摩を焚くの。家族総出でお寺へ行くの。そこでは王家、そうでない者のわけ隔てなく皆揃ってお出かけして、そして大護摩を焚いて、一年の無事と安泰と家内安全、無病息災、豊作などを祈願してくるの」

「ふうん、なんかイーハンと似たような事をするのね。大護摩焚きイーハンにもあるよ。あと私達はおせち料理とか食べるのよ」

「本当？ なんかいいなあ、イーハンで。年末年始楽しみがいっぱいありそうで」

「楽しいよ？ 来る？ そうだ来ない？ 今度の年末年始？ たのしいよ〜」

「今度は無理そう。いつ緊急出勤掛かるか分からないし……」

「え〜？ 姉様あ、そんな事言わずにミカん所、行こうよう。わらわ達の正月よりも楽しそうじゃし……」

キュポアが駄々をこねた。

「私も行きたいけれど、再来年にしましょうね。今年と来年はちょっと無理そうだから」

「ぶ〜〜〜」

「それよりもこの長い物は何？ キュポア。振り回すと危ないから気を付けなさい？」

「は〜い」

アーチエルはこの時点でこの長物が何かを思い出せないで居た。

アシユマは最後の点検の為書庫を訪れていた。その時、殺気に似たものを全身に感じていた。

書庫全体が殺気に包まれた。

アシユマは瞬時に戦闘態勢をとった。

『流石だな。我が殺気に気づくとは。決着の時だ。アシユマ・アト  
ー。校庭にて待つ』

「ゲールか……」

そして殺気は消えた。

アシユマは校庭に来た。

「ゲール！ 約束どおり校庭に出てきてやったぞ！ 出て来い！」

アシユマが校庭の真ん中で叫んだ。

生徒達は何事かと窓から顔を出す。

一陣の風が吹いた。

そして土煙と共に舞った。

土煙の中からゲールとラナリアが現れた。

「待たせたな」

「いや、構わんが」

「始めるか」

ゲールは言った。

「ああ」

アシユマが応じた。

不意にゲールが持っている剣で、攻撃を仕掛けてきた。

アシユマは鬼虎を抜きざま敵の剣を弾いて難を逃れた。

が、相手の対応が早く、こちらでは追い切れるか追い切れないか、紙一重の所だった。

「ほう、俺の攻撃速度に追い切れているとは流石だな。ブースト並みだぞ？」

ならばとアシユマは、

「アーゲーゲー、ゲーアーゲー、ゲーゲーアー……」

呪文を唱え始めた。

すると、ゲーレも、

「汝清らかなる声音持つ乙女よ。

我と血の盟約を結ばん。

幾星霜の刻超えて

今、汝の声音貰い受ける。

サイレント……」

呪文を唱えてアシユマの呪文を封じてしまった。

（しまった！ こう言う手で来るとは……！！ コーレルアハープも切らせている。これではブーストが使えない！）

しかも敵の回転速度は上がってきている。

「ほらほら、どうした。段々追い付かなくなって来てるぞ」

アシユマはなます斬り状態だった。

抵抗らしい抵抗なんて殆ど出来ていない。

完全にゲーレの玩具と化していた。

「きゃあっ！ アシユマさま……」

アーチエルが悲鳴を上げた。

校庭のほうへ走りようとした。

それをミカたちが止める。

「何故止めるの！？ お願い！ 行かせて！ アシユマさまが……」

「およしなさい……貴女が行った所で何も変わらないわ」

「私には、マジックアローがあるの！ アシユマさまを助けられるわ」

「あなた、そんな禁呪まで使えるの……！ でも無駄よ。あれだけ

早い動きをされては狙いを絞り込めないわよ」

ミス・ケリー・サトウが言った。

「そんな……じゃあ、アシユマさまは!？」

「運を天に任せましょう」

「そんな……」

アーチエルが絶句した時に、キュポアとリイナの姿はもうそこには居なかった。

アシユマを助ける為に走って行ったのだ。

しかし、それに気付く者など居なかった。

「くくく……これはオイーダの分」

ゲールが言つてアシユマはまた切られる。

「これはハイネの分」

アシユマはまたなます切りに斬られる。

「大分いい様になってきたな。アシユマさんよ」

ゲールはアシユマを甚振って遊んでいた

「くそつ、もう少し止まっておいてくれればのう」

キュポアがサイトスコープを覗きながら言った。

校庭に寝そべり脚を開いていた。

「大丈夫なのか？ 自信はあるのか？」

リイナが言ってきた。

「止まればな」

キュポアが受けた。

「……なら止めてみるか？」

「どうやって？」

「一発足元に脅して撃つてみるといふのはどうだ？」

「成る程、それは良いのう」

アシュマの身体は出血がひどく、アシュマは意識が混濁してきた。  
(くそっ！　せめて後一太刀でも……)

「そろそろ止めを刺すか」

なんと、その時ゲーレの動きが止まった。

「止まってくれたではないか、行けッ！」

キュポアは、キュスレフ対魔導機兵用ライフルから、十四・五ミリ口径念封弾を発射した。

ドン！　と派手な音がした。

アシュマも好機と見て、身体を動かそうとしたが、出血が激しく、思うように体が動いてくれない。

「！……ゲーレ！　危ない！」

ラナリアが叫んだ。

「？」

ゲーレは最期、疑問に思っただろう。

何がそんなに危ないのかと。

が、彼は次の考えを凡そ考え付く前に、頭を撃ちぬかれた。

いや、ゲーレの頭蓋は上半分が弾け飛んだのだ。

ゲーレは見事に即死した。

「いやあああっ！！！」

叫んだのはラナリアだった。

彼女はゲーレを撃つた者に対して思念波を送った。

『死』と言う概念の詰まった憎しみの思念を。

「あうっ！　ぐっ！　ぐあああ……」

これを受けてキュポアは苦しみだした。

「う、うう、死……死んじやう……」

「あいつか！　アイツだな！　キュポア、まってる！　今アイツを倒してきてやる！」

リイナはそう言って、脱兎の如く駆け出した。

見る見るうちにラナリアとリイナの距離が縮まっていく。

ラナリアはキュポアに精神攻撃を掛けるので精一杯だ。

リイナの事など気付く余裕はない。

リイナはラナリアに駆け寄りククリを引き抜き跳んだ。

そして、ラナリアとすれ違い様にラナリアの首の血管をククリで斬った。

血管からは血が吹き出し、ラナリアは崩れ落ちるようになってしまう。伏せに倒れた。

倒れた体がぴくりと動いた。

少しでもゲールの側へと、地を這いながら向かって行った。

ラナリアの手がよいよいよゲールの手に届くかと思われたとき、ラナリアは力絶え、意識を失い絶命した。

「アシユマさまっ!」

このときやっとアーチエルが、アシユマの元へ駆けつけた。

「アーチエル、アシユマを頼む。私はキュポアの様子を見てくる」  
リイナは言った。

「え? え、ええ」

その後、アシユマはアーチエルに蘇生措置をしてもらい一命をとりとめ、キュポアは意識を取り戻した。

キュポアには思念波による攻撃の後遺症は一切見られなかった。

「面目ない」

アシユマは切り出した。

「アシユマ君らしくないミスでしたね」

ヨデイが言った。

ここは黒龍号のブリッジである。

買い物を買ったヨデイ達が、丁度、戻ってきた所であった。

「どーせ油断でもしていたんじゃないの?」

オルバニアンが突っ込んだ。

「うっ……」

アシユマは痛い所を突かれたらしい。

「ああ、アシユマの切り刻まれた所を見たかったわあ。きっとそれを見ただけでいっちゃんいそうだわあ」

エフアールが恍惚とした表情で言う。

「エフアさん！」

「わっ、御免、アーチエル」

「ところで、どこに行っちゃうんですか？」

アーチエルは不思議に思った。

「この子は……そろそろ教育でもしましょうか？」

「えっ？ それだったらアタシも混ぜて？」

アルミナがすかさず言う。

「あっ、じゃあ僕も僕も！」

ヨデイが手を上げる。

「男子禁制」

エフアールが言う。

「ちえっ」

外からのブザーが鳴った。

来客のようだ。

オルバニアンが対応する。

何があるか分からない用心するに越した事はない。

オルバニアンは、

「はい、どちら様でしょうか？」

「夜分大変不躰で恐縮致します。スコラのケリー・サトウ他、生徒

が若干名……」

「ああ、校長センセね。お待ちしてましたよ。さあ、どうぞ  
後部ハッチを開いた。

「きゃあ、これが黒龍号の内部なかなのね」  
ミカだ。

「まあ、これが本当に戦闘に出た船なのね」

サクラコが驚いている。

「なんか、いいにおいさせてる。これからご飯？」

エミルが早速においを嗅ぎ付けた。

「エミルう、そんな事言わないでよ。恥ずかしいからあ」

そう言ったが、ミカの腹の音が鳴った。

周りがどつと沸いた。

ミカは顔を真っ赤にして俯いた。

が、直ぐに気を取り直して、

「ほ、本日はお招き頂き有難う御座います！ 本来ならばアシユマ

先生大怪我の下、お招きをご遠慮すべき所を、厚かましくも参上し

恐縮の至りです」

と、言った。

すると、アーチエルが、

「本日の招きに来ていただいた事、大変嬉しく思います。本日は、

我が黒龍号クルーの一人アシユマ・アトーの快気祝いも兼ねまして、

皆さんと楽しい夕べを共に致したく思います」

と、言った。

「ささ、堅苦しい事は言いつこ無しで今日は無礼講でござんとい来

ましようー!!」

ヨデイが仕切った。

昼間ヨデイ達を買いだしに行っていたのはこれの為である。

「さ、今日は『ナベ』ですよ。皆さん『箸』は使えますね？ 大

丈夫ですね？」

皆にかいがいしく言って回るヨデイ。

「そうだ！ アーチエル王女、キュポア王女、正式にお父様よりミ

カさんのお家への滞在が許されましたよ。よかったですね」

ヨデイがそう言った。

「本当ですか？ ミカさん、やった！ 嬉しい！」

アーチエルが喜ぶ

「アーちゃん、よかったーっ！ 私も嬉しいよーっ！」

ミカも喜ぶ。

「姉様！ これであの辛気臭い年末年始から解き放たれるの！」  
キユポアは変な喜び方だ。

「これ！ 辛気臭いとは何という事を言うのですか」  
キユポアはアーチエルに叱られた。

それでも、キユポアはリイナとなにやら話して喜んでいる。

エミルにキユポアが何か行っているが、エミルはどうやらミカの家にはいけないらしい。

お見合いがあるらしい。

アーチエルもサクラコに何か言っている様だが、お家の事情で駄目らしい。

残念そうな二人である。

が、直ぐに気を取り直して楽しく会話していた。

アシュマはそんなアーチエルを見て楽しくもあり、嬉しくもあった。

皆、楽しく歓談し、食し、飲んでいた。

そんな中キユポアが席を立ちアシュマのところに来て来た。

「？」

「こりゃ、怪獣！ 校庭のど真ん中で、皆を心配させるような事をするなあ！ わらわがおらなんだらお主、今頃死んでおったぞ！」

「……すまん」

そうとしかいえないアシュマであった。

「全く本当ですよ？ アシュマ先生。全く貴方ときたら無茶ばかりをして、他の生徒に示しがつきません」

こちらはミス・ケリー。

もう、出来上がっているらしい。

こちらにも頭を下げた。

アシュマの隣に何故か鎮座してしまっている。

ミス・ケリーはどこかアシュマを息子のようになっている節があるらしく、その叱り方は母親のようだった。

「ご尤も、ご尤も」

アシユマは、全く頭が上がりぬ事が多いと思っていた。

「アシユマさま！ さっきのあれは……」

最後にアーチエルが来た。

アシユマは一番頭が上がりぬ者が来たと思った。

第九話 了

以下続刊

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5741f/>

---

デュエリスト アシュマ 第九話 黒き卵を巡る旅

2010年10月8日14時53分発行